

544  
132

6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



2.23

81

概

書叢門入藝文

編 十 第

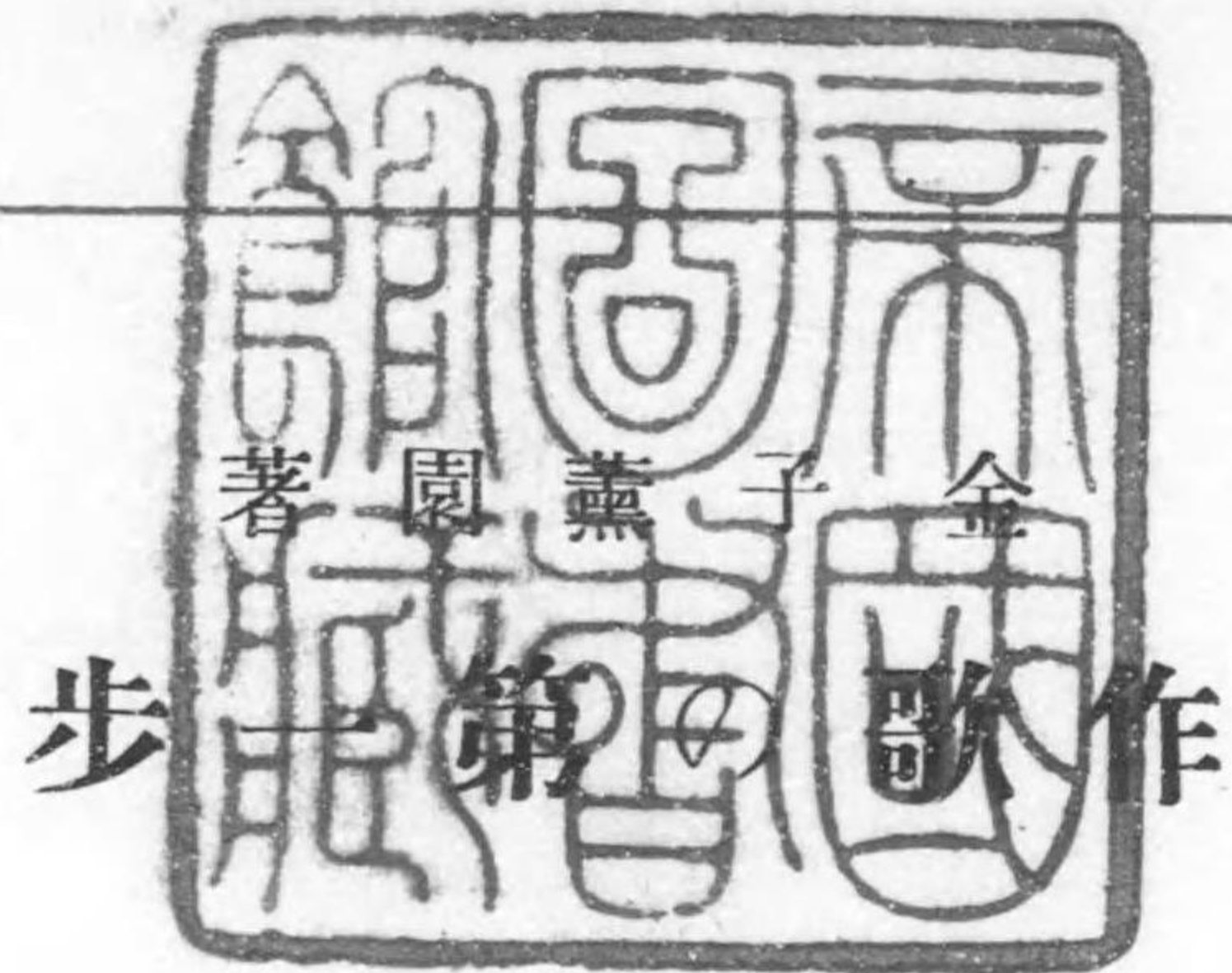
步一第の歌作

著 園 薰 子 金



落合直文

版 出 社 潮 新



書叢門入藝文

10

版出社潮新

1926

大正

15. 10. 14

內交



## 『作歌の第一歩』序

歌の民衆化といふことは久しく私の唱へて來た主張であつて、これを言論の上に發表したことも度あつたし、初心者を導くにも此の主張に基づいて、その人々の個性にしたがひ、出來る丈け、ゆるやかに、自由に、その長處を伸ばさうと期して來た。

本書は此の主張に基づき、誰が讀んでも分るように、誰でも歌が出來るように、一切むづかしい理窟を抜いて、極度の平明さで、實際に、實際に、實際に、期して、説述したのである。本書を讀んで、歌は想つたよりも入りやすいもの、面白いもの、云ふことが分つて、楽しんで、斯の道に入り、めいめい思ひ思ひの境地を歌つて行く人が一人でも多くあれ、そしたら、私の本書を出した志は達せられるのである。

今の歌壇の傾向は餘りに専門的、學究的である。私は専門的學究的の歌人の多く出づることを望まない。社會各階級の人々が皆起つて自分自分の心のまゝを歌ふ民衆的非専門的の歌人の多く出でむことを私は切に希ふものである。

歌は閑人の閑事業でない、一字一句の穿鑿に日も亦足らぬやうな事で、各人各様の、歌はずには居

れの澎湃たる思想感情を何んで披瀝しえられよう。

本書を讀んだ人は必ず作つて貰ひたい、作れない譯はないのである。私は敢て之を言ふ。

大正十五年七月

著者

## 目次

第一部 歌の眞意義	三
一、歌の民衆化	四
二、歌は面白いものか	七
三、歌はどんな時に出来るか	一一
四、新しい境地と同感	一四
五、歌は消閑の具でない	一七
六、目の前の事實	一九
七、言葉は自分の物であれ	二三
八、口語の歌とはどんなものか	二七
九、凝視する力	三〇
一〇、歌は一生の事業	三四
一一、いゝ歌・ほんたうの歌	三七

一二、歌の味ひ方	三九
一三、歌の着眼點	四三
一四、眞情流露と座談平語	四六
一五、倦怠しやすい心	五一
一六、思ひつきの歌を排す	五五
一七、輪郭ばかりの歌	五七
一八、『ただ自然に』	六〇
一九、歌を愛する心	六三
二〇、もつと執著あれ	六六
二一、二つの影	七一
<b>第二部 推敲の方法</b> ……………七五	
一、推敲の實際(一)	七六
二、推敲の實際(二)	七八
三、推敲の實際(三)	八〇

四、推敲の度合	一一一
五、私の添削の實例	一二〇

**第三部 讀むべき歌集**……………一二七

一、萬葉集	一三八
二、古今和歌集	一三六
三、新古今和歌集	一四三
四、曾丹集	一五〇
五、山家集	一五三
六、拾遺愚草	一五六
七、金槐集	一五九
八、平賀元義歌集	一六四
九、草徑集	一六八
一〇、志濃夫廼舍歌集	一六九
一一、海人の刈藻	一七二

一三、萩之家歌集……………一七四

一三、竹の里歌全集……………一八〇

第四部 歌に誤りやすい語法……………一八五

一、動詞……………一八六

- (1) 自他の誤……………一八六
- (2) 上一段活の誤……………一八八
- (3) 下一段活の誤……………一八八
- (4) 終止段連體段の誤……………一八九
- (5) 將然段已然段の誤……………一九〇

二、形容詞……………一九一

- (1) しく活の誤……………一九一
- (2) 「き」「く」の誤……………一九二

三、助動詞……………一九三

- (1) 「らむ」の誤……………一九四
- (2) 「なむ」の誤……………一九五

(3) 「つ」「ぬ」の誤……………一九六

(4) 「なる」の誤……………一九七

(5) 「居れり」「いふ」用語はない……………一九八

(6) 「まし」の誤……………一九九

(7) 「まし」「まじ」の混同……………二〇〇

(8) 「し」「たる」の誤……………二〇一

四、てにをは……………二〇一

(1) 「だに」「すら」「へ」「の」の別……………二〇一

(2) 「に」「へ」の別……………二〇四

(3) 「が」の卑俗な「が」……………二〇四

(4) 「ゆ」の誤……………二〇五

五、係結……………二〇五

(1) 「ぞ」「なむ」「や」「か」の結……………二〇六

(2) 「こそ」の結……………二〇七

六、その他誤り易い例……………二〇八



目次

(1)「な」の誤	二〇八
(2)「なそ」の誤	二〇九
(3)「うっ」の誤	二一〇

六

# 作歌の第一歩

金子薫園著



歌の眞意義



## 一 歌の民衆化

私は歌がもつと一般的になつてもいいと思ふ。歌を民衆的一般的から離して官僚的専門的に取扱ふやうになつてから因襲の久しき、いまだに歌と云ふものを一つの型に入れて、その型の中から脱却することの出来ないものゝやうに思はせる傾きがある。だから、折角歌に興味をもつて、自分もひとつ歌をやらうとする人があつても、先づ浩瀚な古い歌集を讀破してその思想形式用語等を知り悉してからでなければ歌を初めることが出来ないと思ふ考へを持つてゐる人が多いやうである。それは歌を専門的に研究して歌で立たうとする人ならば、さういふ事は出来る丈、正確に詳密に研究して遺漏のないようにしなければならぬが、私はさういふ人をごく少数と見做して、さういふ人の爲めに言ふことは遅らく措いて、廣く一般的に民衆的に誰もが自由に歌を作り歌に親しんで貰ひたいことを唱道するものである。

宮内省の御歌所に年の初め毎に全國から詠進する歌の数が何萬と云ふのを聞いて、或る外國人が日本人は皆詩人であると云つて驚嘆した話は有名な事であるが、その詠進歌なるものが、各自の個性を發揮して、どんなに拙くとも自己の眞心をこめたものなら、外國人の驚嘆するのも尤と聞かれるが、歌はかくくのもの、かういふ方式で詠むべきものと、萬事鑄型かたにはめたやうな、千篇一律

の作であつて、どれもこれも似たり寄つたりの中から一句の言ひ廻しがいいとか二句の言ひ廻しがいいとか云ふ位位のの事で優劣を定めてかゝるのだから、明治の初年でも、大正の今日でも舊態依然として、時代の進展といふ事も國民性の推移と云ふ事も一切お構ひなしと云ふ状態である。

これら詠進歌の作者の大多數は宮内省派の歌風を讃仰し、その下風に立つものであるから、宮内省派の歌の感化がいかに天下民衆に及ぼしてゐるか分る。が、天下民衆と云つてもそれらの人々は多く新時代の教養を受けた人又受けつゝある人でなく、歌は「神代をうけし敷島の道」で、お上品なもの、みやびやかなものであつて、古歌を金科玉條と心得、古人崇拜の夢圓まどかな人々のすさびに過ぎないのである。

私はこれら夢みる人々の覺醒を促したいのは山々であるが、憾むらくは深い夢に落ちてゐる。これらの人々を揺り起す悠長さは、氣の短い私によくする所でない。私がかういふ臭味に浸つてゐる人々よりも、歌は専門的に研究しなければ出来ぬものか、所謂歌らしい歌は多年の修業の後でなければ出来ぬものかと云ふ疑惑のたゞ中にぼんやりと立つてゐる人々に、歌はすぐ今からでも出来る、ぐづぐづしてゐる暇ひまにあなたの身邊の事、あなたの日常生活の中で感じてゐる事を作つて御覽なさい、眼前の即景もとより可い、用語はあなたの今普通に使つてゐる言葉で三十一字にまとめて御覽なさい、少しも憚らずに、極めて自由に、思ふ通りを言葉にして御覽なさいと言つたら、歌はそん

な事で出来るものなら、容易いことらしい、一つやつてみようと思ふ心持になるだらう。更に又、  
「自分は現代人である以上、現代語で歌が作れないわけではない。古い萬葉集が千載の下、燦とした  
光を放つてゐるのは上下擧つて極めて自由な氣分で、當時の現代語を自在に使つて歌うたものであ  
るからである。自分たちは萬葉集がいゝからと云つて直にその時代の古語を復活させて、今の時代  
の人々の自分たちの心持にそぐはない言葉で一首を形造る必要はない。自分自分の個性を明かにし  
た實感實想を自分たちの使ひつけてゐる言葉で現はして行けばいい。」

かう考へれば、歌は決してむつかしいものでなく、自分たちが物を言ふのと變りはないわけであ  
る。私はかうした心持で、誰もが歌に入つて行つて貰ひたいと思ふのである。萬葉集時代の歌人は  
上下を通じ各階級の人々が思ひ／＼の心持を歌に寄せて、それが今日に至るまで光輝を放つてゐる  
尊さは、その時代の人々の心の眞實まことが歌に磅礴してゐるからである。そこに一點虚飾がなかつた、  
匠氣がなかつた。さうして、自からその時代の空氣が集全體に漲つてゐるのが愉快なのである。此  
の素朴な民衆的の氣持が、古今集となり新古今集となるに及んで、官僚的になり、専門的になつて  
來て、何々朝臣と云ふやうな堂上方の玩弄物となつて、蹴鞠管絃の遊戯と變りがなくなつたのであ  
る。此の思潮がもつと向上しなければならぬ歌の進歩を阻止して、因襲の久しき、いまだに一部の人  
心を支配して、大正の現代に古今新古今あたりの夢から覺めないで、うつら／＼としてゐる醜態を

白日の下に晒すのは時代錯誤の甚しいものと言はなければならぬ。

歌を一般的たらしめよ。一切の拘束を離れて各人各様の實感實想を極めて大膽に、極めて自由に、  
自己に親しい、日常使ひ馴れてゐる言葉で發露せよ。これ歌に入る第一の門でなければならぬ。

## 二 歌は面白いものか

『歌は面白いものか。』

斯ういふ意味の問を或人から受けた時、私は言下に『そりや面白い、初期の間は殊に面白い。』と  
言つてやつたら、『それぢや一つやつて見ませう。どうか教へて下さい。』と云ふことで、それから其  
の人は歌をやり初めることになつた。

『歌は面白いものか。』

斯う云ふ問を發した人の心持はどんなであつたらうか。私は今靜かに其の時の心持を考へてみる。  
其の人はただあつけらんかと、こんな問を出したんぢやあるまい。いかにも突如として居るが、此  
の問を出すまでには何か動機がなければなるまい。どんな動機があつたらう。

其の人はこれまで歌のうの字も知らなかつたことはなからう。ちよつと位ぬ、古人の歌を口吟さ  
んだこともあつたらうし、又今人の歌を讀んだこともあつたらう。然うして何かしら興味を覺えた

に違ひない。それから又友達か何か歌の話をするのを小首を傾げて聞いたこともあつたらう。そして歌と云ふものは、何か面白さうな気がしたことがあつたらう。併しそれは甚だ稀薄なものであつたに違ひない。斯くして若干の月日が経過した。或る日のこと、雑誌か何か某氏の歌の話が出てゐたのを、見るともなしに見ると、歌はどの位心の慰めになるか知れない。殊に繁劇な事務を執つてゐる人などには、其の境遇を境遇として親しみ安んずると云ふやうなことが書いてあつた。彼は日々或る會社に出てゐて可成り煩雜な務めを執つてゐた。眼は疲れ手は勞れて夕方歸つてくると、もう何をするのも厭だ、活動寫眞や劇場などに行くこともあつたが、それから受ける慰めは、寔に一時的な、儂ないものであつた。彼は會社の歸りに青いポプラの並木路のはてに、火のやうな夕日の落ちるのを見て、歸つて来て、二階の手すりに凭つて空を見ると、十日ばかりの月が丁度彼の頭のうへに水のやうな光をたたへてゐた。彼は何だか身に沁々と感じるものがあつた。ふいと頭に閃めて來た感じは歌といふことであつた。斯う云ふ時、自分の思つてゐることが氣持よく歌へたら、歌は面白いものに違ひない。併しそれは容易なことぢやあるまい。折角面白からうと思つてやり出しても、さアやり出して見ると、それがねづから面白いものでなかつたら徒らに失望を招くに過ぎなからう。やらうか、やるまいか。それを考へるよりは、外に先決問題がある。それは「歌は面白いものか、どうか。」と云ふことである。之は是非其の道の先輩に質してみる必要がある。面

八

白いものと言はれたなら、やつてみる張合ひがあるが、面白いには面白いが、面白くなる迄には、遠い未來があると言はれたら、先づ考へものである。が、當つて碎けるだ。一つ訊いてみよう。——こんな動機が私にあつた間を發しさせたのではあるまいか。所が私が事もなげに「面白い、初期の間は殊に面白い。」と言つたので、「それぢや、やつて見よう。」と云ふ氣になつたのであらう。

『初期の間は殊に面白い。』と瞭り言つた以上、私は何處までも其の言葉を意義のあるものにしてやらなければならぬ。興味に誘はれてやり直したのだから、興味を以て導かねばならぬ。私は彼に先づ身邊の事を詠んでみるようにと言つた。すると彼は會社員としての自分の見た事や感じた事を詠んでもいゝかと云ふことを問うた。そして自分の興味を惹いたものであつたら、それが歌の材料であらうか何うかと云ふことを考へないで、直ぐ歌にしても可いかと附け足した。私はそれで宜しいと答へてやつた。

それから二三日して、彼は會社の歸りがけだと言つて寄つた。其の時見せた詠草の中にこんなのがあつた。

むづかしき社長の顔も見ずにすみの今日のひま日の安かりしこと

日常の實生活がすらすらと氣持よく表はされてゐる。「こんな風に出來れば文句は無い」と言つてやつたら、彼は怡々として歸つて行つた。それから一週間程経つて彼は前回に比べて倍程も數のあ

る詠草を持つてやつて来た。今度は會社員としての彼を歌つたものよりは家に歸つてからの彼を詠んだものが多かつた。彼の顔には佳い作がある、見てくれ、と云ふやうな笑みがありあり浮んでゐた。私は先づ其の詠草の二頁を讀んでみた。

かへりくれど家には妻も子もあらず戸を明けて入る淋しきわれかな

電燈はさすがに點り居れるかな冷たき室に坐つてみたり

こんなのが眼に入つた。幼ない詠みぶりであるが、眞率愛すべきものがある。初めの「戸を明けて入る」は淋しい作者が見える、何でも偽らずに天真を流露させなければならぬと言つたら非常に満足さうにしてゐた。斯うして導いて行つたら、彼は段々興味が出て来て、毎日五首から十首も詠むやうになつた。彼は沁々歌は面白いものと云ふことを感じて来た。

初めから字句の末に走つて技巧の事ばかり矢筈しく言はれると、初心の人の思想は萎縮して發達すべきものも小さく固まつてしまふ。自己の思想を自由に發達させるには、表白を拘束させないよりにしなければならぬ。然うして何處までも自己を中心にして自己の氣息を其の作にかけなければならぬ。歌は自己と離れぬもの、自己の喜怒哀樂の情は悉く歌にうつるもの、自己の血を分けた子でも、かう自己の思ふ通りに行くものぢやないと自覺したら、歌ほど世の中に自己に親しいものはあるまい、切實な味を持つたものはあるまい。

『歌は面白いものか。』

かう私に問うた人も今は切實な人生味を歌に表はしてゐる。歌には沈痛な面白味があると言つてゐる。

### 三 歌はどんな時に出来るか

歌はさあこれから作らうと身構へして机に向つた所で、中々さう思ふやうに出来るものぢやない、さうかと言つて、自然に感興が涌くのを待つてゐたらいつの事だか分らない。矢張り或る處までは自分で感興を作つて行かなければならない。そんなら其の自分で作る感興即ち人爲的感興とはどんな場合に起つて来るかと云ふことになる。先づ初めから稽古する人に向つて言ふ、その日その日に起つた生きた事實に打突つて、そしてそれが歌へられることかどうかを考へてみる。先づ何でも可い、三十一字に纏めてしまつて、それから考へても可い。何も練習である。初めからむづかしく考へては可けない。考へた所で分らぬ場合がある。そんな時は、先づ形にこしらへて後に、先輩に見せて意見を問ふのもよからう。なるべく自由に、こだはらずに、或る所まで放膽に無遠慮に材料を捉へて、それを歌の形にしてみるのが可いのである。あゝでもない、かうでもない、初めから考へてゐては、伸びるべき力を縮めてしまふものである。それよりも、何でもいゝから日々の起つた

事實を、これは歌になりさうだと考へついたら、片端から歌にして行くのが、進歩の路である、人爲的感興の階梯である。そして先輩に意見を問ひ問ひする間には、自づと啓發されて行くものである。初めは自ら啓かうとしない、他から啓いて貰ふ方が捷徑であると自分は信ずる。

さうして、成程斯ういふのが歌であつて、あゝいふのは歌ではなかつたのかと、捉へるべき事柄の、歌としての適不適を深く考へさせられて来る。趣味の教養は、俄かに得來るものでないが、たとひ其の斷片でも可いから、それが胸に入ると、作歌にいゝ手引になるものである。然うして、次の日に起つて來る事柄に對してみる、材料を取捨する標準——手心が臆氣ながらづいて來る。それには必ず疑問が伴うて來るが、其の疑問は疑問として、前のやうな何が何やら分らずに作つてゐた時分とは、短かい隔りではあるが、作者に物を觀る眼が出來て來たのである。材料を取捨し得るそれである。それはいかに微弱でもよい、作者の胸に掻き消しがたい根ざしが出來て來たのである。

此の、事實に對して材料を取捨する事が、初心の作者を悩ませる事であると共に、作歌の興味が出て來るものである。事實に對する興味——それが歌になつて行くのであるから、努めて日々起つて來る事實に對して注意ぶかくなければならぬ。出來る丈け精細な觀察をして材料を吟味して行くことが、歌の出來る主因をなすものである。

以上は順序上、特に初心者に向つての言である。歌をABCから稽古して行く人の爲めに説いたのである。今度は愈々本題に入つて、歌はどんな時に出來るかを説かねばならぬ。

これは歌の材料が何うかといふ、事實を取捨する眼が大體について來ると、初心の間に歌の材料を捉へて悦ばしかつたやうな事實に對しても、それに興味を起されて來ない。では、どうしてこんな事に興味を惹いたのだらうと不思議でなくなる。それと同時に、其の頃の歌がつまらなく見えて來る。自分の興味を惹く事實は、あれでもないこれでもない、もう無暗に材料を捉へなくなつて來る。然うして煩悶が多くなつて、歌が作れない時期が來る。さういふ時には、自分の見なれた世界を離れて、パツと違ふ他の世界へ行つて眼を開かなければならぬ。町に居る人なら郊外へ行くとか、山に居る人なら海邊へ行くとか、海邊に居る人なら山野に行くとかして、目先きを新にし心持を變へる要がある。初めは餘り變り過ぎて、心が落ちつかないかも知れぬが次第に落ちついて來ると、其の新しい境地から、新しい歌は生れるのである。一つ出來る、二つ出來る、三つ出來ると云ふ風に、みづ／＼しい歌がいくつも出來てくるのである。沈滞して來たと氣がついたら一刻も早く浮び揚らなければならぬ。無精をきめ込んで、そこにちつと尻を据ゑたら、浮び揚ることが出來なくなる。絶えず、新しい境地を自然に求め、心に求めてゐたら、歌の出來ないことは決してないのである。

たゞ注意して置かなければならぬ事は、單に新しい境地のみを趁うて行つて、其の境地に對する

本當の同感を缺いてはならぬ事である。新しい境地と同感——之れは次に述べることにする。

#### 四 新しい境地と同感

諸君が歌材を尋ねて新しい境地に臨んだ時、たゞ新しいからと云つて、其の境地に心からの同感を持たなかつたから、それを詠んでいかによく出来てゐたからとて、所詮外面的皮相的なものである。お役目に詠んだものに、いゝ作が出来ると譯はないのである。初期の作者はお役目に詠むべきものであると思ふ人は間違ひである。歌の境地に作者の同感を缺くと云ふことは、初期からずつと通して必ず避けねばならない。同感と云ふことがあつて、始めて作者の個性が見えて来るのである。たゞ見たまゝを歌ふと云ふ丈けで同感を缺いてゐては、十人同色で、作者の特殊な氣持をそれに見ることはないのである。特殊な氣持即ち同感である。

作者が或る新しい境地に接して、單に目新しいと云ふ以外に、それから心を動かされるものがないくはならない、あゝいゝ景色だとか、あゝいゝ花の香ひだとか、然うした身に沁々として歌はないでゐられないと云ふ心持にならなければ、本統の歌は出来るものぢやない。「一寸變つた景色だ、こいつを一つ詠んで見ようか。」と云ふやうな單なる出来心では到底深く内面に徹した、立派な歌は出来つこないのである。些つとした思ひつきの、外面だけ見たやうな作を多く見るのは、折角新し

い境地を見出しながら、それに同感を缺くから起る弊である。

同感は無論自分から起すことで、他から起さずする性質のものではないが、其の同感を呼ぶ習慣を養はなければならぬ要が初期の作者にはあると思ふ。私はそれを初期の作者に説いてみたい。

新しい境地に接した時、神経の鋭い人と鈍い人とはそこに感動の多寡は免れないが、先づ眼に見て新しいと感じないことはなからう。さうして、それがたゞ新しいと云ふのみでなく、實際それに心を動かされると云ふ境に到らなければならぬ。心を動かすに足る境地でもないのに、強ひてさうせよと言ふのではない、其の境地をうっかり見ないで、凝視すると云ふことは同感すべきか否かを定めるのに大事な事柄である。其の場合に漫然とした心持でゐたら、其の後度々さうした境地に接しても、あやふやに過してしまふことになるのである。同感を呼ぶ前には、此の凝視を忘れてはならぬことを切に諸君に言ひたい。「新しいな」と云ふ丈けでは歌となるべき要素を得られない、それに次いで「あゝいゝな」と云ふ感じ——これが即ち同感であつて、それで始めて歌の根柢が成り立つてくるのである。新しい境地に要する同感と云ふことの前に、其の境地に對する凝視を缺いてはならぬことを返す言ひたい。

凝視に次いで要する事は、出来る丈け感じを鋭敏にする習慣を養ふ事である。いくら凝視してゐても、其の境地に對する感じが鈍かつたら、徒勞に歸することになる。然らば感じを鋭敏にする習



慣はどうして養ふべきかと云ふ問題になつて来るのである。

感じを鋭敏にする習慣——それは、一口に言ふと、或る事物に對し直ちに其の特色を見わける力を養ふことである。それだから、常にいろいろの事物に觸れて、それを辨別する眼を養はなければならぬ。然うすれば、新しい境地に臨んだ場合、それが新しいと感じるのも早く、其の境地の可否についても速かにそれと見わけが附く筈である。此の物を見わける力——直に物を見わける力が、感じを鋭敏にする主要の事柄である。

新しく面白い、ふるくてつまらない、此の二つの見わけ方が直ぐつけば、それで始めて歌になるか、ならぬかと定まつて来るのである。要するに先決問題は此の二つにある。それがグツグツして定まらないで、終ひにどつちつかずの歌を詠むやうになつては、其の歌の價値なきや言ふ迄もない。感じが鋭敏になつてゐて、事物を感得しやすかつたら、忽ち同感もし得られるのである。

昔、西行法師は「おどろく」と云ふことを人生を觀る標語にしてゐたと言つた。其の「おどろく」と云ふことが、やがて感じの鋭敏なあらはれである。西行は自然に對し、人生に對し、常に驚異の心を忘れまいと努めてゐた。西行の歌が現世に愛著を有つてゐて、寒巖枯木のたぐひに陥らなかつたのは、斯うした心持が、彼の胸の中に絶えず戰へてゐたからである。新しい境地に對する同感西行の此の心持に外ならないのである。

「\*いつの世にながき眠の夢さめておどろくこのあらむさすらむ」世の中をゆめと見るみるはかなくもなほおどろかぬわが心かな」参照)

## 五 歌は消閑の具でない

ついでこの程の事であつた、私に歌を教へてくれと言つて訪ねて來た人があつた。今まで非常に忙しかつたので、歌に志さうと思つてゐながら遷延したが、やつと今閑なからだになつたので、教へ受けに來たのだと言つた。

私は、「忙しい時に歌を作らうといふ考へが浮ばなかつたか。」と訊くと、「いや、浮ぶには浮んでも、こんな時に作つたつてどうせ碌なものが出来ないと思つたから、さういふ影が頭の裡にさしても、すぐ逸しさせてしまつた。」と云ふ意味の事を答へた。

それで私は言つた

「歌は閑潰しにする仕事ではない、閑の時よりも忙しい時の方が心持が引しまつてゐるので、緊張した作が出来る。閑になつたから、今日はゆつくり歌でも作つてみようかと机に向つて考へたところで出来るものぢやない。出来たところが、それは多く隙だらけな、ぼやつとしたやうな作か、可もなく不可もないやうな作である。私自身の經驗から言ふと、俗事に忙殺されてゐる時など、

ふつと頭の中を掠めてゆく影に、歌心が湧くことがある、こんな時私は俗事に纏はられてゐることを忘れて、頭の中が月光のやうに澄みわたつて来る、私は此の一瞬の美感を大事に頭の中に疊んで、閑になつてから纏めようと思つて仕事を續けて行く、さうして忙しさについて心を奪はれながら二三日経つて小閑を得てから、彼の一瞬の美感を想ひ浮べようとしても、一たび過ぎ去つた影は亦趁ふことも出来ない。あの感じた刹那に何故纏めて置かなかつたかと悔んでも詮ない。かういふ悔心は幾度か経験した。それでも矢張り逸してしまふことが多い。

私は歳晩の忙しない時に、よく歌が出来る。新年になつたら、どんなにいゝものが出来るかと思つて、さて新年になると、心が緩んでたまたま出来るものは、間延びのした作ばかりである。現に一月になつて未だ一首も出来ない、作らうと思ふ心にもならない。うかうか暮してゐる、作らうと思へば時間はいくらでもあるのに、作る氣がしない。昨年十一月から十二月にかけて忙しなかつた時、仕事のあひまあひまに作るのが楽しく、作も多かつた。

歌は決して消閑の具ではない、時間のない時に出来て時間のある時に却つて出来ないものだ。時間のない時は緊張してゐる、だから眞剣である、つれづれだから歌でも詠んでみようと思ふやうな空虚な心持では出来た所が決して疎なものではない。

私は少年時代に學校の試験前及び試験中に、此の試験が済んだら、あれもしよう、これもしよう

と思つて豫期した楽しみも、さて試験が終つて、からだ自由になつてから之を實行してみると、存外詰らないもので失望したことを記憶する。

之は卑近の例ではあるが、歌の場合にも共通して私の説を確めるよすがとなることだと思ふ。「客はうなづいて去つた。世上、此の客と同じ心持の人もあらうかと、對話のまゝをこゝに述べることにした。」

## 六 目の前の事實

初期の歌の作者の多くは、自分に最も接近した事柄を材に取らうとせず、殊更遠い、自分の世界と掛け離れた事を詠まうとするから、それに使役されるかたちになつてくる。自分に最も近い目の前の事實を取つて詠んでゆくやうにしたら、それが容易くして且つ興味のある事であればならぬ。諸君の多くは私の謂ふ未だ初期の歌の作者と認める、然うして矢張り自分に接近した事柄を閑却して、自分より外の世界の事を趁はうとす傾きがある。何故目の前の事實を寫さうとしないのであらうか。之れは是非その起因をたづねて、その誤りを正さねばならぬ。

自分の目の前の事柄といふと、それが一概につまらないものゝやうに思つてやしまいか。こんな事を言つたら人が笑やしまいか、餘り自分を下らないのに見やしまいか、といふやうな、要らぬ

謙遜をしてその目の前の事柄を斥けてしまふことがあらう。さうして他人の作つたものが傑れてゐるといふ評でもついでると、然ういふ歌でなければ作りがせぬと思つて、盛んにその模倣をやる、甚だしきは字句の末までもその作に似させるように努める。まことに下らぬ努力である。頭を冷してよく考へて御覽なさい。模倣といふことは初期の作者には免れないことで、或る場合にはそれが一つの進歩すべき手段となることもある。併しそれは然う自覺してやるべきもので、模倣が全部になつては、自己の存在を失はせてしまふものである。私は初期の作者に全然模倣をしてはならぬとは言はぬ。自覺のない模倣を避けよと言ふのである。

こゝに自分と同じ階級位の人の作に、ごく佳いものがあるとする。その場合たゞその作に盲従してはならぬ。よく讀み味はつてみて、自分にそのおもしろみが分つたら、自分も一つあゝした作を自分で自分だけに試してみよう。然ういふ風に行つて欲しいのである。あの作には作者の眼がよく生きて動いてゐる。あれ丈けの事柄をよくあゝ生かして扱つたものである。少し氣にとめればあゝした事柄は自分にも多い筈であるが、觀方や扱ひ方があゝ行かなければならぬな、あゝ行きさへすれば、私にもあんな作が出来るんだと思つて、自分が或る事柄を捉へた場合の作の参考にするのは毫も差支へない。それは却つて作をする力を進ませる階級になるものである。

模倣のわるいのは、或る作が佳いとなると、その作者の觀た世界の中に自分の身をも置いてその作者の動かすやうな眼を自分も動かしたり、然うした事件を取扱つてみたりすることである。それでは自分の全部をその作者に打込んでしまふことで、何處に自分といふものを見出すことが出来るであらう。極めて愚かなわざである。然うして出来た作が、よし出来上りの佳いものであつたにせよ、その作を通して直ちに聯想されるものは彼のお手本の作である、お手本から一步も出ることが出来ない、究屈な惨めな作である。他人の作の世界にまで侵入して、その作者の氣持と強ひて同化させ、自分の世界をまるで暗くしてしまひ、自分をまるで無いものにしてしまふことの莫迦々々しさを深く思はなければならぬ。

諸君にはそれぞれ自分の目の前の事實がある。それを歌にするのが最も賢い、又最も進歩させる方法である。私は諸君の歌に、新秋の涼しい夜、靜かに書を読んでゐて、電燈の笠に白蛾のばたばたさせた音に、慌だしく書を伏せて、頭を上げたと言ふことを詠んであるのを見て、目前の些々たる事實をも棄てずに歌に入れる心の細かさを悦んだ。それから、夏休みに歸省中兄さんと一緒に草刈りをしたといふ眞實の籠つた歌には涙ぐましい氣持を覺えた。神経痛の母の足を揉みながらうっかり眠つて醒めた時には大分夜が更けてゐて、隣家の杵を磨る音がするといふ歌にも、作者の眞實の心持を嬉しく思つた。それから幼ない妹たちが摘んで來た花を縁側にちらして遊んでゐるのを柱によりかゝつて餘念なく見てゐたといふのにも、秋の晝の靜かな氣持を受け入らせられたのであ

る。此等はどれも目の前の些かな事實に過ぎないが、作者の觀方、扱ひ方のいかにも眞面目で、各  
自の氣持を純一に表はしてゐると云ふことが、初期の作者の取るべき道として、極めて間違ひない、  
進歩を早める方法であることを言ひたい。

かういふ風に言つたら、諸君は目の前の事實を取つて材とし、それを歌にし文にするように勸め  
たい。目の前の事實を些々たる事として閑却してはならぬ。些々たる事とは言ひながらその事や生  
きた事實である。仔細に觀察すれば、そこに何等かの感動がなければならぬ。その感動に依つて、  
作者の心の閃きが生じてくる。些々たる事實と言つて見遁してしまへばそれ迄であるが、觀方次第  
でその作に作者の生命いのちが出てくるのである。

目前の小事實から生れる感情はそれが些かなものであつても、作者自身の本統の感情である。純  
一な感情である。諸君は目前の小事實を閑却してはならぬ。

## 七 言葉は自分の物であれ

歌は古歌にあらはれたやうな難難かしい所謂「歌言葉」を知らなければ作れないと云ふ考へを持つ  
て、折角歌を初めたいと願つて居りながら、其の至難なわざであることを思つて躊躇してゐる人が  
多いやうだ。先づあの大部な萬葉集を精讀し、其の用語を會得した上でなければ、歌は作れぬと云

ふことであつたら、成程一寸手を出しかねるのも無理はない。

かう云ふ考へを持つて、打ち消しされて、私を訪づれて来る人が近頃殊に多いのに驚かされた。歌を  
やりたい、が、其の準備修養の容易でないのに殆んど絶望はしてゐながらも、なほ一縷の希望を抱  
いて私を訪づれて來たと云ふのである。斯ういふ、歌をやり出さうとする人々ばかりでなく、既に  
歌をやつてる人でも古語を知らないから自分の進歩が遅々としてゐるのだと云ふやうな考へを持つ  
てゐる人が少なくないやうだから、私は此の事について、是非解決を下したいと思ふのである。

萬葉集の歌人たちの其の歌に用ゐた語は、其の時代の現代語であつたに違ひない、少なくとも當  
時の人が讀んで難解の語は無かつたと思はれる。それから續出した歌集は時代時代で言葉の變遷は  
あつたが何れも其の時代と連絡を保つて居つたのは確かな事實である。明治大正の世、此の、時代  
と交渉の無い、昔も昔も大昔の萬葉時代の言葉を持つて來て、其の歌を形づくらなければ、歌は出  
來ぬと云ふやうな僻見は洵に呪ふべきである。其の内容は現代人の思想精神であつて、其の用語は  
大昔の萬葉時代のものと言ふ矛盾は、誰が考へても可笑しな事ではなければならぬ。

歌は自分のものである、それに盛る心持は無論自分のものである、其の心持をあらはす言葉も無  
論自分のものでなければならぬ。心持が自分のものでばかりあつて、其の言葉が古人の借りもので  
あつたら然さうして出來た歌は自分のものと特に言ひ切ることは出來まい。心持は自分のもの、言葉

は古人の借りもの、こんなそぐはない、不愉快なことがあらうか。

諸君は現代人である、現代の空氣の中に呼吸してゐる人々である。自分の歌はうとする心持を表はすのに、わざ／＼何を好んで、昔も昔も大昔の萬葉時代の古人の使つた言葉を借りて来て使ふ必要があらう？ 現代語——自分に最も近い、平常使つてゐる言葉を使つて歌ふ方が、どの位自然だか知れない、どの位また氣持がいか知れないと思ふ。

現代語はすゝぶん混亂してゐるから、これを歌に使はうと云ふ場合には、取捨選擇をしなければならぬのは言ふ迄もない。自分に近い言葉、使ひなれてゐる言葉、さうして其の歌はうとする事柄に適應するやうな言葉、然うした言葉を使つて、歌をかたちづくること一番自然なことなればならぬ。

尤も古語でも、普通に聽いて耳遠くない、現代語と醇化したやうなものは、一種の現代語であるから、使つて差支ないのは言ふ迄もない。辭書でも引かなければ分らないやうな、萬葉時代の言葉で綴り合はして、それが萬葉集の中の歌であるか、今の歌であるか分らぬやうなものを斥けたいのである。言葉を取つてしまへば作者の心持は何もないやうな、言葉ばかりの歌、古人の聲色こゑいろを使つたやうな歌、そんな歌は、作者の足場の確かでない歌である。往年所謂舊派和歌が新派和歌に征服されて、取つて代られたのは、矢張りかうした缺陷を持つてゐたからである。當時の新鋭の力に満

ちた所謂新派和歌が物變り星移る今日では、其の一部に當然昔の舊派和歌と同じ缺陷を持つて倒される運命の下にあるものをさへ見るに至つた。大事な思想を、そつちのけにして言葉を生命にするものの終りは、大概皆かうである。

思想は第一である、言葉は第二である、言葉のために思想が蔽はれてはならぬ。思想が自分のものである以上、言葉も亦必ず自分のものでなければならぬ。成るべく選ばれた現代語を使ふことにして、古語は現代語化したものでなければ使はないようにしたい。初心者は何處までも此の信條を貫いて、歌を作るのに言葉の爲めに累かさねひされしないで、思想を自由に率直に表白して行くようにして貰ひたい。然うして作つてゐる間に、古歌を讀み味つて、古人の心持を窺ひ、それに表はされた言葉を檢照し、其の言葉が自分のものに渾融しつくされて、少しも借り物と云ふやうな不熟さがなくなつてからなら、それを自分の用語として自分の歌に用ゐて差支ないのである。某誌で某氏が使つた古語は非常に耳新しく、其の歌の價値を上げてゐるから、自分も一つ使つてみようと思ふやうに、其の言葉の本質も意味も用法もすべておぼろげでゐて、直ちに自分の歌に使ふやうな輕薄な人を見るのは歎すべきことである。

其の言葉のすべてを知り抜いて、それが自分の用語として些かの不調和も不都合も見ないと云ふ處まで押し進めて行つてからなら、それは其の人として日常用ゐなれてゐる現代語と擇ぶところが

ないのである、然うしてこそ、自分の歌に使つて、言葉そのものが思想と離ればなれにならないのである。言葉は何處までも自分のものでなければならぬ。

萬葉集の時代と、今のわれわれの呼吸してゐる大正の時代とは餘りに懸けはなれてゐる。此の二つの時代の人心の相違は、丁度時代の懸け離れてゐる如くである。われわれの萬葉集について學ぶべき所の事は、其の時代の歌人の態度である。彼等の態度の純一さ摯實さはいつの時代の人心に當嵌めてみても持たなくてはならぬ尊さである。現代のやうな複雑多岐の世に在つては、特にさうした態度を歌に表はしたいのである。一から十迄萬葉に陶醉し、自己の生活を萬葉歌人の生活に擬し、其の歌の口眞似をし、それに使はれてゐる言葉を、直ちに自分の歌に移植しようとするのは、無謀の擧である。

私達は萬葉歌人を祖先とし敬愛してゐる者である、其の態度信條については、繼承すべきものはあるが、時代を異にし、生活を異にしてゐる以上、其の思想や表白の手法については、自から異なる所がなければならぬ。それでこそ明治大正の歌人として、萬葉歌人の子孫の實があるのだ。萬葉歌人の聲色を使つて、現代の歌人であると獨歩される安さが何處にある？ 萬葉集が千古に輝やいてゐるからと云つて、一も二もなくそれに心酔してしまつて、大正の現代に萬葉の形骸のみが、ふら／＼宇宙を迷ふみじめさを私は見たくないのである。

言葉につゞいて尙ほ言ひ添へて置きたい事は、調子の事である。なだらかに言つていゝ所を殊更に字を餘してぎつ／＼さしてみたり、わざと調子を濁してみたりして、平凡に流れまい、歌に厚みをつけたいと云ふやうなことは、不自然である。思想の自然を尊ぶ私は、調子の自然をもあくまで尊びたいと思ふ。

## 八 口語の歌とはどんなものか

口語和歌は小兒とか、又はごく初心の人とかが形式を整へる準備に習作すると云ふ場合に適用することが出来るが、之を獨立して現代和歌の新形式などとする人があつたら、誤りであると思ふ。

現代人の歌である以上、耳遠い古語を使つて現代人の思想を表白する具となすことの迂遠さはすでに説いた所である。さればとて、口語を以て直ちに我々の思想を表白することの輕佻さは、和歌と云ふ傳統のあるものに、避けなければならぬ。和歌の三十一字の形式を破つて、俳句に於ける新傾向と對抗してみた人もあつたが、これは和歌の持つた特殊の性質を無視したもので、俳句に於いて成立することが出来なかつたと同じく和歌にも到底成立しようがなかつたのである。

私は此の調子を破つた歌が二三の人に依つて唱へ出された時、何故に和歌といふ名の下に此の無謀の事が行はれるかを疑つたのである。それは、和歌の新しい機運を呼ぶものでないことを確信し

たのである。私はそれらの人が、しかく和歌の形式を破壊しようとする勇猛心があつたら、何故にその努力を詩か散文かに注がうとしないかと思つた。それは餘りに詩か散文かの一片のやうな、みすばらしさがあつたからである。

私は口語歌の場合にも、此の無謀さを移し考ふべきものであると思ふ。破調歌と口語歌、それが餘りに共通した、失敗の経路を持つてゐるものではなからうか。口語の自由さでもつて、傳統ある和歌——三十一字と云ふ形の中に生命を託してゆくことの矛盾さを思はざるを得ない。口語の自由さで、詩に走り、散文に走らずに傳統を破つてまで、そこに新生命を見出さうとする徒勞を思はざるを得ない。

或る處まで必ず傳統を守つて行つて、現代語の中から洗煉した語を選択し、自己の思想に適合した語を以て之を的確に表現することを考へなければならぬ。

その現代語と云ふものの中には、随分いり亂れ、混淆し錯雜してゐる。しかも初心の人が、その混亂錯雜してゐる中から、歌語——と云つても型にはまつたものでなく、歌とするに必ず守るべき調子とか節奏とかを表はす語を選んで、一首を整へてゆくことを知らなければならぬ。併し初心の人が、その用語選擇に惑ふやうでは、折角の思想をそれが爲めに表現することが出来なくなるから、現に普通用ゐられてゐる語を以て纏めてみるのが第一である。それはごく初心の間、口語で一首

を形づくつて、それから次第に、自分自身に親しい用語を自分で選んで行つて、思想と用語との間に間隔がないようにしなければならぬ。

だから、口語の歌を許す範圍は、ごく初期の間、僅少の間丈けにとどめて、一時も早く、その最も幼稚なる習作時期から抜け出ようとしなければならぬ。私はその習作時期に試みらるゝ口語の歌を左に示してみようと思ふ。

- (1) 空を仰いだら空が非常に高い。
- (2) 白雲が流れて行く。
- (3) 自分の心に或る空虚を感じた。

これを口語で假に一首を形づくつて見ることにする。

高い空を白雲がながれて行く仰いでゐる自分の心は空虚を感じる  
これから一步を進めて行つて、

空高く白雲が行く仰ぎぬる私の心は空虚を覺ゆる  
とするよりも、直に

空高く雲ながれゆく仰ぎ見るわれの心は空虚をおぼゆ

といふやうに一首を構成することを考へねばならぬ。これ自然に進むべき経路で、口語で準備習

作の間は極めて短い間でなければならぬ。或る期間を経過しても、なほ準備習作する必要を認めたら、それは頭の中で練習すべきである。

三〇

## 九 凝視する力

嬰兒が未だ視力の定まらぬ時分にちつと物を見詰めてゐるやうな眼をすることがある。何か見詰めてゐるに違ひないと思つて、其の視線の行く方を辿つて見ようとしたことがある。眉のほとりに八の字を寄せて一心に物を見詰めてゐるやうな眼には、天地間の見えない物をも視透す力があるやうに思はれる。何處かに嚴かな處がある、神祕的な處がある。見える、見えないは何うでもよい。其の態度の嚴肅な處——あゝして一心に傍眼よまゆもふらずに物を見詰めてゐる處——それ自身既に歌であると思つた。あゝした態度が出来たら、態度だけで既に立派な歌を成してゐると思つた。然うして私達が事物を観るのに、あんな嚴肅な態度を以てしたか何うかと云ふことに考へ及ぼした時、振り返つて見る丈けの力がなかつた。私達が事物を観るのは餘り氣短かである、落ちつきが足りない。早く終局を見よう見ようと焦るあせ氣味がある。事柄が無雜作に取扱はれて終局を見るまでの経路が手つ取り早過ぎる、徐かに考へながら歩かなければならぬ路をすた／＼駈け足位あしの早さで通つてしまふ。路を歩きながら、前の山の形や色を眺めながら行くのと路傍みちばたに立ち止つてちつと其の山の姿

に見入つてゐるのでは、同じ日の同じ時の同じ場合でも、其の心持に際立つて相違があるから、其の表はれた作の味も随つて格段な隔りを呈してくる譯だ。併し其の場合場合の心持を何でもひと處に集めてしまつて、ちつと物を見詰めよと云ふ譯ではない。軽くすつきりと見て、情趣を表はすのも歌であれば、重く沈思するやうに見て、さうした氣分を現はすのも歌である。要するに其の價値は出来た上の事であつて、兩者共に歌を生む心を得てゐる。唯軽くすつきりと言つても單に其の文字の示す丈けのうはつらの意味でなく、其の内面に立ち至つて眞にさう感じさせる丈けの味ひが無ければならぬ。手軽く無雜作に事を運んでさうした氣分を得たものと思ふのは間違ひである。矢張り其處に徹つた處が無ければならぬ。輕ければ輕いなりに情趣の徹つたものを要するのは當然である。漫然と物を觀てゐては、とても徹つた情趣を表はすことは出来ない。

さう考へてくると物を凝視すると云ふ事は其の物の性質の深淺輕重にもよるが、作者の氣分を出すと云ふ點から言つて、大切な事である。輕いと言つて、其の輕さを吹けば飛ぶやうだと看過して了つてはそれ迄であるが、其のいかにもふはふはと翻つて行くさまを見詰めてゐて、それと共に自分も浮び動いて行く心持がする——それ位に輕ければ輕い丈けの味ひを出さなければならぬ事になつてくると、物をちつと見詰めると云ふのは感じを纏めて其の物の眞の姿を現はす要素になる。輕い物に對する場合も然うであるとすれば沈思しなければならぬ時に、手軽く事を運び去ることの



出来ないのは言ふを須たない。

よくちつと物を見詰めるといふことを言ふが單に然うした言葉だけで其の内側の心持にほんたうにさう動いた處がなければ駄目である。言葉丈けの歌、文字丈けの歌を見る毎に、何故其の作者は事柄をかう淺く軽くうはの空に取扱つて済ましてゐるのだらうと怪しまれもする。作者の心の姿を出すには、何うしても靜觀して、其の物に心を沈潜してしまふ位でなければならぬ。

ちつと灯を見つめてをれば火の色が明るくもなり暗くもなれり

灯のいろをこの夜ほどあはれ美はしく意味あるものに見しこまはなし

此の二つの歌は何れも説明であるが、前の方は單に見詰めたといふのみで其の見詰めたこと其の事に作者の氣分が表はれてゐない。見詰めると云ふのはさうさせる丈けの心持に伴ふ作の氣分が無ければならぬ。それでなければ凝視する力が抜けてゐるのである。單に物を見詰めよ、見詰めよへすればそれで可いと言ふのでは無い。後のは同じく説明であるが、不完全ながら動いた處がある。灯の色を見詰めてゐて起した氣分が説明なりに表はれてゐる。ただかう言つて了つては見詰めた事に力が無い。ひと處に眼を集めた丈けの或る押すところの物が無ければならぬ。つまり力である、凝視する力である。

更に其の力の表はれたものを求めようとする。さうして左の如き作に行き逢つた。

白壁にむかひてちつと見てあればわが眼の底の痛くもなれり

わがこころ青空をちつと見ることが涙ぐましきまでにたのじや

前の作は説明も説明も何の味ひもない説明である。何故にちつと白壁を見てゐたのか、少しもそれに對する作者の氣分が出てゐない。後の作は矢張り説明である。併し前から見れば、「涙ぐましき」と云ふ氣分が少しでも表はれてゐるのが取柄である。が、「たのじや」と逸言つてしまつては、力が抜け切つてゐる。

わが心青空を見てなみだしぬ涙しつともなほ見つめをり

かう言へば、幾分力が出て来る。青空を見詰めてゐる心持が一首に流れて来る。併し、それは比較的の話である。「わが心青空を見て」がことわり過ぎてゐる。「なみだしつともなほ見つめをり」と云ふ切な情趣も、此の初、二句の爲めに、どうやら又力抜けの氣味がある。四、五句の氣分から初、二句を改めて見ることにする。

「青空のはてなきを見て」

と更へて適不適を考へる。前よりはよくなつたが、其のよくなつたのは三句以下に釣り合ひが取れたと云ふ迄である。動いてゐない。取つてつけたに過ぎない。「眼の上に青空のあるに」とすれば作者の氣分は動いてくる。此の句は決して無雜作でない、ふとした感じが青空を見詰める力を誘ひ出

してゐる。さうして其の力が始めて意味のあるものになつて表はれるのである。

三四

## 一〇 歌は一生の事業

歌を學ぶ人の中で、メキメキと進歩して行く人と徐ろに進んで行く人と二種ある。前者は一回毎に進歩の跡を見るので、作るに張り合ひがあるが、後者は進みがたどたどしいので、焦燥し悲觀する。悲觀のはては折角踏み出した道を往く處まで往かないで中途から引き返す人さへある。然ういふ人はやり初める時の信念が薄かつたのである。歌は何んだか面白さうだから自分も一つやつて見ようと思ふ位の心持で初めたのである。それだから一寸思ふやうに行かぬと、なんだ、小面倒だ、などと言つて中止して了ふのだ。

進歩と云ふことは其の人の素質にもより、境遇にもより、場合にもよる。初期にメキメキ進歩した人が、第二期にはヒタと止まつて、あがいた末に、辛抱の力で、第三期に切り抜けて行つて、そこで成功のいとぐちを見出す人がある。又初期に進歩がたどたどしかつたのが、第二期に入つて俄かに進歩の實を擧げ、第三期に突入して行く人がある。それから又初期二期は進歩の著しかつたのに心がゆるんで、第三期に入つては徒らに彷徨に終る人がある。それだから初期二期の進歩はあてにならないのである。要は其の人の態度如何にある。何處迄も初一念で押し通すと云ふ、堅忍不拔な心

持のある人が第三期の業を立派に終ることが出来るのである。

初期二三回好い成績を擧げた人が、四回五回はほとんど居据りの形でゐると、指導者へしりを持つてくる人がある。一回毎に好い成績を擧げて行つてこそ、指導甲斐のありといふものであるのに、かう停滞させるやうでは見込がないなどと言つて、指導者を換へる人がある。これは極端な例であるが、自らを省みないで、他を責めるのは、單に歌を學ぶ人ばかりではない。然ういふ人は、自分と云ふ土臺を忘れて、他に依頼する心が強いからである。他を頼むのは、或る處までで、其の他は自らを磨かねばならぬ。自らを磨くと云ふことを忘れては、決して大成することは出来ないのである。

「私は歌をやり初めてからもう二年になります。それなのに一向進歩したとは認められません。私には天分がないのでせうか、私は悲觀せずにはゐられません。某君は私の後輩ですが、今は私を追ひ越して佳作を示してゐます。私はしばらく休んで居らうと思ひます。」斯ういふ意味の書面を時々受取ることがある。さういふ場合には私はいつも次のやうな意味の答をしてゐる。「歌は一生の事業である。僅々二年位やつて、思ふやうに行かぬからと云つて悲觀するやうでは大成することは出来ない。進歩と云ふ目前の事ばかり考へずに、永遠に自己を磨くといふ事を心掛けねばならぬ。歌に表はすことは第二で、先づ自分の心を富まし豊かにすることを考ふべきである。それから他人を對

照とせず、何處迄も自分を立てねばならぬ。物質的に生きようとせず精神的に生きなければならぬ。「此の答へに依つて啓發される人と然うでない人とがあると言ふと、諸君は「さうでない人と云ふのはどんなのか。」と問ひ返すであらう。それは「歌は一生の事業などと、そんな悠長な事は言つて居られぬ。我等は其の日に生き、瞬間に生きるのである。進歩が見えなければ、自分に素質がないのだから、やめるばかりである。」と殆んど自棄に近い心持の人である。歌はその人その人の生活の記録である、自己の反影である、其の意味であながち歌の素質のある人と無い人とを問はないのである。私は諸君のすべてが歌人となるのを望まない。精神的に生きるべき自己の生活の記録を歌ふと云ふ上から——人間として立派に生きると云ふ上から、諸君の、歌に志して、孜々倦まなことを喜ぶものである。諸君は然ういふ立場にあることを各自に心得てゐて貰ひたい。然うすれば、一時の進歩とか、誰に負けるとか云ふ、目前の事は考へなくなる。

永久に生きる！ 諸君はさういふ信念を以て、自己の往くべき道を進まなければならぬ。立派な歌を得ようとする前に先づ立派な人間にならなければならぬ。

歌は自己の一生の生活の記録である。小さく、こせこせしないで、大きく、のんびりと生きねばならぬ。立派な人間になつて始めて立派な歌が出来るのである。

## 一一 い、歌・ほんたうの歌

歌を作る人が十人寄れば其の七八人まではい、歌を作りたいと言ふ。口に出して言はない迄も心の中では必ず然う思ふに違ひない。い、歌を作らうと思つて、い、歌が出来ればそれに越したことはないが、然う思つて作つた歌は、必ずそれを裏切るやうなものゝ出来るのを常とする。何故さうしたことになるかを左に述べてみよう。

い、歌を作らうと思ふ念が胸に萌すのは、すでに歌に囚へられたのである。歌の爲めに苦勞することになるのである。それはやがて自分といふものを閉却することになるのである。自分と歌とどつちが大事か、歌として見ていゝものであるにもせよ、自分を離れてゐては其の人の作として、何等の價値もないものである。作者の魂の入つた歌、作者の心持の充實した歌、それであつたら、よい技巧の上に申分はあつても、ほんたうの歌、いゝ歌なのである。

私が所謂いゝ歌と云ふのを好まないのは、以上の理由である。更に詳しく言つてみれば、それは自分の爲めの歌でなくて、他の爲めの歌であるからである。他に示していゝ歌と言はれたい、他からやんやと言はれたい、斯ういふことに愛身をやつす、さうなると、全然歌に囚へられてしまふ。模倣が盛んに起つて来る、いゝ歌と世評のある先輩の作の口眞似を試みたり、自分の生活と全く

異なつてゐる他人の生活に入つて、自分と云ふものゝ空虚な歌を作つてみたりする。然うして、それが誤つていゝ歌とか何とか言はれると、得意になつていよいよ他の模倣をすることになる。自分の心血をそぐと云ふことよりも其の方が手軽で、そして出来上りがいゝと云ふので、自然それに就くことになる。さうした習慣は眞に恐るべきものである。私は一寸見のいゝ上滑りのした歌を見る毎に、作者はどうしてこんな境地に安住することが出来るかと恠しきまはる。然うして又ありあり他を模倣した歌を見る毎に、作者はよくまあこんなに自己を離れて満足して居られるかを恠しきまはるには居られない。

いゝ歌と云ふのは、出来てから後に定まるものである。前からそれを得ようとする、不純な分子が混つて来る。自分の思つたところの事を的確に言はうとしなければならぬ。ほんたうの歌は然うして出来てくるのである。自分の歌は何處までも自分のものでなければならぬ、自分がなくなつて自分の歌の存在すべきわけはないのである。技巧の拙いのは後からいくらでも改めることが出来る。初心の人はよく「私は言葉を知らないから歌は出来ない」と言ふ、そして言葉を知らうとするは、或る自分を喜ばす言葉に行き當ると、それから思想を呼んで、一首を作る人がある。いろいろの雑誌のいろいろの人の歌から一句づゝ抜いては巧みに一首をこしらへ上げる人さへある。さうなると、純然たる細工物である、小兒が智慧の板を弄ぶのと違ひはない。

自分の心持をあらはすのに恰好な言葉を得ようとするのはよい、或る言葉に囚へられてそれに左右されるのはよくない。此の二つの差は何でもないやうで、そこに大なる隔りがある。出来上りのいゝ歌は言葉に左右されて自己の心持の充實しない、稀薄なものである。殆んど言葉丈けで出来てゐると思はれる歌は到る處に散見してゐる。新しい歌は何の爲めに起つたか、舊い歌は何の爲めに滅びたか、歌の生命は作者の心持であつて言葉では無い。初心の人は言葉の整つた出来上りのいゝ歌をいゝ歌だと思つてゐる。言葉の穿鑿のみをして、肝心の自分の心持を的確に表はさうとすることを忘れてゐる。心持が第一で言葉や調子は第二である。心持を的確に表はすには、それに適切な言葉の洗煉を要するのは無論の事であるが、言葉に重きを置いて、いつか言葉の爲めに引き摺られて、大事な著想を閉却してしまふのは恐るべきことである。

最初からいゝ歌を作らうとしては可けない、ほんたうの歌を作らうとしなければならぬ。自分といふものを措いて自分の歌は無い。他の爲めに作るのでは無い、自分の爲めに作るのである。自分の心持を的確に言ひ現はせる歌がほんたうの歌で、いゝ歌なのである。

諸君は常に此の境地を忘れてはならない。然うして常にほんたうの歌を作つて貰ひたい。

## 二 歌の味ひ方

歌をほんたうに味はふには一遍通り読み下した位で、分るものぢやない。どうしても四五遍は読み返してみ、先づ作者の態度の純不純から延いて観方、表はし方について考察しなければならぬ。

此の歌は作者が必然の要求から詠んだものか、ただ何がなしに作つたものかと云ふことについて吟味してみるが、其の何がなしに作つたものでも、折に觸れ、事につけて感懐を惹く事柄は多い。其の折々の事どもを詠む軽い心持も歌でなければならぬ。私達には其の軽い心持を歌にする場合が多い。軽い事は軽いで可い。わざわざ重く見せようとするのは不純である。軽きこと風のやうな事でも、淡きこと水のやうな事でも、態度にまさり氣がなかつたら、歌に詠んで差支へないのである。軽いもの、淡いものが、私達の眼にふれ、耳に響き來る場合、それに動かされて歌ふと云ふことは矢張り必然の要求からである。動かされて詠んで見ようと云ふ心持は歌になる要素である。

私は諸君の歌に不純の分子の比較的少ないのを喜ぶものである。詠むべき必然の要求から出來たものには、其の作に無理がない、何處かに濕うるはみがある。心の滴しぼりが、其の作を濕うるはしてゐるからである。此の濕うるはみくらゐ、読んで氣持のいゝものは無い。心を動かすと云ふことが、いかに作の上に効果があるかは極めて明かである。

併し、心を動かされたか何うかを檢するのは、決して容易たやすい事では無い。私はそれを少しく述べ

てみたい。

實例を擧げてみることにする。

わが心悲しき時はさゆらげる木の葉も胸にふれひびくなり

此の歌は概念で出來てゐる。木の葉の搖ゆぎも胸むねにふれて哀かなしいと云ふ概念から此の歌は出發してゐる。心を動かされたのでも何でも無い。而もそれを看破くわることが出來ないと、いかにもそれが作者の感懐に觸れて出來たものゝやうに考へられる。哀かなしい事の約束を胸でこしらへて、さうして作ると、此の歌の陥おちつた穴へ、陥おちることになるのである。陥おちりながらそれを知らずしらゐて、段々深みへ落ちてゆく慘あはれさを見せられる例が少なくない。歌の味あじひ方はかういふ作を見わけることにある。一度位いちど読んで考察を怠ると、之れなども哀感を惹かされるものになるのである。

今一つ例を引く。

秋風に一路白くも草の葉のひるがへるこの夕べさびしも

私は此の歌を読んで第三句に及んだ時、未だ斷ずることは出來なかつたが、四、五句に至り此の歌も概念から出來たものと云ふことを口惜しく思はせた。概念でなかつたら、「この夕べさびしも」と早く纏めることはしまい。私は斯ういふ作を、實際に心を動かされて詠んだものとは言ひ難い、けれども、四、五句が若し「ひるがへる見ゆひるがへる見ゆ」とあつたら、私は概念から出來たもの

とは言はなかつたらう、斯うだつたら生きて居る、動いて居る。實感で詠んだものでこそ、「ひるがへる見ゆ」を重ねても、わざと持つて来たやうな感じがしないのである。實感で詠んだものは潑刺たる處がある。字句などに餘り頓着しないで、たゞ感じを逸すまいとする。概念で詠んだものは、いかにもさうらしく、出来上りが可い、而も二度読み返せばつまらぬものになる。實感には生命がある、概念には生命がない。生き物と造り物との差がある。歌を味ふ第一歩として私は諸君にこの一事を告げたいのである。

### 一三 歌の著眼點

私の全集を開くと、ふと次のやうな一聯の歌が目についた、それらがどういふ觀方で出来たかと云ふことを左に述べて見よう。

うつむきて草刈る女の半面に草がうつるか青ざめて見ゆ

もう秋もふけた頃であつた。戸山が原に散歩して觀た情景である。女は草刈らしくない、かぼそい姿をしてゐた。うつむいて草を刈つてゐたが、其の女の半面が青ざめて見えた。私の近づいたのも知らぬらしく、一心に鎌を執つてゐた。私は其のしをらしい様に心を動かした。「草がうつるか青ざめて見ゆ」と云ふ四、五句は、最初に出来たもので、これに女の生活に對する同情が注がれてある。

此の歌の出来た動機はこれに在る。

朝つゆの残れる草を刈りつつもなりをり空を仰ぎてゐるかな

此の女は何か物思ひがあるらしく、時々鎌の手を休めては、空を仰いでゐる。丁度草にはまだ露じめりがしてゐたので、「朝つゆの残れる草を」と云ふ後景を附けた。此の歌はたゞそれ丈けのことである。

そのやは手幾日かからば原の草刈りをはらむぞ青空遠し

私は又其草を刈る手を見た。白い纖々とした手に幾日かゝつて此の廣い原の草を刈り終らうとするのか、いかにも前途遼遠の氣がする。丁度晩秋の空ははるばると晴れわたつてゐる、私の心は動かされずに居られなかつた、此の時の感じを今でも頭にはつきりとうかべることが出来る。

ひささころなほ刈り居れる草刈り女何を思ふぞ鎌の手はやむ

小さい部分を女はいまだに刈つて居る。をりをり鎌を執る手のやむのは、物を思つてゐるに違ひない。一體何を思つてゐるのであらう。「ひとところなほ刈り居れる」と云ふのが一首の見どころである。他は附け加へである。

草刈女の小肩をよぎり赤蜻蛉つながり飛べるひるふかみかも

私はなほも此の草刈女を見てゐた。女は矢張り鎌の手を動かしてゐた、と其の俯向いてゐる女の小

肩にすれすれに赤蜻蛉のつながり飛んでゆくを見た。これもこゝに適<sup>よさ</sup>はしい場景であると思つた。連作の歌は一首一首引き放すと、無意味に終るものが多い。私は常にそれを避けたいと思つてゐる。此の草刈女の歌は一首一首に獨立性があるつもりだ。

又全集の頁をかへすと、鎌倉の秋の歌が出て來た。中から二三抜いてみよう。

鎌倉や五山にちかき旅舎<sup>やど</sup>にして夕餉をぞする鐘聽きながら

鎌倉の五山の鐘聲は特に蕭寂として耳の底に沁み透るものがある。折も折、秋も終りの頃ではないか。五山にちかき旅舎で夕餉をしてゐると、鐘の聲がする、聲がする迄は鐘と云ふ觀念は無かつたので、ハツとした。此の歌は事實を其のまゝにならべたと云ふ批難があるかも知れないが、これよりどうすることも出来なかつたのである。

今鳴るは圓覺寺のさききなれし聲にていへり旅舎の婢<sup>をんな</sup>は

旅舎の婢は五山の鐘の音をそれぞれにきゝわけてゐた。今鳴るのは圓覺寺のであると、給仕してゐた婢は、よく分つてゐると云ふ顔をして言つた。これも事實そのまゝが歌になつたのである。かうした事柄は何でもないと看過<sup>みかた</sup>して了へばそれまでである。歌を詠む人は細心の用意を忘れてはならぬ。うっかりしてゐたら、折角の好い歌題を逸してしまふのである。

夕空にひびける鐘の音をききてしづかに歩む圓覺寺道

私は其の翌る日の夕暮に宿を出て圓覺寺道を歩いてゐた。空にひびく鐘の音のいかに澄みわたつて聞えたらう。しづかに其の音をきゝながら歩いてゐる私の心もいかに澄み渡つたであらう。

宿を出た時、まだ鐘は聞えなかつた。しばらくして鳴り出したのである。私は鐘を聽かうと思つて歩き出したのではない、其の時にも私の頭に鐘の事は無かつた。鳴り出して、此の日もハツとしたのである。

空を見上げた時、私の心は蕭寂の情で一ぱいであつた。私は此の歌よりも、もつと深い響のあるものを得る筈であつたが、これはしばらく頭<sup>かたま</sup>にこもらせて置く方がいゝと思つて、此の歌だけにとどめて置いた。幾年後の今でも私の頭には此の時の鐘の音がこもつてゐる、併しいまだに此の時の心持を歌ひえないのである。

路傍<sup>みちばた</sup>の杉の樹に啼くひぐらしを仰ぐ空をわたる風見る

歩いてゐて路傍の杉に啼く蜩のこゑを聽いて、ふつと其の聲のする方を見上げると、蜩のこゑは歇<sup>や</sup>んだ。さうして、空を渡るひそやかな秋風を見たのである。私はこゝにも、秋寂びた鎌倉を見た。歌の出來た動機はいかにも自然であつた。自然すぎる位無雜作であつた。

松並木八幡宮へゆく道のひさすぢにして秋の空高し

八幡宮へゆく一筋の松並木道で、神々しい宮居を見上げる時、秋氣の嚴肅さを覚えしめる。それは秋でなくてはならない。秋空の高いのは折からの適はしさである。私は見たまゝを歌にして歌になつた。自然も自然も、ほんたうにありのまゝであつた。初期の作者は特に此の自然の詠みぶりを學ばれたい。

秋澄めり宮に柏手うつ音もかまくら中にひびくさおもほゆ

八幡宮に詣づる人のうつ柏手の音が秋氣の中に高く澄んで、其の音の鎌倉中にひびきわたるかと思はせた。

これも柏手の音から直に詠み下したもので、感じも描寫も極めて自然である。

#### 一四 眞情流露と座談平語

私は初心の人に常に實情實景を歌へと云ふことを勧める。と、初心の人は盛んに眞情を披瀝した歌を作る。さうして、それ／＼箇性の表はれた歌が出来る。こゝに箇性と云ふのは、自己の確かに定まつた特殊なものゝ出来たそれではなく、自分の眼に映じたもの、自分の心頭に觸れたものを、何のかゝはりもなく、自由に、無雜作に表はしたものを指すのである。すでに自由で、無雜作である、其の捉へた題材の歌となるべきものであるか何うかは吟味しない前のことである。初心の人は

之れでよいのである、歌になるかどうかと云ふことを念頭に置いては、歌そのものに捉へられて伸びべき才も伸びずに了るといふことになる。初心の間は、此の拘束のない歌ひぶりでありである。歌になるか、どうか？ それは自分の頭の定まらない間に考へると、歌そのものに捉へられる危険さはあるが、全然それを考へないで進んで行くと、習慣、性になる怖ろしさがある。初心の人の眞情流露の歌は多くの場合、座談平語即ちおはなしになり易いのである。おはなしは自由である、無雜作である、併し、其の自由や無雜作は、平俗の説話の如く、歌の領域に遠いものである。而も初心の人にはそれも或る期間は自己を伸ばすと云ふ上にやむをえず許す場合はあるが、自分でそれを曉つて、其の域から蟬脱しようとしなければならぬ。眞情流露は歌の本質であるが、座談平語は歌の道ではない。而も此の二つは混同され易い、紛れやすい。

どうしたら、歌の本質を發達さして行くことが出来ようか、座談平語にならないで進んで行くことが出来ようか。これは、決して容易に解決のつく問題ではない、左に徐ろに談つて行かうと思ふ。歌に捉へられると云ふのは、自己を確立することを忘れて、歌そのものに即き過ぎるからである。自己を確立してこそ、其の眞情の流露が意味のあるものになるのだ。然らば、自己を確立するのは、何ういふ道を取るべきか。それが問題である。

自己を確立せよと漫然叫んだところが、初心者はどうしてよいか分らぬ、それは或るところ迄指



導者の言に俟たねばならぬ。初心者は實景實情を歌うたものを指導者に見せる、然うして、眞情の流露した、自ら歌の本質にかなつたものを指定して貰つて、平俗の事を單に三十一字に綴つて、そこに衷心から動いたものゝない歌とを區別して貰ふ必要がある。自由と云ひ、無雜作と云ふも、そこに或る約束があることを示して貰ふ、然うして、それが本統に自分から會得して行つて、次第に自己を建設し、やがては自己を確立することが出来るのである。

かうなつて來ると、指導者の責任は非常に重いものになる。それぞれの賦性に應じて導いて行くと云ふのは、其の作者の特質を見抜く眼が光つてゐなければならぬ。なまじつかの事では、却つて害になる。初心者は指導者が深切であり、熱心であり、識見がある人を選んで、指圖を受けると共に、一から十迄指導者に依頼ばかりせず、指導者の言ふ所を味ひ考へて、自己を磨き、確かにすることを計らねばならぬ。

自己を確立するには、順序があり、階梯がある。一概に確立せよと叫んだ所が、さうすべき道が立たなくては、徒らに煩悶を招き、焦躁に趨くものとなるのである。

座談平語と云ふのは、どんなものか。

暮近き銀座通りに賣出しの大看板の出でてなつかし

見たまゝである、實情である、而も其の實情に何等衷心から動かされたものがあらうぞ。作者の

態度は軽く浮ついてゐる、輕口にたゞ見て來たことを喋舌つたものに過ぎない。これを讀んだ人は、「さうですか」と言つてうなづくに止まる。おはなしとしても極めて拙いものである。無論歌ではない。

同じ作者の歌稿を讀んでゆくと、

冬の夜のしじまを破り支那そばの笛の響のいよよ淋しき

と云ふのがある。これも、おはなしである。何等の興も惹かない、おはなしである。歌でない。

戀もなき身の淋しさにただひさり庭に眺むる紫陽花の花

これも同じ作者のである、戀もなき身の淋しさと紫陽花の花とに、感じの連接がない。作者は自分勝手のことを喋舌つてゐるに過ぎぬ。

錢湯の隣家にあれば出無性のわれにも朝湯は懐かしまれぬ

同じ作者はかうした極端につまらぬお話をつゞけてゐる。かういふものを歌と思つてゐる作者は氣の毒である。實情を歌へよといふ叫びのみを聞いて、どんなものが實情の歌かを會得しない人は、こんな風に墮落して行くのである。初心の間に指導者が無ければならぬ適切な證左とすることが出来る。自己を確立する前には必ず他から動かされるものがなければならぬ。大に動かされなければならぬ、痛烈に動かされなければならぬ。

どんなのが眞情を流露した、歌の本質を得たものか。

偽りしあまのさみしき鉛筆のほさき鋭くけづりたりけり

幼稚ではあるが、作者の衷心から動かされた聲である。實情が、そこに何等の拘束もなく表はされて、うたゝ人に迫るものがある。歌はなければならぬ、衷心の聲であるからだ。此の作者は、此の歌を得る迄に、左の如きものが試作されてゐる。

夕空に向ひてあれど何がなし心落ちぬす人を偽りて

いささかの事なりながら偽りしあまの心は淋しきものぞ

鉛筆のほさきするどくけづりを人を偽りしもの淋しさに

鉛筆のするどきほ先我が肌につきても見つれ人を偽りて

而もこれらは皆縦横に塗抹されて、前の「偽りしあとの淋しさ」一首のみが、作者の意を得たものの如くに記されてあるのを見て、作者が自己の眞情を流露する上に、周到の用意があり、苦心があるのを認めた。後の四首の中、終りの「鉛筆の」が一段の推敲を経たら、ものにならうかと思はれるのみで、他の三首は何れも所謂おはなしである。これらの作と、「偽りし後の淋しさ」とを比較すると、そこに眞情流露と座談平語との差別が明快に表はれようと思ふ。

私は前に座談平語の作は、衷心から動かされて出来たものでなく、たゞ輕口にしゃべるやうな氣

持で出来たものであることを言つた。これは諸君——特に初心の諸君に味つて貰ひたい言葉である。私が諸君の作にこれは全然説明であるとか、此の一句がことわつてあるから不可いかないとか云ふ批判を加へると此の座談平語と殆ど同一のものである。説明したり、お話ししたりしては、折角の感じが平俗になる稀薄になる、眞情流露と云ふ、衷心からの聲が、餘韻のない、平板な、ほんのうはツつらのものになつて了ふ。此の差別は是非會得してゐて貰はないと、作歌の上に大なる錯誤が起つて来る。

私は近頃自分の歌にも他の歌にも説明と云ふことが、ひどく氣にかゝつて來た。説明の加はつた歌は不純のものゝまじつてゐるやうな氣がして、根本から厭になつてしまふ。どうか除き去らうとする。寛假して置くと、自他共説明病が募つて行く、一句位よからうと思つてゐると、それが全句に瀰蔓する。さうして、例のおはなしになつて、歌が蝕くじまれ盡す。

「歌はことわるものでない。」と言つた先人の言葉は、あたりまへのやうで、深く味ふべきものがある。

## 一五 倦怠しやすい心

私が歌を初めてから随分永いことになるが、その間に屢々私の心を犯したものは倦怠であつた。

倦怠が翼を擴げて私の心の全部を領したこともあつた。私はこれが爲めに歌を廢めようとしたことさへあつた。

倦怠は心の空虚な時に起り易い。歌を考へようとしても心に浮んで来るものが何にもない、強ひて事象をたぐり寄せようとする、それが浮んでる雲のやうにふはふはして取りとめのないものである、今朝考へようとした事はうかとしてゐる間に、心頭を去つてしまつた。「感興は鳥の如し、一たび去つてはまた歸らず。」と誰かと言つたが、折角捉へた事を逸してしまつたくらゐる氣持のわるいものは無い。その事を趁はうとすればするほど、心の空虚のことが、はつきりして来る。心から情なくなつて来る。

私はよく夢に歌の興を覺えて、いくつか詠んで、それが皆意を得たつもりでありながら、覺めてみると皆目分らなかつたことがある。さういふ時、私はどんなに失望したらう、いくたび眼を摩つてみても幻の影さへも浮んで来ない、一晚中夢に享樂した名残りが、心の何處かにか漂つてゐて、それが切りに憶ひ出させようとするはかなさを諸君の中の誰かも味つたことがあらうと思ふ。

心の空虚を滿さうとしてそれが得られなかつた時、起つて来る倦怠を斥けようとして私はどうしたらう。私の經驗を少しく語つてみたい。

私はさういふ時、いつも目を瞑る。さうして靜思する。雑草のやうに茂つてくる妄想の銳録の刃

のやうに鋭く澄んで来る靜思で刈り取つて行く。さうしていやが上に澄みわたつて来る心の明鏡に映する事象こそ、ほんたうの自分の歌の姿となつて現れるのである。併し、さう思ふやうに澄んで来る時ばかりない、時とすると、いくら澄さうとしても、妄想の影が重なつて行つて疊らせることがある。焦つて来る、いよ／＼焦つて来る、そのはては倦怠が屹度襲うて来る、こんなに考へて、こんなに苦しんで得る所の事は何ぞ！ 倦怠が来たのである。ほとんど泣きたくなるのである。私は幾度かかうした悲しい苦しい經驗を嘗めて来たが、後ではもうさういふ時に強ひて考へない事に決めた。氣分を換へることにした。氣分を換へるといふ事は特に此の場合必要なことである。書物を読むのも可い、庭へ出るのも可い、散歩するのも可い。

縁側へ出て、庭の木の葉の重なりながら揺れるのを見て、氣分を換へたこともあつた。室内に掛けてある繪額を見て、その繪をかきつゝあつた時の畫家の心持を想うて氣分を換へたこともあつた。或は又目を瞑りて考へてゐる時など、ふと母の顔が浮んで来て、夢で母に逢つた前夜の事がまさまじく見えてそれが歌になつたりした事もあつた。

母に別れたのは私の十三の時、母は三十一であつた。夢に見、幻に見る母の顔はいつもその女さかりの年配の母であつた。そして、私は今その母よりも十幾つか年上でありながら、母に逢ふ時の私は矢張り十二三歳位ゐの少年の心持であるのが可笑しい。

母の顔は多くの場合、きりつと口を結んでゐた。大きいうるみのある眼で、ちつと私を凝視める。さうして、私の倦怠しようとする心を引きしめてくれるやうである。時とすると、母の顔と妹の顔とどつちやになることがある、が、眼を据ゑて見てゐると、妹の顔がうすれて行つて、母の顔ばかりになる。母は私の事がよくよく氣になるものと見える。私の倦怠しようとする心持を引き立てようと努めてゐるやうに見える。特にさうした心持の甚しい時、母の眼は光つてゐるやうに見えた。

私は此の頃、いくら倦怠の念が盛んに起つて来ようとしても目を瞑ぢることをしない。母に累ひをかけるのが恐ろしいからである。氣を換へるのに努めてみる。しかもその氣を換へることに、俗事が多端で歌を思ふ暇がないので、甚だしく遠ざかつてゐる。

以前には路を歩いてでも、電車の中でも歌が出来たものである。それが近頃ではさういふ處が頭を休めるやうな場所になつて来た。大なる倦怠が来てゐるのではあるまいか。倦怠といふ心持を自覺しないで、倦怠の深みへ陥ちてゐるのではあるまいか。

深く自ら省みなければならぬと思ふ。

目を瞑ぢてみたら、どんな母の顔が、現はれるのだらう？ 私はその母の顔を想うて見るのさへ恐ろしい氣持がする。

## 一六 思ひつきの歌を排す

題詠や即吟のいやなのは、多くの場合、思ひつきで作るからである。思ひつきと云ふのは、自然に感じ一首に流れて来るのではなく、人の意表に出るやうな事柄を捉へて来て、それでおちを取るのである。題詠や席上即吟の場合、高點を取り、衆目を聚むるものは、此の思ひつきの歌である。

何故思ひつきの歌がいけないかと云ふに、自然に想がまとまつて来て一首を成すといふのではなく、場當りを旨として、人を驚かさうとする心持が多分にあるからである。作者自身としても一時的な、慰み半分の詠みつばなしであるから、少し時が経つてから讀み返してみると、まざく／＼と匠氣を覺えるにちがひない。作者自身それであるから、その場限りのものになつてしまふのは當然である。

歌は自身のものであつて、他人のものではない。自分本位であつて、他人本位でないことは言ふを俟たぬ。席上即吟のやうな場合、互選でその結果が即座に發表せられるやうな場合には勢ひ他人本位になつて、衆目を聚めるやうなことになるのであるが、さうでない、自分一人靜かに歌作をするに云ふやうな時にも、矢張りその思ひつきを出しては困るのである。近頃の歌にこの思ひつきで出来たものが多く目につくのは、憂慮すべき現象である。

自然に感じが纏まつて来て一首を成すと云ふのには比較的長い時間を要するが、思ひつきだと早

い、即興で短い時間に幾つも出来る、始終會に出席してかうしたお手軽な歌を作るに馴れて來ると、靜思して感じの纏まるのを待つやうな迂遠さが、馬鹿らしくなつて來る。それで、普通の場合にも、席上の作のやうに原稿紙を持つて幾つでも書きつける。さうしてそれが全然思ひつきで、一つも自分の本當のものがないと云ふに至つては、明かに歌の邪道に入つたものである。

私は今でこそ席上でやむをえず諸君に伍して覺束なくも作ることはするが、なるべく思ひつきにならぬよう、自分の本當の感じを惹く何かをしつかり把握しようとする。そして、それが幸ひにも短時間に纏まればよし、纏まらなかつたら後になつてその日に思ひつゞけた事柄をゆつくり纏めにかゝるのである。その日は靜かに物を視、そしてしつかり把握すべき何かにぶつかりたいと思ふ。けれども、不幸にしてぶつからないことがある時には、何も書かないで沈黙するより外ないのである。沈黙し瞑目して、諸君の作の読み上げらるゝのを聽いてゐて、私の把握し得なかつた事を何人か易々と捉へて詠み下したものに接する時、私は寂しい喜びを感じる。而もそれを繰返して口吟くちやまんでみて、本當のものであつたと知る時、一種の心苦しさを感ずる。

私が歌に入つた初めは今よりもつともつと遅吟であつた、同輩が面白いやうに多作して才情を披瀝する時、私はやつと一つか二つ、それも極めて平凡な作を手帖に書きつけるに過ぎなかつたのである。歌會などには滅多に出なかつた、出ると題を課して何十首、何々十首と即座に作らされるのが

怖ろしかつたからである。その頃は一夜百首會などと云ふのもあつて、徹宵歌を作つたりする遊びもあつた。私はおぞけをふるつて、さういふ遊びに近づかなかつた、否近づき得なかつたのである。私は獨りで靜かに作つてゐた。そして、氣が鬱するとよく谷中の母の墓に詣つたり、其の頃落合先生の令弟鮎貝槐園氏が母の寺に近い福相寺と云ふ禪寺に寓して居られたので、同氏をお訪ねして歌を見て貰つたりした。

私のやうな鈍物は、とても思ひつきなんかで歌は作れなかつた。ぐづぐづ考へて考へぬいて、割合素直な、自分だけの道を辿つて今日に到つた。私の過去は殆んど孤獨であつた、未來も同じく孤獨であらう。孤獨は私の歌を小さくしたかも知れぬが、私の往くべき道を確かにしてくれたのは、ありがたく思ふ所である。

## 一七 輪郭ばかりの歌

輪郭ばかりの歌と云ふのは、外形ばかり出来てゐて内容のたしかでない歌を指すのである。概念で作つて作者の感じの充實してゐない歌は、輪郭ばかりになつて、内容の空疎なものになるのである。

初學の人が練習の爲めにさうした傾向の作を試みることは、あながち咎むべきではないが、ひと

かどの人々の作に矢張りかうしたものを見るのは、安きに即いて物を凝視する力が足らず、感じ方が上ずるからである。歌に慣れすぎるから起る弊である。歌に慣れると云ふことはほんとに怖ろしいことだ。作者自身、それと気づかずに、段々ふかみに落ちて行くのである。見てくれのいゝ作、文字の按排と調子のいゝ作、かうしたものは、いくらでも出来る、併しそれらには一つも作者の主観が光つてゐない、昔の題詠（今でも老人連の間には一部行はれてゐるが、それは度外視する。）が歌を衰滅に招いたのはつまりこれだ。一夜百首、一夜千首などと途方もない非藝術な事をやつて、全然歌を遊戯視することも起つて来るのである。

歌を道樂にしてゐる人は、どんなことをしようとする自由であるが、假にも自分の生命を盛らうとする作に、そんな軽々しいことは出来ない筈である。私のやうな鈍な、遅吟の者は、一首作るにも、大事である、鼻唄でも歌ひながら、紙をのべて、すら／＼といくつでも書いて行かれるやうな人を見ると、驚異の感に打たれる。併し、その歌は一つも胸に響いて来ない、列んでゐるその一つ一つのみすばらしさ、私は骨折つた歌でなければ駄目だと、かういふ場合に自己の鈍さを悔んだことはないのである。

私は近頃でこそ、據ろなく席上作と云ふものをやるが、實は好ましくないものである。會合の時に諸君の持寄りの歌と席上の歌とを見ると席上の方にいゝものがあるやうな気がするが、それは新しい興味に引摺られたので、それらの作には出来あがりのいゝ、輪郭ばかりのものが多くつて、沈思を缺いたものであることを、後から読み返して見て分るのである。

新しい興味に引摺られると云ふことを言つたが、旅行の歌が矢張りそれだ。矚目の景はどれも目新しいので、そのたびに興味を惹いて、面白いやうに、いくつもいくつも口を衝いて出て来る。忘れないようにと、それがノートに書く間がない位書き續けられる。その夜旅館などで明るい燈影にそのノートを披いて見ると、どれもこれも潑刺としたもので、自分の新しい世界がそこに開かれたやうな気がして愉快でならない、すぐ原稿紙をのべてそれらを書きつける、読み返して見るのに、なか／＼いゝ、大喜びで發表する運びをとる、そしてそれが發表されると、批評がどうも思はしない、怪しからんと思つて、具體的の批評を訊くと、「新しい興味に引摺られて、見方が淺く薄つべらである。感じが上ずつて、一つも徹したものがない、特殊の地方色を出すことを忘れて何處の景色にも共通の作の多いのも注意すべきことである。要するに、所謂旅の歌に通有してゐる缺點を遺憾なく具備してゐることを認める。沈思を缺いたからである。」かういふ批評を聽いてはつとずる。そして、読み返してみると、それが單に新しい興味に引摺られて出来たものであることが分つて、浮ついて居つた態度を反省する。それから、目を瞑ぢて、その旅に見た景色をすつと思ひ浮べてみると、その中で特に力強い印象を受けたものが、濃く浮び上つてくる、その、一草一木のそよぎも

眼に見えてくる、それが、先に作つた歌では、外觀ばかりで、内面的に自分の感じを動かして居らぬのに氣づいて、考へ直す、さうして出来たものが二三首に濾こされて了つて、あとの十數首は抹殺される、抹殺されたのは輪郭ばかりの歌であつた。輪郭ばかりの歌は、かうして徒爾に屬してしまふのである。

私がさう言ふのは初學の人にでなく、ひとかど心得てゐるわけの人が、歌をらくに詠んで、軽く事柄を片づけてしまふのを警めたいからである。初學者が練習の爲めに輪郭ばかりの歌を作るのは咎むべきでない、凡ての藝術が輪郭から入るのは、ほとんど定則と言つても可い。たゞそれに慣れて、いつ迄もさうした域から脱却することが出来なくては困るのである。

## 一八 た だ 自 然 に

「ただ自然に！」

私が作歌の上の標語はこれである。極めてありふれた言葉のやうで實は大なる眞理がそれに含まれてゐる。言ふ迄もないが、自然にと云ふのは、物を觀、物を言ひ現はすに素直な心を以てし、少しもたくまず、飾らず、純一なるを云ふのである。それは、一讀、平凡のやうでゐて、再讀三誦すると、作者の眞實の心に觸れて非常にこゝろよさを覺ゆるのである。

私はいつも斯道の初心者に對し、又一般歌作る人に對し先づ言ひたいのは實に此の一事にある。眞情流露と云ふのもこれである。眞情のおもむく所言葉となり歌となると云ふ境地に到達しなければならぬ。私は此の境地に達することをどの位希うたか知れない。併しそれがこのごろになつて漸くそこに近づいて來たことを意識するやうになつた。が、こんな事ではまだ駄目である、私の本統の歌が出来るのはこれからだと思ふ、私はどうしてももう一度出直さなければならぬと思ふ。持がこのごろ切になつて來た、私は諸君に、特に初心の諸君と共に新しい道を往きたいと思ふ。

平凡とたゞ言と混同する人がある。一概に混同すべきでない。平凡人の心持に徹した平凡なら可、平凡人の輕口のやうな平凡ならたゞ言と選ぶ所がない。軽く事をすませてしまふやうな安易さを欲してはならない。平凡でよいから徹して貫きたいのである。

我々平凡人が非凡人の假聲こぼれを使つたやうな歌を見るくらゐ厭なものはない。「平凡人の頭に醸されるやうな平凡な歌は歌ぢやない、歌を考へる時、思を崇高の天上に馳せ、出来る丈け人間の臭ひを脱しなければならぬ」と云ふ論者があるが、これは甚だしい考へ違ひである。自分の心内に宿る心持を外にして何處に歌がある。天上界に魂を飛ばすやうな兒戯に類することは、童話やお伽噺の領域である。その方がどれ丈け完全だか分らぬ。人間の臭ひを厭ふ自分は現在人間ではないか、米を食うて生きてゐる人間で、霞をくらうて飄遊してゐる天人ではない。

先づ自分は人間であると云ふことを的確に意識しなければならぬ、自分と云ふものを本統に考へなければならぬ、うはの空ではならぬ、眞剣でなければならぬ、さうして私の謂ふ所の「ただ自然に」と云ふことが、そこに根ざして來るのである。

「ただ自然に」出來た歌を呆氣ないものゝやうに思ふ人は、まだ修業が足りないのである。濁つてゐるのである。灰汁があるのである。漉して、濁りを清ませなければならぬ。灰汁を去らねばならぬ。濁りがあり、灰汁がある間は、街奇となり、虚構となり、魂が飄遊するやうな兒戲な舞臺面を見せることにもなるのである。

かく言ふ私の過去の作にも、随分これに類した徒勞のものが多かつた。過去を顧みると、面を掩ひたいことが少なくない。併し、當時の雰圍氣は私を警省さしてくれなかつた。私の今の氣持が十年前にあつたらどうだつたらうと思ふ。十五年前にあつたらどうだつたらうと思ふ。年少、歌に志す人が今、私の覺めた心持を傾聴し、私の永い間覺めなかつた心持を一舉にして會得することの出來るのを幸福に思ひ、羨ましくも思ふ次第である。

萬葉集の自然を説いた人は私の過去に少なくなかつた、山家集の自然を説いた人も亦少なくなかつた。而もそれらの人は萬葉集や山家集の自然の心を本統に會得したのではなく、外面的に、いかにも會得したらしく説いたに過ぎなかつた。私はたゞ「さうかな。」と聽いたまでである。私の心内

に透徹した事は竟に聽かれなかつた。宣傳者の千言萬語は、竟に徹底した一語にも如かなかつた。萬葉集や山家集の歌の外面の解釋は出來て、その内面に透徹する核心を捉へることは出來なかつた。それは

「ただ自然に！」  
の單なる一語に到著しなかつたのである。

### 一九 歌を愛する心

私はいつも思ふことであるが、歌を作る人の多くが、も少し自分の歌を愛する心があつても可いと思ふ。自分の分身、自分の生命、自分の魂とまで口には言つてゐながら、其の作を見ると、随分あやふやなものが多いやうである。苟も自分の歌に愛を注いで出來たものなら、もつと根柢から眞剣でなければならぬ筈である。

見たまへ、眼にふれる歌の多くがいかに無造作であること、いかにも輕口であること！ その興とでも言はうか、そんな事から、一つ歌でも詠んでみようかと云ふほどの心持で作るから、そこに確とした根ざしもないのである。一寸突くとすぐぐらつくやうでは心細いことである。自分と云ふものゝ確かさがあつたら、決してそんな事は無いのである。今日は何十首作つた、今月は何



百首作つたなど、傲語する人に限つて、其の作は前記のやうな、無造作である、輕口である、影の薄いものである、主觀の光つて居らぬものである。けれども多作は必ずしも悪いとは言はない、私は第一期の人——初心の人——には寧ろ多作をすゝめる位である。多く作つてゐる間に、他から注入される知識と、自然についてくる自覺とで會得される所があるからである。たゞ多作すると云つても漫然作つてゐるのと、注意して作つてゐるのでは結果に非常な相違がある。

歌を作るのは、自分の爲めである、他の爲めにするのではない、いゝ歌を作つて他を驚かさうと云ふやうな心持で作つたものに、ほんたうのものゝ出來たためしは無い。名を賣る爲めぢやない、他に賞められて貰ひたい爲めぢやない。自分が作らないぢや居られない、作りたくてならないと云ふ欲求からでなければならぬ。どうかして、自分の思つたことを思つたまゝに現はしたい、そこに感情のわだかまりがあつてはいけない、何處までも清んだ心持を清んだまゝに歌ひたい、それは少しでもよく見せようと云ふのでなく、少しでも不純の心持のまじらぬように、飾にかけて出來たものでなければならぬ。それが、よし作としての價値は低くても、實際自分の心持を尊び、自分の歌を愛すると云ふ心持から出來たものである以上、其の作はそこらにいくつも轉ころがつてゐるやうな安價なものでない、何處を突いても切つても人間の血が出ると云ふ生々なましさがあれば、其の作に信念がある、自信のある作であれば他が何と言はうが、自分として安んずべきである。さうした信念を

第一期の初心時代を超えた人は是非共持つて欲しいのである。第一期は自分と云ふものを樂く準備時代であるから、なるべく作は多い方が可いし、先輩の指導を眞直に受け容れる敬虔の心持が多分に無ければならぬ。指導者は其の人々の性格や作風から、なるべく其の特色のある處に向つて進ませるよう導くべきである。さうして自分の歌と云ふものを臆おそげながら知り、自分の歌を愛する心持を第一期の末から知るやうでなければならぬ。

幼稚でもよい、淺薄でもよい、自分は自分の歌を作つてゐると云ふ自覺がなければならぬ。第一期の末から、もう此の自覺が根ざして、第二期には、自分の歌を愛する心持が起つて來なければならぬ。さうして、其の愛情がだん／＼根を張つて來なければほんたうでは無い。さうしたら、人眞似は出來ない、濫作は出來ない、自分の腦漿をしぼつたものでなければ満足出來なくなる、さうして苦心する、併し其の苦心は外のことゝは違つて、其の中に他の窺うかがひがたい楽しみがある、苦しみつゝ楽しみつゝ自分の歌を建設してゆくのである。

苦しまなければならぬ、大に苦しまなければならぬ。大なる苦しみには必ずまたそれに伴ふ大なる楽しみがある、苦しんで楽しんで行く、たとしへない箇中の心持を味うてゐる我等歌に携はる者の生き甲斐のある仕事は他に求むることが出來ないと思ふ。

私は自分の歌を愛さなければならぬと言つた。つづいて私は、其の愛すると云ふことについて、

も少し立ち入つて述べべき順序になつて来た。

「歌を愛すると云ふのは、推敲をすることか。」斯う尋ねる人があつた場合、私は次のやうに答へようとする。推敲が歌を作り上げる上に大切であることは言ふ迄もない。推敲に二つある、一つは思想の上の推敲、他の一つは文字の上の推敲である。歌を愛し自己の歌を完成させる上に、此の二つの推敲は肝要な事柄には違ひないが、歌を愛すると云ふことにはもつとそれより大切な事がある、それは何であるか。歌はなければならぬ事に打込むことである。歌つても歌はなくてもどちらでもいいが、他がやるから自分もやつてみようと思ふやうな事では、それにどうして眞剣になれよう、全力的になれよう、全精神をそれに打ち込むと云ふことが出来よう。愛すると云ふことは、決して上つ面の事ではない。心を込めなければ出来ない事である。先づそれから極めてかゝらなければならぬ。さうしてそれに打込むのが歌を愛するのである。無論其の中には思想上の推敲、文字上の推敲も含まれる。

推敲は苟も歌を作らうとする者に取つて、大事な事柄ではあるが、歌を愛すると云ふことはそればかりではない。推敲は思想の上よりも文字の上により多く役立たされる。歌のやうに形の小さいものは、其の一字一句も吟味するために推敲しなければならぬ、其の結果どうかすると文字の爲めに囚はれて了つて、思想をそつちのけにして形式の完成を見せたばかりの作になることがある。私

は彼の文字の末にばかりかゝづらはつて、一首の意のある處を閉却する人に與しない。推敲も大概にしないと、生氣を失つてしまふ、味の抜けたもの、潤ひの取れたものになつてしまふ。それだから、字句をやかましく言ふ人の歌は、どうしても硬くなる、切口上でものを言ふやうな無味なものになる。

歌を愛すると云ふのは、一首を完成させると云ふ事よりも、それに打ち込んで、自分と歌と合體させて、自分と離れさせまいとする事である。もとより全力的でなければならぬ。出来心で作つたり、他人と云ふものを標的にして作つたりする歌に作者のほんたうの愛が盛られてある譯はないのである。

他の事ばかりでなく、自分の事にして常に感ずるのは、連作といふものが、歌の自由と達意とを助けるが、それと共に起つてくる弊として、前記のやうな、無造作と輕口とを招きやすいことである。

連作は事柄を次々に運んで行けば出来るから、わるくすると、散文や詩と選ばなくなつて来る、短歌の形式を藉りて、短歌の本質にたよらなくても、もつと他の自由な形を探る方が自然でもあり、効果も多いやうな場合がある。無論全體に脈絡があつても一首一首引き放して見て、そこに一首の獨立性が認められるものでなければ、連作の眞意義が無いのである。自分の歌を愛する人は、此の

點にも意を留めなければならぬと思ふ。

六八

## 110 もつと執著あれ

私は歌の修業時代を三期に劃することが出来ると思ふ。第一期は初心の間で、第二期までは概しておもしろいやうに進歩するものである。「歌はむつかしいものと思つてかゝつてみると、存外やさしいものである、こんな工合なら、第二期もすぐさま通つて、第三期に入ることも容易からう、三期に入りや、もうしめたものだ。」かう高を括つて踏み出してみると、第二期の中頃から、少し行き詰りかけて来た、突進しようとして焦ればあせるほど、自信を裏切るやうな作しか出来えない。少し調子に乗りすぎて来たので、一つ躓くと、中々起き上がることが出来ない。底力と云ふものを少しも造つて来なかつたから、かういふ時には、がっかり落ちがするのである。

悶える、喘ぐ、そしてその果ては、莫迦々々しいと思ひ出す、こんな三十一字の末技なんかに苦勞する位なら、外の方に努力した方が、どの位む甲斐があるか知れない。……かう棄鉢になつてやめて了ふことにする。

こゝだ、落ちるものは落ちるし、進むものは進むのである。最初から眞面目に出發したものと一時の出来心から初めたものとの差別もあるが煩悶期に入つて止さうか、止すまいかの分岐點に一度は立つのである。そこで眞面目に出發したものは、一時よし止めようとしても、否止めてしまつたところで、決してそれなりにはならない。一種不可思議の執著が心内のいづこにか絡はつてゐて、歌を忘れることが出来ない、忘れようとすればするほど、忘れられなくなつて来る。さうして、或る動機にぶつかつて、猛然として起つやうになるのである。

その時の快さと言つたらない、一斗清冽の水を熱した頭に注いで心の底までも涼しくなるやうな快感である。さうして第二期を終り第三期に入り、自己の個性を發揮するやうになつて来る。この期間もまたこれからも、屢々懷疑の中に彷徨ふことはあつても、動かし難い執著の力はどしどしそれらの雲霧を排してしまふ。

しかもこれは眞摯なる研究者の進むべき道程である。が、多數研究者の中には、さうした人ばかりではない。前言つたやうな一時の出来心にやつて見ようか。」と云ふ位の人々も私の指導の下にだけでも少なくない。「私はもう歌の道に入つて一年にもなるが、少しも上達してゐない、こんな筈ぢやなかつたが。」と云ふ意味のことを私に直接に言つて来たり、間接に他へ不平を洩らすのが聞えたりする。さういふ人は他に頼りすぎて自分を輕視しすぎては居るまいか。指導者は出来る丈けそれぞれ進むべき傾向を人々に指示してそれに依つて自己を磨いてゆくようにする、主として動くべきものは自分であつて指導者ではない、指導者は常に注意して邪徑に入らぬよう、それぞれの進

むべき道を指示するにとどまる、それより以上の事は自分の考ふべき事であつて、指導者の侵入すべき境地ではない。一年位やつて進歩しないからと云つて、指導者を咎むるやうな事は、餘りに性急であり、輕率である。

進歩の度は人々に依つて差がある、必ずしも才分のありなしに關はらない。才分のある人で進歩の遅々たる人もある、才分のない人で或る處まで一氣に進んで行く人もある、進歩の遲速に依つてその人の將來を卜することは出来ない。

才分と云つても、何處に標準を置いて定むべきか、分らぬ。況んや、研究中途で、海のものか、山のものか分らぬに於いてをやである。一旦の進歩に慢心して、天才などと自ら僭するなどは以ての外の事である。

要は歌研究の途上にある人々にもつと歌に執着があつていゝと思ふのである。あまりに上達を求むるに急であるから、倦怠の來るのが早いのである、致々として倦まず、焦らず、向上の一路を取つて進んでゆく人にして始めて歌を語るべきである。彼の一知半解の徒、自己の造詣淺きを覺らず、早くも行き詰つて短歌滅亡を説くが如きは寧ろ憫笑すべきである。

## 二二二つの影

### ——本當の徹底——

ふいと歌を考へてみようと云ふ氣持になつて、靜坐する。考へてみよとしたのは、或る事象が影のやうに心頭を過つたからである。そして、其の事象を纏めにかゝる間に、その外のものが又心頭を掠め去つた。それは前の事象を不純にするやうなものであつた。此の場合、作者の心持は兩方に牽かされる。そして出來た作は、どつちつかすの不純なものになつてしまつた。想ふに作者としても、その作に對して自信を懷くことはなからうと思ふ。何となく、不安な心持がその作に付き纏つてゐるにちがひない。それは、作者が第二に來つた雜念を拂ひ去ることが出來なかつたからである。作者の頭の中が明鏡のやうに澄んでゐたら、そんな雜念の影はささなかつたであらう。頭の中に霧のやうに濛ふものがあつたので、雜念が來てそれにまつはりついたのである。私は此の雜念と言はうか、妄念と言はうか、此の不純の物にどのくらゐ悩まされたか分らなかつた。自分の思つてゐることが、思つてゐる通りに出て來ない。初めに考へたものと、後から出來たものとは、そこに大きい相違が起つてゐることを目の前に見せつけられた時、私は迷はざるを得なかつた。そして、幾度か讀み返してみても、本當の私がそこに出てゐない氣がした。本當の自分はその歌の影に潜んで

あるやうな気がした。何故、隠れてなんどゐるのだらうと思つた。私はその歌を書いたものを自分の前に置いて。隠れないで出て来いと呼んでみたりしたこともあつた。私はそれくらゐ、そんなに物狂ほしいくらゐ、自分の本體の現はれてゐないのに焦燥した。

七二

私の此の時代の作に不徹底なものが多かつた。不徹底の作をする人は多く自分の作の徹底しないことを知らない、知らないで不徹底な作をいくつでもこしらへる。知らなければ知らないで可い、知つてゐて自分の作に焦燥してゐた自分は苦しかつた。自分は苦しみつつも、自分といふものに失望しなかつた。何とかして自分の本體を作に現はしたい、作を徹底さしたい、これのみに腐心して來た。そして自分の作が不自然であつたことに気がついた。歌を作ると云ふ、よそ行きの氣持になるから、不純の影がさしてくるんだと想つた。さあこれから歌を作るんだぞと云ふやうに、用意してかゝるから、歌らしいもの歌らしいものと外界から睨り立てるやうな影がさして來るのだと云ふことに気がついた時、私は歌といふ物に囚はれて來た日の久しかつたことを思つた。

つまり徹底不徹底の問題は字句や言ひ廻しの上でなくて、自分と云ふものが本當に表はれるか、表はれぬかに依つて決せられる。諸君の歌の全部が諸君それ自身の本體の表はれた作であつて、誰の聲色でもなく、借り物でもなく、真正正銘の作となつたら、どんなに楽しいことだらうと思ふ。「どうして私はいつまでも進歩しないだらう。」と云ふやうなことを考へる間に、歌に囚はれてゐや

しまいか、歌に馴れてゐやしまいか、と云ふことを省みなければならぬ。自分の心持が、些かのまざりけもなく言ひ下されてゐると云ふことを的確に言ひえられるだけの自信を持つて貰ひたいと思ふ。

それが本當の徹底である。

私の亡くなつた祖父は私の幼い時よく私に佛前に合掌してゐると種々雑多の妄念が背後から襲つて來て困ると言ひくした。幼かつた私は、祖父の言ふ事が分らう筈はなかつた。私はそれから成長して、祖父の佛前に合掌する後姿を屢々視た。併し、もう祖父は前に私に言つたやうなことは一言もいはれなかつた。私は之を問うてみようとも思はなかつた。當時祖父の言つた言葉を思ひ返して問うてみるほどにその事が印象されて居らなかつたからでもある。今それを思うて始めて切實な氣持になることが出来る。私は祖父に問うてみなくてよかつたと思ふ。問うたら、私の言葉が或はかの雜念になつたかも知れぬ。怖ろしいと思ふ。

第二部 推敲の方法

## 一 推敲の實際(一)

七六

こゝに謂ふ推敲とは、主として言ひ廻しの上に於いてある。歌ふべき事柄が頭の中に出来てゐて、それを言葉に言ひ表はす場合、初心の人々は其の形式を整へる上に苦勞する。仕甲斐のある苦勞をしようと思つても、それが徒勞に終る例が多くある。そこに倦怠が生じ、中絶が起つて来る。歌ふべき事柄が頭の中に在つて、それが言ひ表はすことの出来ないと言ふのは何とした惨めなことであらう。折角歌に打ち込まうと思つても、其の初一念を達しないで止めて了ふ人の多いと云ふのはいかにも残念なことである。私はさういふ人々の爲めに、左に推敲の方法を説いて見ようと思ふ。こゝに歌ふべき事柄がある。それは三十一字と云ふ短い形に盛らうとするのに可成り複雑してゐる。それを思ふように表はさうとすれば、五十字はおろか、百字あつても足りない。さういふ時、初心の人は自分の力の足りないのを嘆くか、さもなくば詩のやうな、長い形式を借りようとするか、何れかである。そんなら、其の歌はうとした事柄は、果して歌に盛ることが出来ないかと云ふのに多くの場合、其の事柄の中心點を掴まうとしないから不可いのである。其の事柄の中心點は何處にあるか、それを必ず究めねばならぬ。そして其の中心點から一首を整へる工夫をしなければならぬ。無論其の中心點丈では、一首を成さぬから、それを活かすべき客位にある事柄をそれに付け加へ

るべきである。其の客位にある事柄と云ふのも、前の歌ふべき事柄の中で、中心たる事柄を助成すべきそれである。想像でこしらへ上げてはならぬ。必ず實在の事柄でなければならぬ。

中心點が定まり、それを助成すべき事柄も定まつたら、今度はいよいよ一首に組み立てる段取りになつて来る。頭の中で、考へてゐる時間が長ければ、いざそれを書き表はすと云ふことになる。比較的早いものである。頭の中で考へることをせず、いきなり紙へ向つて書いて行つては、却つて中々纏まらぬものである。それは本來歌が頭で考へるものであつて、手で書くべきものでないからである。假りに諸君の中で晩秋の歌を詠まうとして、郊外へ出たとする。青く澄んで高い秋空は、晩秋になつて来ると、奥の知れない程深い澄んで来る。それを凝視して、靜思して居れば、屹度歌想が頭の底ふかく湧いて来るものである。然るにそれをさうせず、唯一瞥した丈の感じをすぐぶつつけに何の用意もなく詠み下したとする。さうして出来た歌は、多くの場合、概念的の歌、輪廓丈の歌、中味の無い歌になつて了ふものである。事柄に臨んだら、決して急いではならぬ。ちつとそれを視てゐて、感興が油然として起つてから、徐ろに其の中心事項を取つてそれを組み立てて行くようにしなければならぬ。然うすれば比較的出来上りが早く、さうして中味のゆたかな歌が出来るものである。前の晩秋の歌に返つて言ふが、

晩秋の空深く澄みよみのみなの透りて見ゆるなかに我が立つ

と云ふ歌が出来たとする。これは輪郭ばかりの歌ぢやないが、物を見究めようとして自分の立場を忘れた缺點がある。それに、初、二句の説明になつてゐるのもよくない。

晩秋の野は夕ちかみもの皆の透りて見ゆる中に我が立つ

とすれば、自分の立場も分り、初、二句の説明も脱して來ることになる。諸君は推敲に先づ此の呼吸を飲み込んで貰ひたい。

## 二 推敲の實際(二)

(A) 新しい本を並べてよるこびぬ窓の柳に春雨降る日

すつきりと滞りなく歌ひえてある。そよりに少年の日の心持を思はせる作である。たゞ部分的に言ふと、推敲の足りない遺憾さがある。諸君試みに考へてみたまへ、次に私の指摘すべきものを見ずに。

「新しい」は「新しき」といふべきである。こゝだけ口語體にしたのは全體の調和を缺いて居るではないか。次に改めたいのは三句の「よるこびぬ」である、言ひ過ぎてゐる。「見<sup>。</sup>て<sup>。</sup>あり<sup>。</sup>ぬ」と云ふ風に餘情を持たせたい、さうしてこそ次の「窓の柳に春雨降る日」と云ふ、のんびりした情調にしつくりして來ようと思ふ。これは微瑕であるが、完作といふ上から言ふと、是非共改めなければならぬのである。

である。

(B) 雨あがり窓あけて外眺むれば淡雪は似て白梅咲けり

矢張り前と同じ作者のである。すらすらと一本調子の歌ひ方は、この作者の特徴をなして居る。たゞ餘りに無雜作過ぎてゐる。二、三句を見たまへ、お話のやうぢやないか、「窓をあくればしらしら」と改めたら、景色が目前に迫つて來やしまいか。三句に「しらしら」と云つたら五句「白梅」とあつては重複して煩さい、「梅咲けるかも」と五句を改めたい。左に一首を書き直してみる。

雨あがり窓をあくればしらしら淡雪に似て梅咲けるかも

もう一首、同じ作者のを引いてみよう。

(C) 杉深き谷間で雉子鳴きにけり雨靜かなる春の夕ぐれ

二句「谷間で」と例の口語體に言つてゐるのは不調和。「谷間に」でいゝぢやないか。「雉子鳴きにけり」はダレてゐる、「雉子鳴くこゑす」と改めたい。四、五句は可い。微瑕を直すと、見ちがへるやうによくなる。この作の素質がいゝからである。左に書き直してみる。

杉深き谷間に雉子鳴くこゑす雨しづかなる春の夕ぐれ

この場合、「しづかなる」は、ことわつたやうに聞えずに、一首の情趣を助けてゐる。今度は他の作者の歌を抜いて言ふことにする。



(D) 仰ぎ見し柱時計のままりぬて淋しかりしも父亡き夜は

AC

一讀して氣になるのは四、五句の轉換した句法である。矢張り「父亡き夜の淋しかりしも」と普通に言ひ下した方が可いのである。句は轉換して餘情を生じて來る場合と、態々ことわつたやうに聞えて情趣を害ふ場合と二つある。この歌の場合は無論後者である。

(E) 牧場の棚にもたれて専念に我が行く末の事思ひけり

前と同じ作者のである。素直な歌ひ方で、然うした作者の姿を目の前に描かしめる。ただ推敲の足りないと思はれる點は三句にある。「専念に」を「春の日を」と改めたい。こゝにかういふ季を入れることは、一首の情趣を助ける上に効果の多いものである。想ふに、作者はかうした境地にありながら、少年のムキな心に「専念に」と言つたのであらう。それと「春の日を」とでは、此の歌から思はせられる情趣に格段な相違がある。

### 三 推敲の實際(三)

以上で推敲といふことにつきて大體に互つての心得とも云ふべきものを會得されたことと思ふ。で、こゝには進んで一日中の(季節は一定し)時間の推移及び天氣の時變等によつて變化するそれぞれの描寫の推敲について左に小分けして、更に詳しく述べることにする。

#### (1) 朝

夜が明けて、白々とした曉の氣が、眼に見え、心に氣持よく感ぜられる時、誰しも朝を讚美しないものは無からう。歌でも作らうと云ふ心になるのは多くこの朝である。心に煩ひがある時など殊に朝の自然に對して嬉しく感ぜられるものだ。病氣で寝てゐて、寝ざめがちに夜を明して、曉の光が雨戸の隙間から白く箭の如く射して來る時など、しみじみと病苦を忘れしめる。更に陽の光が障子にあかるく射して、小鳥の聲が起つてくれば、心が華はなやいで來る。朝は何處までも明るく、陽氣である。朝の歌の推敲は、快感が先きに立つから、さう苦勞せずとも、比較的容易に纏まるものである。

例へば、朝の空氣の中に立つて試作したものに、

朝の空ただひさひらの雲もなく晴ればれさせる陽の光りかな

春空のもしに鳥なくほがらかにひさみをあげてこころよく啼く

暗き夜はしらみて朝さなりにけり光り満ちたるあめつちのさま

など云ふ歌があつたとする。此等の歌は、推敲の餘に出來たものかどうかといふことを檢べて見る。先づ第一の作を讀み味つて見ると、三句迄が説明である、想ふに四、五句が出來てから、添へたものでは無からうか。それがよく考へたのではなく、無雜作にくつつけて、一首に仕上げたのであらうこの作者に向つて、作の自由と云ふのは、無雜作に何等の考慮する所なく、詠みつばなしたもので

を指すのでは無いと云ふことを告げたい。然らば、この作は、推敲の餘地が十分に在る。乃ち左にいろいろに練習して見る。

一ひら雲うこかず朝の空に見え晴ればれさせる陽の光りかな

陽の光りわかわかしくも朝は見ゆ啼きつれてゆく小鳥のすがた

朝の陽の光りあふげば青ぞらの青きが眼に晴ればれさ見ゆ

三首の中で、第一は朝の感じがない、どちらかと言へば晝の方である。「朝」と云ふ文字を入れて、それから其の感じを呼ばうとするのは、極めて拙い劣つた手段である。第二は原作と趣の違つたものが出来て来た。これは彼の作から聯想を呼んだもので、趣が違つたと云つて斥けることは無い。例に依つて、三句迄がダレて、次と密接してゐない。「啼きつれてゆく小鳥の姿」といふ四、五句は、著想は必ずしも新しいとは言ひ難いが、光景目の前に見える心地がする。前を何とか改めたい。

「わかわかしく朝の光りのてる下を」

と直せば、幾分見られてくる。一本調子ではあるが、すらつと滞つた處がない。初句の「わかわかしく」は一首にさう云ふ心持を興へる上に力のある句だ。「うららかに」など云へばそれ迄である。

第三の作は一番原作の心持をよく傳へたもので、推敲して一首の本統の味ひがあらはれかけて来た。原作では觀方がいかにも單純であつたのが、幾分複雑して来て、深みとも云ふべきものが、う

つすり附いて来た。かういふ風に推敲から受ける効果は、だん／＼其の作を光らせるものである。それから前に戻つて、二番目の「青空のもとに鳥なく」と云ふ作を讀み味はつて見る。第三句の「ほ

がらかに」は瞳にかゝるのか、啼くにかゝるのか疑はしい。作者のつもりでは、啼くにかゝるのか知れぬが、間隔を置いてあるから、一寸さう取れない。しかも五句に「快く」とある以上は、それが啼くにかゝつて、「ほがらかに」は瞳にかゝるのかも知れぬ。どつちにしても、似つかはしい形容詞が一首に二つもあるのは煩さい。三句を「はればれ」と改めれば、この重複した感じは除かれる譯だ。尙、二句に啼くとあつて、五句に又啼くとあるのは、重複したやうであるが、意味を強める爲めに印象を明かにする爲めに、此の同語の重用は差支へない。つまり此の一首の主眼點は、鳥が啼くと云ふ處にあるから、それを強く言ひ表はすのは、印象を明かにする所以である。

第三番目の「くらき夜は」の作は、朝の快感を讚美したもの。くらき夜に對して、朝の明るい感じを快く歌つた所に、此の一首の味ひがある。たゞ二句と三句がいかにも力が弱い。ダレ切つて居る。四、五句の明るい心持を盡したのに對して、副はないのも甚しい。推敲の足らないことを明らかに示して居る。左に考へて見る。

(a) しらみて照れる朝の陽に

(b) しらみて朝のほがらかに

(c) しらみて朝のきはみなく

この三つの場合で、(a)は「照れる」が下の「光り」とかさなる、言ひ方も弱い。(b)の「ほがらかに」は下の句を呼ぶ爲めに適してゐてよい。(c)は説明になつて、ダレて弱い。(b)が一番よく其の場合に適合してゐるから、これと入れかへて、一首を左に書き直して見る。

くらき夜はしらみて朝のほがらかに光り満ちたるあめつちのさま

原作に比して、ともかく見られるやうになつたのは、推敲のお蔭である。

朝の歌の方はこの位ににして、晝の歌の推敲にうつることにする。

### (2) 晝

晝といへば、明るい快感に満つる。朝にもさうした感じがあるが、彼れには若々しい、暗い夜が明けはなれて迎へた心持である。暗いのに對する明るいだから、目を刮せしめるが、晝のやうに熟した明るさではない。日は午と云へば、中天にかゞやく陽光の、いかに明るく、地を照らしてゐるかゞ想はれやう。晝の陽光を受けた地上の萬象は、生き生きと輝やいて見え。山、野、海、河、湖……自然界の風物は皆晝の光りを吸つて、快く見える。先づ野 出でゝ見る。季節は冬枯れの蕭條とした時である。眼にふれて、情緒を動かした景色を試作して見る。

(一) 冬の木の立ちつづく野にあたたかき晝のひかりの満ちわたるかな

(二) 寒林に鳥の動作のよく見ゆるあかるき晝の野をあゆむかな

(三) 遠き野の木立の中にかくれぬし藁屋の屋根のあきらかに見ゆ

(一)の作は、特に冬と云ふ感じが乏しい。かういふ中心のぐらついてゐる作は、讀んで何等の興趣もない。推敲のしがひがあるまい。

(二)の作は捉へどころがよい。木の葉が落ち盡して、林の中の鳥の動作が見える所へ、明るい晝の日光がさしてゐるので、それが一層よく見える。冬ばれの晝の景色が見えるが、慾には「あゆむかな」が餘計ものである。「なつかしむ」と云つても説明になつて、よくない。この場合には作者の心持を言ひ切らずに自然にさう感じさせるようにすべきである。例に依つて、左に五句を推敲して見る。

(a) 野のけしきかな

(b) 野のあたたかさ

(c) 野のうらら日よ

(d) 野の冬ばれよ

先づ(a)を調べて見る。すうつと抜け過ぎてゐて、一首の充實味は、これが爲めに減殺される。(b)は言ひ足りない傾きはあるが、無難に近い。(c)も(d)も言ひ切つて了つて、餘情がない。特に(c)は冬を感じがない、春の景色である。冬の晴れた日など、うららかな感じのすることもあるが、

「うらら日」と云つては、誇張したやうになつてよくない。自然に對しては、常に忠實でなければならぬ。自然の觀方に誇張した所があつては、それに對し敬虔でなく忠實でない證據である。さうすると、四つとも適切なものと言ふことが出来なくなる。

そこで、試みに、四、五句を

「明るき冬の野の眞晝かな」

と改める。が、下に「冬の野」とある以上、「寒林」といふのは重複する。で「林間」とかへる。

林間に鳥の動作のよく見ゆるあかるき冬の野の眞晝かな

どうやら纏つて来たやうである。(三)の作はすつきりと目の前に其の景致を想ひ浮ばせる。素直には詠み下されてあるが、少し無雜作過ぎた傾きが無いでもない。(二)の作の訂正したものが、中で一番よく。

内容の推敲を経て居らぬものは、單に言葉だけ推敲しても、何の役に立たぬ。根本が出来てゐないで、枝葉を繁らせようとした所で、結局は徒勞に歸することになる。(二)の作が言ひ廻しの上の缺點はあつても、内容の推敲が出来てゐるから、少し意を用ゐれば批難のないものになると云ふのは、即ち根本が立つてゐるからである。内容の推敲が作歌の根本をなすもので、形式の推敲は二次であることを、的確に認めることが出来よう。

晝の歌の方はこれ位ににして、次の夕の歌の推敲に移ることにする。

### (3) 夕

夕暮に早い夕暮と晚い夕暮の二つがある。早い方は日が斜めになつた時で、邊りは夕ばえて明るい。晚い方は日の没したあとで、所謂薄暮時である。又此の二つの中を行つて、日の没しようとして血のやうに明るい時、日が今没したばかりで地平に残つてゐる紅が、空を染めてゐる時がある。

單に夕暮と言つても、僅かばかりの時間の差で、際立つて此のの三つの景色の變化がある。先づ早い夕暮から試作し初める。川ばたに立つて、其の邊りの景色を寫して見る。季節は秋である。

川ばたのやなぎに射せる秋の陽のかけりていつか夕ぐれさなる

うすさむく午後かごの風ふく川楊かわやなぎに夕ぐれちかきあはき陽のさす

初めの歌が穩やかで、淡いながらその景色をあらはして居る。次のは二句に「午後」と云ひ、四句に「夕ぐれちかき」と云ひ、時間の繰返しがるさい。それから四句と五句に「ちかき」「淡き」「き」音の重なつてゐるのも耳立つ。

うすさむく風ふく秋の川やぎに夕ぐれちかき陽の淡くさす

斯う改めて、上の「午後」を省き、「き」音の重なりを整へたが、「五句の淡く」の「く」が、重くるしく、

ことわるやうになつて不可ない。五句を「陽の淡きかな」と直して見る。すぐ上に「ちかき」とあつても、前のやうに「ちかき」「淡き」と續かないで、少し間があるから、耳障り方が少ない。左に今一度書き直して見る。

八八

うす寒う風ふく秋の川やぎに夕ぐれちかき陽の淡きかな

説明になりかけて居るが、淡い陽の色は目に入つてくる。しかし前の方が、景色が動いて居る、作者が立つて其の景色を眺めてゐるさまが見える。

同じ場處に立つて、同じ時間の頃に、前の二つとは違つた觀方をして見る。

川むかひ白壁の家は一ばいに夕陽をうけてゑがけるこさし

と云ふ作を得た。確かに觀方は違つてゐるが、季節の秋と云ふ特別の感じが出てゐない。それから、五句の「ゑがける如し」は、結末を急ぎ過ぎて、早手廻しに間に合せの句を置いた傾きがある。觀方に忠實を缺いてゐる。

川むかひ夕日うけたるしらかべの家のはひりの百日紅かな

かう改めれば、描けるやうに美しい景色が目の前に見えてくる。その家の中の人も、そとに偲ばれて來やう。大さつばに見てしまはないで、少し氣をつけて觀察してゐると、家の入口が見えてくる。それと共に百日紅のこまかい紅い花が見えてくる。それを取り合せて一首を整へるやうにすれば、

内容が充實して、「一ばいに」とか「ゑがける如し」とかいふ空疎な文句が取れてしまふ。

景色を寫す場合に必要な事柄は、心を落ちつけて、こまかに物を見ようとすることである。それが若し粗漫に流れ、一首を形づくることに急であるとしたら、寫すべき場處は定めても、單に其の輪郭だけで、内容のないものが出來てくるのである。

今度は日が没しようとして、夕ばえの明るい時を寫して見る。季節は晩秋、場處は市街、小春日のあたゝかさを加味する。

落日のあはれを遠く見つるかな晩秋の日の街のあなたに

さきなりに櫻のもみぢちり來る街路の遠に陽のしづみゆく

第一の作は前半がどうも間延びして居る。往來のしげきことをいはないと、「落日のあはれ」が利かなくなる。五句に「あなたに」とある以上、二句に「遠く」と云つて方向を指し示す必要はあるまい。

落日のあはれを見つれ人しげき晩秋の日の街のあなたに

と改むれば、作者の描かうとした心持はあらはれやう。併しもう一步進めて、

落日のあはれを見つれ晩秋の電車のおほる街のあなたに

と改めれば、景色が更に動いて來る。

第二の作は、街路と云ふ感じがしない。田舎路を歩いてゝもゐるやうな景色だ。三句迄が餘り靜

かで、人通の賑やかな街路の夕べを想はせることが出来ない。つまり此の歌は、三句迄と後とが離れぬである。さうして、どちらも連続させる句さへよければ、引き立つてくる。作つてゐて、自分では離れぬにさせるつもりはなくても、自然に斯う云ふ結果を生じてくる場合がある。此の場合には、強ひてこの一首をものにならないで、棄てゝしまふか、又はノートの端に書きつけて、其の句の役に立つ時の用意にして置くか、何れかにするがよい。

次は日が全く没して、暮色蒼々くる薄暮時（たがれとき）を寫して見る。季節は初冬、場處は海岸。

蒼茫（あふらむ）さくれゆく海にちひさなる灰いろの帆の見ゆるはつ冬

と云ふ作が出来た。灰色と云ふ丈で、初冬を知らせようとしたのは、無理である。かういふわざとらしい配合で一首を組み立てると、作者は果してその實景を見て作つたものかどうかと云ふことに疑問が起つてくる。所謂舊派の歌は、斯うした態とらしい歌ひ方をする。だから、その作に不自然な處が多いのである。作者自身は一生懸命に細工して自然にならせようとしても、さうして出来た作は、掩はうとすればする程、破綻が一層分つてくる。何處までも自然に、忠實な態度を以てしなければ、本當の作は出来ない。

で、彼の作は、どう改めたらよからう。

初冬の海くれゆける遠かたに仄（を）いろの帆の見ゆるほのかさ

「初冬」を初句に持つてくれば、幾分不自然でなくなる。さうして「ほのかさ」で結べば、心細い、もの寂しい感じが、自然に冬の心に適つてくる。前のやうに、「小さな」といひ、「見ゆる初冬」といふ瞭（はつき）りした感じで強ひて調和させようとしたのに比べて、少なくとも此の方が自然である。

#### (4) 夜

夜は一日の中で際立つた感じを與へる時である。燈下、月光、闇——特殊な場合を引括（ひら）めて言へば、此の三つに分たれる。燈下は室内で、月光と闇とは重もに戸外を指す。月光の下に行き、闇の中を歩んで、夜の景情を十分に味ふことを得る我等は、燈下で夜の感味に浸ることが出来る。燈下は、單に室内に於ける夜の歌を試作するのみでなく、日の中に詠んだものを推敲するに適して居る。一概に言ふことは出来ないが、一日の中で、一番心の落ちついて、靜かに想を練り、句を整へるに適した時は此の夜間——殊に夜更けてからである。興が來れば、夜を徹してなほ作を續けることもあらう。靜かな、落ちついた作を得るのも夜で、推敲の効果の最も顯はれるのも夜である。推敲の時期として、特に一日の中で、此の夜間を充（お）てたい。が、こゝに一つ斷つて置きたいのは其の作の氣分は、何處迄もその當時の儘でなければならぬことだ。晝の景色を寫す場合に、大事の晝の景色を寫す場合に大事の晝の感味が夜の感味と入れ換るやうなことがあつては、大なる誤りを生じてくる。靜かと云ふ言葉は、晝にも夜にも用ゐることは出来るが、晝の靜かと夜の靜かとは、其の感味

は表はす上に非常な相違を來すものである。單に字面にばかり縋つて作ると、さうした誤りが頻りと起つてくるのである。晝の歌を夜、推敲するのは、字句の上、即ち言ひ廻しを推敲するのであつて、意味は何處迄も晝と云ふことを忘れてはならぬ。所が、悪くすると、其の推敲の時と其の作を得た時とを混同して、混沌たるものが出来る。作の中心たる要素はあく迄も尊重しなければならぬ。左に一二の例を擧げて見ようならば、晝見て作つて來た歌に、

春の陽の光りに融けて野や山の草木の色のやはらかきかな

といふのがあつたとする。所で、この作者は「やはらかきかな」とある結句が、抽象的な言ひ方だと云ふので、假りに之れを「水づけるかな」としたらどうであらう。併し之れは春の日光を受けた草木の色を具體的に表はしたものではない。かう言つては、日光でなくて、月光から受ける感じである。燈下、机上で思を構へることに誤つた感じを表はすことが多い。これなどは、確かに其の一つである。もとのまゝの、見た通りの「やはらかきかな」で結構いゝ、練習の時の感じに囚はれて、其の作から受けた感味を反古にしてはならぬ。夜間は練習に可なる時であると共に、其の感味に囚はれない用意が肝心である。

併し、こゝに又かういふ場合のあるのを忘れてはならぬ。それは、日の中に見た景色を、夜に入つて心の落ちついた時、これを目の前に浮べて、靜かに試作すると云ふ場合である。これは我々に

してもよくあることだが、この時には、屹度その日の中の氣分になつて試作することで、周圍の夜の空氣に身は浸つてゐても心は日の中の外光を受けて居らねばならぬ。これは作者の態度が、儼として居らねば出来ないことである。我々の經驗からいふと、いゝ景色を見て、あゝいゝなと思つても、すぐその場では出来ない、その時の興味をしばらく經つてから再現させて、さうして、靜かに試作するのである、それを試作する時は、何處までも其の當時の時刻と、その興味とを身に沁み込ませて置いて、その時は單に心の落ちついた時と云ふことにする。然うして、この興味の再現法を取つて出來た作は、幾分そこに會心なものを得る、厚みとかいふものは、この時に出來た作に多い。すぐその場で作つたものは、興味が先きに立つて、どうも説明になりたがる、自分ばかりで、他にその興味を傳へることが出来ないといふ弊が起つてくる。後から靜かに考へて得た作の方に、生命の豊かなものが出来るものである。

例を擧げて言つて見れば、

菜の花のはてなく黄なる野にいでて目を遊ばすは樂しきものなり

といふ歌の、五句「樂しきものなり」は即ち自己の興味を片寄つて表はしたもので、自己の外の人々はその作者と同じい感味を受けることが出来なからう。叙景の歌にかういふ獨りよがりの、抽象的の感味をさらけ出すのは、自然に對する敬虔の念の乏しい證據である。もつと思ひ入つた處がなけ

ればならぬ。これが若し。

菜の花のはてなく黄なる野に出でて目を遊ばす春の日の午後

とあつたら、同じ即興でも、獨りよがりの弊は脱しよう。併し、餘り無雜作に景色が觀てあつて、眞に味つたと云ふ處がない。後から例の興味の再現に依つて、靜かに作つて出來た作なら、厚みなり深みなりが出てくる筈だ。

菜の花の黄なる野のつら面をわたる風見つつ心のびゆけるかな

など、前の作に比べれば、同じ景色にも内容がついてくる。

夜は推敲に可なる時であると共に、周圍の時に囚はれずに、心を落ちつかして、興味の再現を計つて行くことを忘れてはならぬ。右について冗々しいばかり説き明かしたのは、推敲について重い關係を有つてゐるからである。さうして、夜の本題に入るに先立つて、今一つ述べて置きたいことは、矢張りこの再現法に就いて私の苦心した經驗談である。それは、晝の景色を再現的に歌はうとして、燈火を出来るだけ明るくして、陽光と同じ程のかどやきを取らうとしたことである。さうして、其の中に身を浸らせて晝の氣分を呼ばうとしたことがあつたが、要するに、それは餘りに形式的で、兒戲コウキに類したと氣がついた。そんな、見え透いた人工的手段で、何んで自然の眞趣に觸れよう。つまり、推敲の時に夜間を選んだのは、心が落ちついて、外界の壓迫を受けないからであ

る。晝の景色の輪郭ばかりでなく、その内容を靜かに再現して味はふのに、心が落ちついてよいからである。周圍の夜の空氣とその作とを、直接に混同してはならぬ。

本題に入つて、夜の室内、即ち燈下の研究から初めるのが、順序であるが、本章の約束に依り「叙景」を主として「月光」及び「闇」の練習を了へてから、「燈下」を其の次に隸屬せしめることにする。

月光をこゝでは春の夜のそれと觀て、作られた歌を左に擧げることにする。

おぼるなる月の光りにちちかたの山をかたと河がはうす白く見ゆ

この歌の著眼を先づ檢べて見る。春月の光りに遠方をちかたの山河がうす白く見ると云ふ丈けで、觀方はごく普通である、單純である。作者が本統にかうした景色に面を向けて出來たものとしては、景色が餘りに輪郭的である。すらつと見た丈けを言ひ現はしたのみで、その外に何にもを有しない。「おぼるなる」といふ因襲的な形容詞で、春月を現はすことが出來ると思つてゐるのが、先づ淺はかな考へである。うは、べばかりでなく、心底から春月を現はしたい。この作者には、さうした用意が缺けて居る。それから、四句に山と河と際立つた區別をした言ひ方をしたのが、夢のやうな景趣を殺がせる。以上の理由で、此の作を左の如く改めて見る。

夢の如き月の光りにつらなれる山河のすがたさほじるく見ゆ

「夢の如き」といひ、「山河の姿」といひ、幾分そこに内容が加はつて來たことを證する。「夢の如き」



といふ一句は、一首に春夜の情調を漂はせることが出来る。やゝ月並ではあるが、「おぼろなる」よりは、感味を表はし得て居る。更に又、

九六

夢の如き月の光りにうちひたりかのとほじろき山河を見る  
といふやうに、作り變へてみたとする。併し、結局「見る」と言ふよりは、「見ゆ」と言つた方が、一首の景色の縹渺とした處に適する。三句の「うち浸り」も「曝り」してゐる、ぼうとした気分と齟齬して居る。これは推敲して失敗した例の一つである。

餘り残念なので、今一度推敲し直して見る。左に又書いて見ることにする。

春の夜の月の光りにつままれて夢みる如き山河のすがた

「春の夜の」と初句に置いたのが、際立つて説明になつてゐる。五句の「山河の姿」もかういふ風に置くと、重苦しくなつて、ふうわりとした一首の感味にそぐはなくなつて来る。推敲して、段々悪くなつて来た。

推敲も、あれでもないこれでもないと考へ過ぎると、終ひには初めの作に歸つて行くものである。併し、初めに歸るのも、餘り曲がないと思つて、最終の推敲を試みて見る。と云ふのは、どうしても、意に満たないからである。

夢の如き月夜のなかの山河のすがたほのぼのうち霞むかな

斯う直して見る。これで幾分推敲の効果が著はれて来た。ぼうつとした春夜の景情が、少しは著はれて来た。

次に闇夜の歌の推敲にうつる。まつくらやみでなく、星あかり位はあるものと見てもよい。春の闇夜には特殊な空氣が籠つて居る。草木の柔らかに息吹くそよぎも夜氣に漂うて居るやう。他の季節に感じる如き、さびしみとか凄みとかいふものが、春の闇夜にはない。此の特殊な景情を歌ふべきである。

わかくさの野は夜の色につつまれぬ空にかがやく星ひこつかな  
と詠んだとする。四句のかがやくと云ふのが、春の夜の心持でない。又五句の「星一つかな」も四句を承けて据つて居らぬ。四句を「空に見いでし」とすれば据つて来よう。左に書き直して見る。

わかくさの野は夜の色につつまれぬ空に見いでし星ひこつかな  
書き直して見ると、四句が矢張り収まつて居らぬ。見いでしが態とらしく渾化しない。それにかう過去に言ふのもいかにほしい。かうした批難を認めて、四句を再考して見る。「空のあなたの」とすれば、前半を承けて、縹渺とした夜色が見えて来る。併し、五句につゞけると、「星一つかな」が据らない。色々考へた末、

「空のあなたの星のきらめき」

として見る。體言で結ぶと、落ちついてくるが、きらめきが光りすぎる。「星のまたたき」とすれば、春夜の安らかな、ぼうとした氣分に適して來る。これで、どうやら一首が纏つたやうである。もう一度書き直して見る。

若くさの野は夜の色につつまれぬ空のあなたの星のまたたき

讀み返して見て、これと云ふ厭な處がなくなつた。歡んで見たり、悲しんで見たりして、竟に或る處へ到達した時の心持は、洵に言ふべからざるものがある。練習から受ける快感は、苦しんで苦しみぬいた果てに最も多く得られるものである。いゝ句を得たと思つて歡んで續けて見ると、次の句との調和が悪く、又前の句との折合ひがよくない。がつかりして了ふ。又考へる。又考へる。その考へてゐる間は苦痛のやうで、樂みのものである。推敲を絶対に苦痛として、安易の道に就く事のみを考へるやうでは、發達することは出来ない。

左に又別な闇夜の景色を描いて見る。

足もさにあぐる小草のいぶきをばふみゆく春の夜の土手かな

一種の感じは出て居る。著眼もよい。併し、修辭の上には缺けた處がある。先づ「足もとに」と初句に在つて、四句「ふみゆく」とあるのが、煩さい感じがする。三句の「いぶきをば」の「をば」もイヤである。これが一瞥した處で目についた缺點である。

あゆみゆく土手の小草のあぐる息器にまつはる如き夜かな

と直して、讀み返して見る。「裾にまつはる」は春夜の情趣をあらはして小草の息吹に適した感味である。たゞ初句の「あゆみゆく」が、二、三の句に對して、しつくりして居らぬ。「そこそなく」といふやうな、ぼうとした趣を表はす句に改めたい。然うして、五句に行くと云ふ語を添へて見る。左に書き直して見る。

そこそなく土手の小草のあぐる息器にまつはる如き夜を行く

かう改めれば縹渺とした春夜的情調に適合することが出来る。初めの作のやうな、説明がなくなつて、推敲の効果が著はれて來る。第一、小草のいぶきをふむと云ふのと、息吹きが裾にまつはると云ふのとでは、兩者の感味に格段の相違のあることを認めよう。言ひ廻しの巧拙が、著しく目に付いて來る。闇夜はこの位にして、特別の景趣の表はれる夜更けの歌の推敲にかゝることにする。

夜更けてあなたの杉の太木に月落つるころほささぎす啼く

夏の夜更けを歌つて見ようとした。しかし、五句だけが、夏かとは思せるばかりで、初句から四句迄に、然うした際立つた感じが一向に出てゐない。つまり「ほととぎす」はこの場合、單に持つて來て据ゑたと云ふのみで、全體に情趣が渾融してゐない。「雁なきわたる」とすれば、秋になり、「巢のなく」とすれば、冬にもなるやうな、自在に抜きさしの出来るやうな景趣では、特殊な感じを表は

すことが出来ない。叙景の歌に於いて、最も避くべき弊である。

で、要するに、この歌は、四句迄すら〜と出来て、五句で詰つたのである。それで、かういふ間に合せをやつたものであらう。さうすると、この作者は、本統にこの景色を觀て、動かされて詠んだものでなく、机上で、想像して作つたのだといふことになる。それでなければ、かう感じの繼ぎはぎしたものを得べき譯がない。作者が若し四句迄の景色を見て、これ丈けでは歌にならないと思つて、五句を附け足したものとすれば、木に接ぐに竹を以てするよりも、もつと拙いやり方をしたものである。「思ひ哀しむ」と云ふやうな、作者の情緒を添へれば、彼の如き不自然を脱して、その景色の有する氣分が瞭りして來よう。作者の用意が足りなかつた。

戸外の推敲は以上に止めて置いて、附屬として室内の燈下の練習を試みることにする。叙景とは懸け離れてゐるが、夜と云ふ事項の下には逸することが出来ないから、序に、ごくざつと述べて見る。

秋燈など言つて、秋の夜の氣に包まれる燈火の色は、明るい、快いものであるから、秋夜の燈下で詠む歌の推敲といふことにする。

今宵ここにさもしびのいるの明るけれ書のパージを翻すころよさ

秋夜の感じが出てゐる。書のパージをかへす快さは、他の季節に見難い特殊な處がある。たゞ「今宵

ことに」と云ふ初句が態とらしく、説明に流れてゐる傾きがある。二句と三句も、慾を言へば、ダレて居る。もつと切に言ひたい。即ち、

水の如き澄める燈影にしたしみて書のパージを翻すころよさ

とすれば、初、二句に秋燈の特殊な心持があらはれる。三句の「したしみて」も五句の「ころよさ」に對して、調和が可い。かういふ特殊な感味のある句を捉へて來て、一首の情調を整へると云ふのは、練習の際に於ける尤も必要な事である。

今一つ燈下を主題にして詠んだものゝ練習をして見る。今度は燈そのものを直接に詠んだ歌にする。

パツささもる電燈の火につつまれて室のすべては白くあかるし

初めから終ひ迄説明で出来て居る。この歌から受ける感味は、極めて薄弱である。

電燈の白くあかるきひかりうけさびしき秋の夜を感じる

かう改めれば、作者の情緒が出て來て、前の説明的の、何等の情趣もないものに比べて、格段の相違を生じてくる。が、二、三の句は矢張り説明の域を脱しない。後半の切な感味を生む句として、夥しく力が抜けて居る。「電燈の白き光りにうち浸り」とすれば、ずつと引き締つてよくなるが、「白き光り」ばかりでは、もの足らぬ。それに光り、浸りと「り」音が近く續いてゐるので、耳によくな

い。「電燈の明るき中にうち浸り」としても、矢張り物足らぬ。多少の批難はあつても、前の「白き光りにうち浸り」とあるのが、まだく勝つて居らう。

(5) 晴、曇、雨、風

自然の風光は、晴れた時、曇つた時、雨の時、風の時と云ふやうに、天氣の變化に依つて、異つた現象を呈するものである。この變化に依つて變つて來る自然の姿を適切に表はすのは、易々たる事ではない。こゝには此等を引き括めて、次ぎくその變化の有様を練習に依つて瞭りと表はして見ることにする。

(A) 晴れた日。

季節を春に取つて見る。

花ぐもり晴れたる晝ののどやかにあかるき春の陽の光りかな

三句の「のどやかに」が説明である。四、五句は、春の代りに秋を持つて來ても、濟みさうなもの。特に春らしい趣が缺けて居る。これが此の歌の掩ひ難い缺點である。

花ぐもり晴れたる晝のをちこちにさへづりかはす鳥のこゑかな

と改めて見る。「をちこち」と云ふのが、場處が瞭りしてゐない爲めに、漠として聞える。第一「花曇り」と云ふのが、陳腐で俗臭がある。四、五句の「嘲りかはす鳥のこゑかな」も因襲的な言ひ方であ

る。春晴の日の本統の心持が、確かでない。

曇り空午後より晴れてのどかなる春の光りの野を戯ふかな

かう改めれば、單調ではあるが、幾分作の氣持は表はれて來る、修辭の整はないのは、少しく意を用ゐれば直るが、根本のふるく、臭味があるのは、壞しかへてしまはなければならぬ。

作者はなほ考へて見て、この作に物足らない時、更に深く細かく觀察して、左の如きものを得たとする。練習の歩を進めたものとして、注目すべき作を得る順序である。

春の晴れ花の木の間に啼き交はす鳥の羽にさすうららかなる陽

前の作から見れば、やゝ複雑して居るが、感味は十分でない。言葉から呼ぶ感味で、内容が充實してゐない傾きがある。しかし、この作はこれで出來て居る。幾んど練習の餘地がないが、今少し感味を確かにする必要から景趣を多少變へて見る。

春の晴れ花野に遊ぶ小鳥らの彩羽にさせるうららかなる陽

平和な氣分が出て居る。が、二句の「花野」は俗臭がある。若草のこまかに青く生えてゐる野に、小鳥らの遊んでゐる景色の方が興趣がある。即ち、

春の晴れ小草野にゐる小鳥らのつばさにさせるうららかなる陽

と改めて見る。「花野」だの「彩羽」だのと、飾られた言葉がなくつて、生地のはらはれて來たのがよ

5。改めついでに四句のあつても無くてもよいやうなのを、「生活を見る」と直したい。左に今一度書き直さう。

春の晴れ小草野にゐる小鳥らの生活を見るうららかなる日

無論十分ではないが、この位にして、もう一つ晴れた日の歌をノートから引き出して見る。

春の雲湖水の上にごかざるのどかなる日のうちつづくかな

あまりに内容がない。當時の興を呼んで、今少し細かにその邊りの景色を想ひ浮べて見て、左に試作する。

みづうみのほさは草の青々春の陽をうけあそべる羊

これは恐らく當時の景色を想ひ浮べて逸れたものであらう。想像の作には本統の興趣が乗つて居らぬ。逸れないで、本統に見た景色を試作しなければならぬ。

山中の湖水の上の春の雲にほふが如くうかぶ晴れ空

と改める。山中と云ふ景氣が、一首に少しも出て居らぬ。初句に「山中の」と置いて、それで全體に山氣を行き互らせようとするのは、專斷である。大ざつぱに自然を觀ないで、潛心した處がなければならぬ。この作者の歌には、それが缺けて居る。

杉木立いづれば廣く開けたる湖上に浮ぶ春の雲かな

かうすれば、山と云ふ文字がなくとも、山間の景氣は自から浮んで来る。たゞ五句の「かな」が落ちついて居らぬ。それに特に春と云ふ感じが薄い。秋の景色とも觀れば觀られる。三句の「開けたる」を「うち霞む」と改めて見る。さうして五句を「一ひらの雲」とする。左に今一度書き直して見る。

杉木立いづれば廣くうち霞む湖上に浮ぶ一ひらの雲

「湖上」が湖面に聞えて、雲が浮んでゐるやうに見える。さうなると、「うち霞む」が次へ續かなくなつて来る。今一考して、左の如く書き直す。

杉木立いづれば春のみづらみの眞上にうかぶ一ひらの雲

未だ言ひ立てれば多少の缺點はあらうが、素直に出來たのをよしとしてこの位にする。晴れた日の景色を詠んだものを今一つノートから書き抽いて見よう。

今度は秋の季節から採ることにする。

秋晴るるあかるき野へのひるすぎに心をそられ遠くも來にけり

家をいでて一町行き二町行き竟に遠い野へ迄來たと云ふ秋晴れの日の憶がれ心が窺へる。延びて一本調子なのが目につかぬでもないが、作者の一筋の淀みない心は却つてそれから想見せられよう。

(B)曇つた日。

季節を冬に取つて見る。

うちしぐれ雨来るべきをちかたの林のさまを淋しくも見る

かういふ作が出来たとする。一讀して誰しも氣づくべき缺點は、詠みつばなしといふことである。作者がその淋しい景色に思を潜めて詠んだと云ふ眞實な情緒が、著しく缺けて居る。粗漫な觀方が腹立しくなつて来る。この作者に今一度景色を見直すように忠告する。さうして出来た作を持ち來らしめる。

うちしぐれ雨来るべき空合ひに見る遠き森は靄しぬ

普通の繪のやうな景色である。實景を見なくても、繪を見ても詠めるやうな歌である。きまり切つて、生氣の乏しい作である。實景を見て作つたものなら、何故もつと生氣を得られなかつたかと言ひたい。

遠き森もやして雨の来るべきさまなり風の枯草を吹く

「風の枯草を吹く」は生氣ある觀方だが、どうも前に續かない。これだけ離れてゐるやうな感じを與へるのがよくない。併し、之は言ひ廻して何うにも直らう。ともかく前に比べて、内容の加はつて來たのは事實である。左に一首を渾化させる工夫を取つて見る。

雨ふくむ風枯草を吹き來り遠野の森は白く靄しぬ

かう改めれば、感じが一首に行き互つて来る。曇つた空の雨にならうとする趣が見える。作者の描

かうとした心持だけは達せられて居らう。練習から得た効果の一つである。

曇り日の寫生を今一つ試みる。

よべよりの風收まりて雲重く垂れたる冬の灰いろの空

といふのである。「よべよりの」とある初句が説明だ。現在見た冬の灰いろ空の感じを、もつと瞭りと表はしたい。

雲重く垂れたる冬の灰いろの空を翔れる鳥寒げなり

「冬の灰色の空」は随分、句がダレて居る。五句の「鳥寒げなり」といふ言ひ方も幼稚である。これは態々改めた甲斐がない。

雲重く垂れたる冬の朝空を翔れる鳥の灰いろの羽

かうすれば幾分見られて来る。「灰いろの羽」が冬の曇り空を象徴してゐるやうに見える。次に又別な景色を想ひ浮べて見る。

曇り日のひるすぎ薄き陽のさしてかげりぬ風の寒く吹き來る

實際見た景色ではあらうが、餘りに單純である。ごく幼稚な作者が、觀たまゝを詠むように言はれて、目に觸れるものを片端から作つて、得たものゝ一つであるやうに想はれる。歌の眼が少しでも明き出したら、かういふ單純な事柄で満足されなくならう。

曇り日のひるすぎ庭の枇杷の木に聲なく来る鳥七八羽

一〇八

といふ風な景色に目をつけるに違ひない。事柄が複雑して、景趣が見えて来る。前の歌には捉へ處がない、中心點がない。漫然として詠んだものである。が、この歌には、「聲なく来る」といふ、確とした捉へ處がある。作者のその景色に對する氣分が、よく表はれて居る。「鳥七八羽」と無造作に置いた結句も生きて居る。若しこれが「鳥の群れかな」とあつたら、面白味がすつと減ぜられて来る。何故かと言ふと、定まり切つて形式的になるからである。この作者も初め或は「鳥の群れかな」と置いたかも知れぬ。さうして物足らないで、あゝ改めたのであらう。而も一度は無造作過ぎやしまいかと掛念したかも知れぬ。が、「觀たまゝの生きた趣」と云ふ約束の下には、あゝ改めなければならなかつたであらう。

(六) 雨の日。

季節を先づ春に取る。

春の雨絲の如くも降り来るさびしく花の落つる夕ぐれ

といふ作を検べて見る。ごくたわいのない觀方で、作者の特別な氣分どころか、何等の興味も浮んで来ない。全體がお詠へ向きに出来てゐて、絲の如き春雨に夕ぐれの落花をあしらつた手段は陳套の甚しいものである。落花の夕、雨が降つて来たといふ景色を詠むことを否定するわけぢやない。

つまり、その景色に對する作者の態度が眞面目でないのを批難するのである。かういふのは、作者の態度について反省を促した上に、根本から改造させなければならぬ。

春の雨池のほさりのわか草をしこしこ青くぬらしぬるかな

と全で變つた景趣を捉へて詠んだ。これなら、確かに雨が降つてゐる。たゞ雨が新緑にでもそゝいでるやうで、春雨といふ感じが瞭りしてゐない。青くを何とか改むべき必要から、四句を「いと柔らかに」と換へて見る。かうすれば春らしくなつて来る。

次に季節を秋に取つて、雨の景色を寫したものを、ノートから抽いて見る。

さびしくも降れる雨かな見なれたる遠き木立の見えずなりけり

初、二句のダレて間延びのしてゐるのが、著くし感じられる。秋といふ特別の趣が出て居らぬ。「見えずなりけり」が要領を缺いて居る。以上の理由から、非常に練習の餘地のあることを考へねばならぬ。

遠き丘の木立の見えずなれるころくれゆく秋の雨の一日は

さびしい心持が一首の景色の中に含まれて来た。さびしいといふ説明の言葉がなくて、自然にさうした感じが表はれるやうでなくては面白くないのだ。單純な景色ではあるが、何となく心のとまる作となつた。

秋の雨の景色を嘗て見た記憶から呼んで見る。色々な場合が、目の前に現はれた。

川やなぎらうす黄ばむ葉の雨にぬれてつらなる岸のさびしき夕ぐれ

「うす黄ばむ葉」といふ観方は、日光を受けた場合に適して居る。一首の主眼点とも云ふべき所の、適切でないのが、印象を微弱ならしめる。そこで、

川やなぎ雨にぬれたる兩岸のさびしくつづく秋の夕ぐれ

と改める。前の歌から見れば、寂しい景色が表はれて来た。「さびしくつづく」といふ四句が一首の主眼点で、面白味はこの句から湧き出て居る。この場合の「さびし」といふ言葉は、間に合せて置いたものでなく、自然にかう言はなければならぬ所である。

#### (D) 風の日。

心の落ちつかぬ、慌<sup>あわ</sup>たしい感じが、この外界の刺戟から起つて来る。風の日<sup>あつた</sup>の景色の歌は、風物の動搖に伴うて、作者の心の動搖が付き纏ふ。そこが特殊の事柄である。

風の日<sup>あつた</sup>の林の木々の鳴る音をききつつ寒き夕ぐれを行く

林の木々が風に鳴つて寒い日だといふ記實に過ぎない。後半は全く説明であると言つても可い。左に今少し観察を細かにして見る。

風の日<sup>あつた</sup>の林の木々の鳴る音のさわがしからむかの一つ家

「かの一つ家」は無論林の陰に立つてゐるつもりだらうが、位置が確として居らぬ。「林の陰のかの一つ家」と言へばよく分つて来る。四五句はそれで出来たとしても、三句迄が一寸直らぬ。「騒がしき木々の鳴る音や風の日」と假りに置いて見る。而も初、二句にさうした心持が出て居らぬ。それから、「風の日<sup>あつた</sup>の林の陰のかの一つ家」といふ一本調子の、説明的な言ひ方が、動搖してゐる景趣を眼に浮ばせない。一首の組み立を變へて見る必要が起つて来る。

風さわぐ林の木々の下かげのかの一つ家のさびしがるらむ

三句の「下かげの」の下が、餘計ものである。この句のダレてゐるのが、一首の景趣を損ねて居る。二、三句を「林のかけの白塗りの」とすれば景色は隙りしてくるが、當初、風さわぐ林を主として描寫するつもりでゐたのに反して来る。白塗りの家が主眼になつて、風騒ぐ林はその背景になつた傾きがある。併し、要は風の日<sup>あつた</sup>の景色を寫すのにあるから、どちらが主である、客であると云ふことを詮索して、當初の目的に反する反しないをやかましく言ふことは無からう。練習してゐると、かういふ事はよく起つて来る。根本を忘れなければ、それでよい。

#### 四、推敲の度合

以上述べ來つた所で、推敲の上の要件はほと説き盡したつもりである。そこで尙ほ言ひ残した所



のこと——これまで説いて来たことをしめ括りかたがた一言したいのは、推敲の度合といふことである。これは是非研究者の心得ねばならぬ一事である。

氣の済む迄推敲するといふこと、それは研究者の藝術的良心よりして必ずしかせねばならぬ。併し、それと同時に又心得ねばならぬことは、妄みに推敲すればいいと言つて、その度合を忘れてはならぬのである。初心者は過ぎたるはなほ及ばざるが如き弊を敢てしてそれを却つて最も忠實であるかのやうに信じてゐる傾きがある。すべてに互つて、度合を保つといふことは、難かしいに違ひないが、難かしいと言つて省みなければ、何時迄経つても、ものゝ蔗境に達することは出来ない。特に歌の如く、推敲すれば切りのないものに在つては、度合即ち程度と云ふことを考へねばならぬ。初めにかういふことを詠まうとしたその思想と全然變つたものに改削して了つて、それがよくなつて居ればいいが、徒らに原形を損じて、その効果も亦損ぜられて居つたら、竟に徒勞である。推敲の徒勞！ 研究者の一考せねばならぬ所である。

何ういふのが徒勞であつて、その一考せねばならぬ理由は何うであるかと問はるゝことに以下少しく答へて見ようと思ふ。例に依つて實例を引いて説明することにする。そこで、初期の研究者が、初春の景色を歌はうとして、その觀たまゝの趣を、左の如く試作したとする。

地をふめば春のこころになりけりかの青空もうるほひて來ぬ

調子がすらすらと滞りがない。一讀すると、それでよいやうな氣もするが、少し考へて見ると、一首が餘り無雜作であると心づく。何處が際立つてさう感じるかと言ふと、二句と三句、即ち「春のこころになりけり」といふのが、さうである。四句と五句は好い。春の心に潤うて來た青空のさまが見えるやう。それにつけて、何うしても二、三句を直さねばならなくなる。で、試みに、

草生ふる如き

やはらかさ

と改めて見る。さうして讀み下して見る。「地をふめば草生ふる如き柔らかさかの青空もうるほひて來ぬ」確かによくなつた。併し、何だか不安な氣がして、もう一遍讀み下して見る。「地をふめば草生ふる如きやはらかさかの青空もうるほひて來ぬ」いゝやうだが、どうも二、三句が未だ落ちついて居らぬ。改めてみたい氣になる。で、又

草まこころどころ

崩えいでて

と更へて考へる。これでは、初句の「地をふめば」につゝかなくなる。と言つて、「地を行けば」も可笑しいし、「野を行けば」としても、枯草にまじつて、若草が青々と崩え出たと云ふのには語が足りない。初春の感じだから、矢張り前の「草生ふる如きやはらかさ」の方が、自然で、餘情がある。

かういふ風に、初め直した處に返つて来て、それに同意するやうになつて来る。推敲の度合は、前の方で止めて置いてよかつたのである。それが物足りない氣がして、二度三度改めて見た上、今のやうに振り返つて見て、前の方に返るといふのはよいことだが、それがわるくすると、前へ返ることを忘れて、直せば直すほど、よくなる氣がして、終ひには疲れて了ふ。さうして、どれが可いかわらなくなるといふ例は少なくない。推敲の度合を考へねばならぬ所以である。

左に又別の實例を示して見る。

今度は心の淋しい時の歌——それを試作して、練習の度合を明かにしてみよう。

白き紙もの書くこそが何か憂く見つめて居ればさびしくなれり

これは情のおもむく所が、一筋に歌はれて居る。が、何うも二句と三句の「もの書く」「何か憂く」の音の重複が、調子をギツバツさせてゐる。それにこの音の重複は、五句の「さびしくなれり」のくにも響いて、一首の聲調にさへこたはつて来る。どうしても何とか改めねばならぬ。で、試みに、

もの書かむさし  
見てあれば

と直してくると、四句も五句も何とかしなければならぬ。が、五句はそのままにして置いて、四句を

「何かうれたく」

として見る。左に一首を書き直す。

白き紙もの書かむさし見てあれば何かうれたくさびしくなれり

「うれたく」「さびしく」の音の重複は、對句だから、耳に障らない。所で、改作してよくなつたか何うかを考へて見る。感じは一層滞りなく表はされて来たが、一本調子に過ぎて、餘情がなくなつて来た氣がする。又考へて見ねばならなくなつて来た。

白き紙そのましろきに盪おさすこそが罪あるごさくおもほゆ

思想がやゝ複雑して来た。たゞ五句の「おもほゆ」が何うであらう。いくらか悠長すぎやしまいかと心づく。「おほゆる」と改めてみた。今度はぶツきら棒に感じて来た。「見てあり」としたら何うかと、ふいと胸にうかぶ。すつきりとして、その場合、作者の心持ちも瞭りと見えて来たが、かう結んで輕くなりやしまいかと又考へ直す。さうなると、この結びを直すばかりでは物足らなくなつて来る。

左に又一首を組み立て、見る。

白き紙そのましろきが眼に沁みてもの書くこそなたゆたはれけり

「眼に沁みて」といふ三句が、新しい眼の著け方のやうに思つて、喜んで見る。「たゆたはれけり」が、ダレてゐると眉をひそめる。五句で何うも行き詰るかたちだ。何とかあがきの取れるように直した

いものだと氣を揉む。で、一音を餘して、

「何かたゆたはる」

と改めてみる。さうして、初句から読み下してみる。落ちついては來たが、五句へ行つて急に重苦しくなつた氣がする。又氣になつて、好句を案じてみる。

「何かいさはる」

かうすれば、一音を餘さず、調もなだらかにきこえる。好い句を得たと喜んで、又考くて見ると、すうツと尻抜けがしてゐるやうだ。前の「何かたゆたはる」の方が、「眼に沁みて」に對し、まだしも煩ひのある心持ちが出てゐるやうに思はれてくる。併し、読み返してみると、何う考へても五句がギツついて妙でない。氣が揉めてならなくなつて來る。それで、四句も改めてかゝる。

「もの書きもえず」

として、五句を案じる。

「ただ見つめなり」

と浮び出た句を自分の心持ちのやうに考へて、四、五句をつゞけてみる。それから、前から読み返してみると、三句の「眼に沁みて」と五句の「見つめをり」とが、ぶつかる。いくら改めて見ても、思ふやうに行かぬ。改めれば改めるほど、劣つてくるやうな氣がするので、振り返つて前からのを左

に書きつらねてみる。

白き紙もの書かむさし見てあれば何かうれたくさびしくなれり

白き紙そのましろきに墨おさすこゝが罪あるごさく見てあり

白き紙そのましろきが眼に沁みてもの書くこゝのたゆたはれけり

白き紙そのましろきが眼に沁みてもの書きもえずただ見つめなり

此の四つの例について、何れが一番作意が徹つてゐるかを檢べてみる。これまでは作者自身の練習に任せて置いたが、今度は自分が批判者として、その可否を見わけることにする。一わたり読んで見て、直感せしめることは、二番目のが一番作者の感じを表はし得て居ることである。第三に「眼に沁みて」と云ふことを添へたのは、蛇足である。第四に至つて、一層拙くなつて來て居る。第二を得た時にそれで止めて置くのがよかつたのだ。併し、何も推敲だ、氣の濟む迄やつて見るがよい。が、他を批判する眼を養ふと共に自己を批判する力をつけることは、作者として極めて大切な事である。推敲してゐるうちに、靜かに自己の作を批判して、その可否を考へることが出來たら、あゝでもない、かうでもない、元骨を折らなくても濟むわけだ。こゝの例で見ても分るが、第二の作を得た時、少しく自作を批判する力があつたら、それで濟まして、後をあんなに煩悶しなくてもよかつたに違ひない。改作又改作して、得た所のものが、だん／＼意が満たなくなつたことを自覺して、

振り返つて後ろを見ようとしたから可いが、あれで、第四のを一番すぐれたものに定めてゐたら、困つたものであつた。

推敲の度合といふことは、要するに作者が自己の作を批判する力の如何に依つて決せられる。自分の事は自分で分り兼ねる如くに、自分の作は自分で批判しにくいものである。難かしい註文ではあるが、作をする時、作者は作家であると共に一面又批判者でなければならぬ。作の材料のよしあし、言ひ廻しの適不適を考へないで、漫然とした態度で、たゞ書いて居ればよいと云ふ丈けでは、諺に言ふ、行きあたりばつたりである。作者の眼の光りが瞭りしてゐる作でなければ、讀んでそれから感動を受け難い。感動を受け難い作は、作として洵につまらぬものである。つまり、作者の眼の光つてゐない作である。諸君は眼の光つてゐない作に満足する人々ではなからう。個性の漲つてゐる作、諸君は必ずさういふ作を欲してゐるに違ひない。自作を愛重する所以は、一面瞳を冷たくして自作を批判し、程よい練磨を重ねなければならぬことである。推敲の度合を全うすることは、やがて自己の作を愛護する所以であることが分つたら、出来るだけ心を用ゐて、この目的を達せしめねばならぬ。

今一つ實例について述べて見る。

青空が好ましくなりいさまあれば見上ぐる癖のつきにけるかな

といふ歌、これは何ういふ心持ちで、作者が詠んだものか分らぬ。「好ましくなり」何うして好ましくなつたのか一寸理解しにくい。作者の心持ちに立ち入つて考へて見たら、うら淋しさに、かうした氣になつたのではあるまいか。それは、「見あぐる癖のつきにけるかな」といふ、便りなげな言ひ方が、さうした心持ちを證してゐるやうにも思はれる。が、又一方「青空が好ましくなり」は、いかにも明るく氣持ちがよさうで、これにはさうした淋しさを想ひ浮べがたい。併し、これは矢張り淋しい心持ちを歌はうとして、表はせなかつたのであらう。自分は批判者の立場から、かうした推測を下してみた。さうして、左に推敲から得る効果ある度合を示さうと思ふ。

青空がなつかしくなりその青に眼をうつすことがならひさなれり

どうも淋しみが薄い。まだ前の「見上ぐる癖のつきにけるかな」の方が、その心持ちがくまれる。それに今度のは、三句以下非常にダレて居る。殆んど改作した價値がないと言つて可い。

青空がなつかしくなり目をあぐる時のこころに合へる青かな

「目をあぐる時のこころに合へる」迄の言ひ方はよい。「青かな」は何といふ窮した言葉であらう。「なぐさめ」と改めたら、淋しい心持ちに合つていゝかも知れぬ。口ずさんでゐると好さうなので、左に書き下して見る。

青空がなつかしくなり目をあぐる時のこころに合へるなぐさめ

前よりも確かに作意が瞭りして来てよくはなつたが、餘りにダラリとしてゐる。今少し引きしまつた心持を表はしてみなければならぬ。もうひと息で何とかましなものが出来さうだ。併し、一寸考へた所で、何うもうまく行きさうもなければ、作意の先づ徹つて来たこの作で我慢して、別の新しい思想の下に一首を組み立てる考へをした方がよい。何とか出来さうな自信があつたら、ドンドン改めて行つても可いが、これより發展出来ないといふ見當がついたら、それにいつ迄も執著して、漸次まづくなつて行く作を列べて行つた所で、何もならぬ譯だ。改作する位なら、別な思想の下に出發した方が、意味がある。

推敲の度合に依つてその作を生かせもし、死なせもする位、作をする上に重い關係があることを知つたら、推敲しつゝ批判の眼を逸らさないように注意すべきである。

### 五、私の添削の實例

いつか機を見て、私が歌稿を添削する場合の態度といふやうなものを述べてみたいと思つてゐると、丁度左の如き質問を出された。

「私の歌は御添削を受けて、意味のちがつたものになりました。これを私の歌と呼ぶには躊躇されます。私はいふ歌はむしろ抹殺していただいた方が心持がよいと思ひます。御高見を伺ひたい。」

私はこゝにその質問にお答へかたく、私の添削をする場合の態度ともいふべきものを明かにする機會の來たのを喜んだ。

私は諸君の歌稿を見る時、諸君の表はさうとした事柄が十分に出てゐるかどうかを先づ考査してみる。さうして、いつも感ずることは、その中の七八まで表現の不十分なことである。觀方に獨自のものがあると認めても、表現の不十分を爲めに、その獨自の點が、甚だ覺束ないものになつてゐるのを見る時、私はその作者の爲めに甚だ氣の毒に思ふのである。かういふ時、私はそのたどたどしい表現の爲めに掩はれた獨自の觀方を發揮したいと念ずる。四、五句を改めたら、三句までの心持を明かにすることが出来ようと思つて、改めて讀み下してみると、まだ瞭りしない。三句までを少し直して又讀み下してみると、矢張り瞭りしない。私の心はやゝ焦立つて来る。私は強ひてさうした心持を鎮めて、原作を又口吟んでみる。二度三度口吟んでみる。……作者の心持と冥合するまで、目をつぶつて幾度となく口吟んでみる。さうして前に改めたのが、作者の心持ともどつてゐることに考へ及んだ時、私は少し直しすぎるかと思つても、直してしまふのである。K君の歌もさうした徑路を取つて改めたものと思ふ。私はいふ歌はかうして改まつた歌をよし意味が多少變つて來ても作者のものとして見て差支ないと思ふ。作者の心持と冥合するのは、強ひてさうさせようとして努めなくとも、目を瞑ぢて幾度となく口吟んでゐると、自然にさうした氣持になつて來る。意味の徹底

しない歌に對する時には、いつもこの方法を探る。十中の七八迄は作者の心持と違はないつもりでも、時にK君のやうな質問にあつて、私はしづかに反省してみる。しかも、私の頭の底に映つて來るものは、作者の言はうとして言ひ得なかつた心持の擴充したものである。作者は言ひ廻しのちがつたので、一寸奇異な感に打たれるか知れぬが、再讀三讀してみれば、自分の覗つてねらひえなかつた心持を言つてもらつたと思ふにちがひない。卒讀した時と、味讀した時とはちがふものである。私は多く改めることがあながち添削の能事ではないと思つてゐる。一字か一句を改めてその歌の意味が徹底し、その歌の價値を揚げる事が出來た時、私は特に喜ばしく思ふものである。しかもかすかに独自の點が漂うてゐて、それがたどくしい表現の爲めに掩はれてゐるのを認める時、私はその作者の爲めに痛切に心苦しく思ふのである。それで、その意味の徹底する迄は前記の如く、作者の心と冥合し、作者と一心一體になつて修正し、やうやく意味の徹るのを待つて止むのである。私は又諸君の中の或る人々の歌に見る、平板な著想を平板に表現して出來たやうなものは、一字を加へることなく、點のみを附けて返すことがある。さうした歌は、それで整つてゐて、筆を加へる餘地がないからである。私の不深切でも何でもなく、さうするより外に途がないからである。かういふ歌には殆んど独自の點がない。整つてゐなくても、何處かに独自のものが潜んでゐて、それが表はれてゐないと云ふものに努力してみる方が、私として心持がいゝのである。

諸君は言葉を整へようと云ふことを最初に考へてはならぬ、何うかして自分の感じたことを的確に表はしたいと努力せねばならぬ。さうしてそれが独自のものであるのを信するだけの一念がなければならぬ。私はさういふ歌を諸君のすべてから見たいのである。それが完全に表現せられたか否かは別問題として。――

左に私の添削の實例一斑を擧げてみたいと思ふ。

夕焼けて高嶺に雲の動く時鐘の呻吟をききてたたずむ

この歌の第一の缺點は作者の位置の明かでないことである。第二の缺點は「鐘のうめき」と云ふやうな、要領を得ない句を使つたことである。この二つは是非改めねばならぬ。

夕焼けて高嶺に雲の動く時ふもこの寺ゆ鐘鳴りひびく

かう改めたら、その價値は第二として、一首が徹底して、作の統一を得ることになる。

ほのくらしき夕さる頃の水平線白くつづける波は悲しも

四、五句の觀方は可い。第二句の描寫が、もつとはつきりして居つたら、先づ無難であつたらう。「日のいりあとの」と改めたらその場景を明かにすることが出來よう。同じ作者の同じ場處を詠んだものに、「はろばろと水平線上流れゆく煤煙淡く消えにけるかも」といへるは、見たまゝに過ぎ、平板無味に失してゐる。これは作者の感動がないからである。

晝すぎの雪の景色を見てなれば彼方の小舎に羊啼きたり

一一四

場處のはつきりしてゐないのが第一の缺點である。何處の雪景だか分らない。「晝すぎ」と云ふ時間を入れるのは、この場合不必要である。初句を「窓あけて」と改め、第四句の「彼方の」といふ何處を指してゐるか分らぬやうなものをやめて、「庭べの」と改めたい。さうすれば、一首の意は徹つて来る。

いと淡き淋しみごころわきにけり病室の戸に夕陽照れば

淡いが、しつとりした感じを出してゐる。たゞ第二句の「淋しみごころ」が「うら淋しさの」と改まれば、一首先づ缺點がない。

ひこりきく夜の寒行の鐘の音の遠くさかるがものはかなかり

第四句は「さかりゆけるが」と、だん／＼離れて行くようにしたい。それから第三句の「鐘」は、小さいのだから「鉦」の方であらう。同じ作者の「嵐ふく夜半の小窓を細うあけ歸り來人の上を氣づかふ」は作者が女性であるだけに、細かい情趣があらはれてゐる。たゞ第四句「歸り來人の」は「かへりくひとの」と讀むのであらうが、「かへりく人」は語をなさない。「かへりくる人の」といはなければならぬ、けれどこゝは「かへり來む人の」と未來に言はなければならぬ所であらう。

華やける少女の春にあひながら枯野の蟲に似しわが身かな

「枯野の蟲」と云ふ比喻は「枯野の草」といつた方が、自然で、この場合にふさはしいのである。

朝まだき山に來ぬれば雪の路堅く凍りて吾れの靴音

第二句の「山に來ぬれば」は説明である。第五句の「吾れの靴音」は靴音が何うしたのだから分らぬ。「朝まだき山路の雪の堅く凍り」と四句までの分を三句につめてしまひ、四、五句を「吾がふむ靴の音の寒けさ」とする。まだ十分ではないが、一首の感じは滞りなく表はれて來た。

雪の嶺いく重つらなりしんかんさ赤良ひく日は昇りそめつつ

初、二句が三句以下とはなれて居る。「雪白き山脈の上に」と改めればつゞく。三句以下はいゝと思ふ。「しんかん」とがこの朝のしづかさをよく表はしてゐる。一首の調子をこの句が保つてゐる。

氷雨ふる山峽の家の薄暗き厨に夕の飯たきてをり

一讀して氣づくのは、ごたく／＼してゐることである。「薄暗き」とことわらないで、さうした感じを、「氷雨ふる」にふくませていゝわけである。下には夕の飯を焚くといふこともあるし、かた／＼「薄暗き」は省いていゝのである。「氷雨ふる音をききつつ峽の家の厨に夕べ飯焚きてをり」と放めたら、すつと歌が清んで來てよくなる。歌に説明くらゐ、くだ／＼しいものはない。一句一句に含蓄を持たせて、一首に餘情あらしめなければならぬ。道具立の多いのは、何もかも言はうとする初心の間に免れないことであるが、さうした滓は取つてしまつて、出来る丈け清ませることをこころ掛

けねばならぬ。

第三部 讀むべき歌集



## 一、萬葉集

歌を修むる者が、まづ讀まねばならぬ歌集に、萬葉集がある。日本に於ける最古の歌集だといふ意味からしても、また奈良朝の自由自然なる天地に生ひ立つた歌集だといふ意味からしても、この集はどうしても讀まなければならぬ。いや、たゞそれだけの理由には止まらない。もしわれ／＼が、古歌集に學ぶところがあるならば、その最も多くは萬葉集に於て發見さるゝのであつて、歌道修業の精神に、形式に、模範として體得すべき點がはなはだ多いのである。古來、歌道の第一義を、趣向の方面に置いた所謂堂上歌人は姑くおき、歌を以て純真なる人情の發露であると信じた先人が、之を尊んだのは無理もない。私もまた、單純素朴なる古代の自然人が生んだ、野性に富むこの一大歌集を、諸君に奨めるに躊躇しないのである。

そこで、萬葉集とはどんな性質の歌集かといふことになる。が、これに就ては一般文學史にも説いてあるところであつて、その概念だけは大抵の人が知つてゐる。だから茲には、その方面のことは極めて簡単に説明し、主として集載された歌の印象を述べよう。この書の讀者は、歌書の史的研究をするよりも、詠作の心を養ふのが目的だらうから、その方が却つてよからうと思ふ。

萬葉集の選ばれたのは何時の時代か、また、その選者は誰かといふことに就ては、いまだ定説といふものがない。この書の研究に著手したのは頗る古く、早くは平安朝の天曆年間にはじまつてゐるのだから、もう一定の説があつていゝ筈であるが、研究諸家によつてなほまち／＼である。時代に就ては或は孝謙天皇の御代であるといひ、平城天皇の御代であるといひ、選者に就ては或は勅選であるといひ、家持、濱成であるといひ、諸兄、眞楯であるといひ、人によつて皆異なる。が、最も有力な説として信じられてゐたのは、諸兄がはじめ選したものを、次で家持が追成したといふ説である。いづれにしても、この書が一度家持の手を経てゐることは明らかで、東京帝國大學の萬葉校訂事業に携つてゐる武田祐吉氏などは之に就いて詳しい研究を發表してゐる。

この集に載つてゐる歌は、時代に於て仁徳天皇から淳仁天皇に至る凡そ四百年間、數に於て長歌、短歌等合せて四千四百數十首、之を二十卷に分つてある。この内、長歌といふのは五言七言の二句を、數個もしくは數十個連ね、最後に七言、七言を以て止めたもの、短歌は今いふ和歌で、五言、七言、五言、七言、七言の五句を以て一首をなすもの、旋頭歌は、五言、七言、七言の三句が、二連を以て一首をなすものである。すべて世に萬葉書といはれる、漢字の特殊な用法によつて書いたもので、初學のものには甚讀みにくい。けれども、今は之を假名交なまじりに書き改めた書で、信用し得るものがいくらも出てゐるから、さう苦勞せず萬葉人の素朴な思想に接することが出来るのである。左に、少しばかり萬葉集の歌に就いての印象を述べよう。

一體萬葉集の歌は、一口にかうだ、と断定することは出来ない。それほど特徴が多く、また複雑である。勿論、古今集にしろ、新古今集にしろ、特徴の少いといふものはないが、それらにはそれぞれ一貫した色調がある。選者の好みといはうか、時の流行といはうか、兎に角一様の姿がある。萬葉集とて勿論絶対に選者の好みによつて洗禮されてゐないとは云へまいが、その姿は千差萬別で、各人各様、一作者毎に一つの特徴が明かに見える。何しろ集められた範圍が、四百年間の長きに亘つてゐるのだから、作者によつては幾十昔の差がある。だから心の置き處も違つて來ようし、従つて藝術的感興の起る色合も違つて來よう。又、後代と違つて、歌とはかういふものだといふ範疇をもつてゐて詠作したのでないから、その姿も自由で、範圍も甚だ廣い。そこがやがてこの集の價值のある點であり、面白い所以であるが、それだけ讀んで消化するのに苦心を要し、萬葉集の精神の概念を得るのに困難を覚えるのである。たとへば、

かしこしこものいふよりは酒飲みて酔ひ泣きするし勝りたるらし  
あな醜くさかしらなす酒のまぬ人をよく見ば猿にかも似む  
夜光る玉さいふさも酒飲みて心をやるにあにしかめやも  
此世にし楽しくあらば來世には蟲にも鳥にも我はなりなむ

——卷三、大伴の旅人の歌——

のやうに、放膽にして天地を一呑にするやうな、甚だ自由な歌があるかと思ふと、一方には、

現身の命を惜しみ浪にぬれ伊良胡の島の玉藻刈り食む  
——卷一、麻績の王が、伊勢の國伊良胡の島に流された時の歌——  
家にあれば筈にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る  
——卷二、有馬の皇子が、御自らの身の上を哀まれた歌——

御立たしの島の荒磯をけふ見れば生ひざりし草生ひにけるかも  
——卷三、日並知の皇子の尊を廢宮に移し奉つた時、舍人の悲しんで作つた歌——

のやうに、憂愁の情胸に迫るやうな歌がある。さうかと思ふと、又  
童ども草はな刈りそ八穂蓼を穂積の朝臣がわきくさを刈れ  
——卷十六、平群の某が穂積の朝臣の腋臭を嗤つた歌——

法師らが鬚のそり杭馬つなぎいたくな牽きそ法師なげかむ  
——卷十六、法師の鬚を嘲り嗤つた歌——

のやうに、諧謔の色調に富んだのがあり、更に  
よき人のよしこよく見てよしさいひし吉野よく見よよき人よく見つ  
——卷一、吉野行宮に於ける天武天皇の御製——

巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ偲ぶな巨勢の春野を

——卷一、持統天皇紀伊行幸の時、坂門まがとの人足の歌——

のやうに、言葉の音律を巧に用ゐた、多少洒落氣味の歌もある。しかも、これらはその特長のほんの一部分、一方面に過ぎない。更に仔細に求めて行つたなら、作者毎に特徴があり、歌毎おのづからに趣がちがふ。だから萬葉集を繙いて見ると、恰度千草亂れて咲きにほふ秋の野に分け入つたやうに、花の一枝毎に盡きせぬ趣がある。そこが面白いのだが、その面白さに眼がくらんで、初學者が道を迷ふのも亦こゝだ。どちらを向いても清姿艶態つきせぬので、あれもよしこれもよしで口眞似がしたくなる。そして結句口達者、腹なしの歌を澤山詠んで、「我こそ萬葉の眞諦を得たれ」といふ心になる。こゝが一番危険なのである。

さてそれでは、萬葉集の歌はしかく特徴が多くて、二十巻を通する一定の色調が全然ないのかといふと、さうではない。勿論後の古歌集のやうに、選者の好このみの洗禮を受ける度合がすくないから、姿は様々であるが、その底には、やはり時代から来る統一があつて、それが二十巻の核心となり、心棒となつてゐる。どんな風の統一かと訊かれるとちよつと説明に困るが、兎に角全巻二十、歌數四千、すべて自然のまゝであるといふことが出来る。その意味では、孔子が詩經を評して「詩三百、一言以て之を蔽へば、曰く思邪おもひよこなし」といつたことを、そのまゝ萬葉集に借用してもよいやうであ

る。實に萬葉集の卷々には、この邪よこしまなき心を以て、自然のまゝの姿が踊りめぐつてゐる。言ふまでもなく、これは自由にして素朴な當時の人心の表はれであるが、こゝが萬葉集の藝術として尊むべき點であり、又我々の學ぶべきところであるのだ。

自然といふことは、ありのまゝといふことである。奇を衒はぬといふことである。といふと、いや、萬葉集にはなか／＼奇拔な歌が澤山ある、といふ人があるかも知れぬ。なるほどさういへば、如何にもそれに違ひない。前に擧げた酒の歌、腋臭を嗤つた歌、法師の鬚を嘲り嗤つた歌などは勿論、

天の海に雲の波立ち月の船星の林にこぎかくる見ゆ

——卷七、人麻呂集に見えてゐるさいふ歌——

一つ二つの目のみにあらず五つ六つ三つ四つさへあり双六のさえ

——卷十六、双六の目を詠んだ歌——

などを見ると、奇想を弄したやうにも思へるし、取つて學ぶべき歌でもない。けれども、奇拔は奇抜に相違ないが、その奇拔ささへ甚だ稚氣に満ちてゐて、微塵衒ふと云ふ影が見えない。この衒ふといふ影のない事が即ち自然であつて、感興そのもののありのまゝの姿である。これを後世の物名と稱する歌に、きちかうの花を詠んで、

あきちかうのはなりにけり白露のおける草葉も色かはりゆく

—古今集卷六、友則の歌—

などと機智を弄したり、からももの花を詠んで、

あふからもものはなほこそ悲しけれ別れむこきをかれて思へば

—同卷十、深養父の歌—

などところばの悪戯に耽つてゐるのに比較したら、その相違がどこにあるか、よくわからうと思ふ。けれども、茲でまた繰り返していふが、萬葉集中に於ても、前に擧げた腋臭を嗤ふ歌、法師の鬚の歌、人麻呂集に見えるといふ歌、双六の目を詠んだ歌等の類を、初心の者が取つて學ぶのは、甚だ危険である。初心の内はこれらの歌をたゞ萬葉集中の一體として、たまく吟ずる位に止めて置くに如くはないであらう。

では、萬葉集の中で、我々が取つて學ぶべき歌はどんな人々の歌かといふと、これは甚だ多い。いな、多いといふよりも、大體に於てその純眞素朴な作歌態度は、大に學んで差支ない。が、その中でも特に著しく傑れた人々を擧げるなら、後世歌聖としてまつられた柿本人麻呂をはじめとして、山邊赤人、山上憶良、笠金村、高橋蟲麻呂、長意吉麻呂、橘諸兄、大伴旅人、大伴家持等、その他にも頗る多い。更にその中でも、人麻呂、赤人、憶良、家持の四人は、特に優れた歌を残してゐるから、左にその歌を二三首づつ抄出しよう。

輕皇子、宿于安騎野一時作歌

柿本人麻呂

ひむがしの野にかぎろひのたつみえてかへりみすれば月かたぶきぬ

從石見國別妻上來時歌

石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか

天皇、御遊雷岳之時作歌

大君は神にしませば天雲のいかづちのうへにいほりせるかも

幸紀伊國一時歌

山邊赤人

わかぬ浦にしほみちくればかたをなみ葦邊をさして鶴なきわたる

春 雜

春の野に菫摘みにと來しわれぞ野をなつかしみひと夜寝にける

罷宴歌

山上憶良

憶良等は今は罷らむ子泣くらむその子の母も吾を待つらむぞ

思子等一歌

しろがねもこがねも玉もなにせむにまされる寶子に及かめやも

在大唐憶本郷一

第三部 讀むべき歌集

いさ子ども早くやまとへ大伴の御津の濱松まぢ戀ひぬらむ

鶯歌

大伴家持

うちきらし雪はふりつつしかすがに吾家の花にうぐひす鳴くも

同

春の野に霞たなびきうら悲しこのゆふかげに鶯鳴くも

春愁

うらうらに照れる春日に雲雀あがりこころ悲しも一人しおもへば

## 二、古今和歌集

萬葉集に亞いで世に現はれた古歌集に、古今和歌集がある。略して古今集といはれるのがこれで、昔は萬葉集よりもこの方が一般に讀まれ、模範とされた。それだけ名高いものであるから、参考として讀んで置くのもよからう。が、人間自然の情感が溢れて歌となるものだといふ考へ方を前提として見ると、この集の傾向は餘り芳しくない。勿論そのかはり、萬葉集から見れば、その趣向に於て複雑であり、その用語に於て洗煉されてゐるから、その方面からは益することも尠なくはなからうと思ふのである。

この集は全二十巻で、收めてある歌数は一千百十數首である。袋草紙には一千九十九首とあり、八雲御抄には一千百首とあるが、流布本のは少し多くなつてゐる。内容は長歌が五つ、旋頭歌が四つあつて、あとの残りが三十一字の短歌、四季、賀、露旅、物名、戀、哀傷、雜、雜體等に分類してある。舊説に従へば、この集の選ばれたのは、延喜五年四月十八日で、選者は紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人、醍醐天皇の勅を奉じて、選者の歌と、萬葉集に漏れた古來の歌を選び集めたものである。そして、この集は勅撰集のはじめで、後の勅撰集は、範をみなこれに取つてゐる。だから、まづ勅撰集の源として、苟も三十一字の歌を詠まうとするものは、一度は讀んで置く必要がある。

そこで、この集には、どんな質の歌が載せられてあるかといふことになるが、これは萬葉集のやうに千差萬別、一作者一首毎に趣が違ふのではないから、比較的説明に都合がよい。早くいへばこの集になると、實感よりは甚しく趣向の勝つた歌が多く、全巻まづ趣向を以て蔽ふと云つても過言ではないやうである。

趣向といふのは、つまり理智の加へられた技巧のことで、萬葉集の自然の姿とは反對の意味になる。だから萬葉集の方では、物に觸れて感じる所があれば、直ちに言葉となつて現はれてゐるが、こゝではたゞそれで済まされてはゐない。まづ、一つの對象に觸れて心が動く。と、それが言葉と

なつて一首の歌を成すまでには、更に理智によつていろ／＼の細工が加へられる。この細工が即ち趣向で、またこの趣向が、古今集全體を蔽ふ特徴となつてゐるのである。それだけ古今集の歌は面白い。單に面白いといふ方面からはそれでよいが、しかし純粹なる感情の表現を以て、藝術と看做す我々の見地には合しがたいのである。

かういふことは、説明ばかりでは、解るものではないから、茲に一二の例を擧げてみよう。例へば、開卷第一の歌を擧げて、

年の内に春は來にけり一年を去年こやいはむ今年こやいはむ

——在原元方が、ふる年に春立ちける日よめる歌——

袖ひぢて結びし水の氷れるを春たつけふの風やこくらむ

——紀貫之が、春立ちける日よめる歌——

春たてば花こや見らむ白雲のかかれる枝にうぐひすのなく

——素性法師が、雪の木に降りかゝれるをよめる歌——

と、まづかうである。しかも之等の歌の趣向は、初學の者には説明を加へなければ、わからぬ位複雑を極めてゐる。雪上霜を積むのそしりは免かれまいが、いまほんの初學の人のため、之等の歌に説明を加へて見よう。まづ第一の歌は、十二月の中に立春に會つて詠んだ歌である。だから、ふる

いに春たちける日よめるといふはし書がある。一首の意は、このはし書のとほり、まだ十二月だといふのに春が立つた。してみるともはやこの十二月は去年として過ぎ去つた譯だが、まだ一月が來ないから、去年ともいひ難い。はてこの一年の境を、去年といつたものか今年といつたものか、と疑つたのである。第二の歌は、氷が解けるといふ事柄を云ふために、過ぎ去つた夏から冬のことまでも採り入れて、細々と詠んである。まづ袖ひぢてむすびし水は、水に袖を浸しながら、兩手に掬つて飲んだ夏のこと、こほれるはその水が凍つてしまつた冬のこと、春たつけふの以下は、凍つた水が又解けて流れようといふ春のことで、何のことはない一首のうち、一年のことが詠み込んであるといふ次第である。いや、まだそれだけでは説明が足りない。第二句に結びしとあり、結句に解くらむとあるのは、結ぶと解くの對句をなさしめたもので、その難しいことは、ほとんど謎だといつてもさしつかへない。この二首に比較すると、第三の歌などはすつと單純な方で、誰にもよくわかる。が、それでも花とや見らむで一首の意味が複雑になつてゐて、こゝに趣向のあることは、言ふまでもないのである。

併しながらこの趣向も、實感の上の粉飾となつてゐるならまだよい。が、その程度で止つてゐるのは、古今集の内でも稚拙な方で、すつと巧者になると、實感はさて置いて、趣向の上を趣向で粉飾してある。さうなるとその巧妙さには感心するが、果して藝術として許さるべきかどうか、甚だ

疑はしくなつて来るのである。例へば、

敷妙の枕のしたに海はあれど人をみるめは生ひすぞありける

——卷十二、紀友則が戀歌——

逢ふことのなぎさにしよる浪なれば浦みてのみぞ立ちかへりける

——卷十三、在原元方が戀の歌——

などはどうか。第一の歌は、思ふ人を見ないので、ひとり泣き濡れて寝てゐること。第二の歌は、思ふ人に逢ふことが出来ないので、恨んで立ち歸ることを詠んだものだが、どう考へてもこの三十一字の裡に、その實感の片影だに通つてゐるとは思ひ得ない。枕に流るゝ涙を海に譬へたなども甚しい誇張であるし、しかも思ふ人に見ゆることを、その海みづの海松布みづのふに言ひ掛けてある。第二の歌もまた、逢ふことのないのを、なぎさに言ひかけ、浦見を恨みに通はすなど、ほとんど技巧のあらん限りを盡してゐる。けれども趣向の面白さもかうなつて來ると、それは藝術の境まがひを悟る面白さではなくて、謎々か地口を解く面白さと五十歩百歩の差よりない。純粹な自分の心情を、直なまく正しい言葉を以て表はすために歌を學ぶ者が、古今集に學んではならないのはこゝである。

さてそれでは、古今集二十卷は、全部趣向萬能の歌かといふと、強ちさうとのみは限つてゐない。中には讀人しらすの歌、及東歌、大歌所の歌等に、自由自然の姿があつて、全卷の單調を破つてゐる。

讀人しらすはつまり作者不明の意で、當時名を記すに足らぬ者の歌、又は古くから傳へられた作者不明の歌等、東歌は諺物うたひものに用ゐた東國の歌、大歌所は神樂風俗などのうたひものを掌る所で、即ち大歌所の歌はそこで用ゐる歌である。その數は餘り多くはないが、質に於ては優れてゐるのが多いから、少しくこゝに抄記しよう。

春霞立たるやいづこみよしのの吉野の山に雪はふりつつ——讀人しらす、卷一——

野べちかく家居しなれば鶯のなくなるこゑはあさななきく——同——

春日野の飛火とよひの野守いでて見よ今いくかありて若菜つみてむ——同——

ほささぎすなくこゑ聞けばわかれにし故郷さへぞ戀しかりける——同、卷三——

我がせこが衣のすそを吹き返しうらめづらしき秋のはつかぜ——同、卷四——

ふるさは吉野の山しちかければ一日ひもみ雪ふらぬ日はなし——同、卷六——

いでわれを人なさがめそ大舟のゆたにたゆたに物思ふころぞ——同、卷十一——

くれなゐのはつ花ぞめのいろふかくおもひしこころわれわすれめや——同、卷十四——

しはつ山うち出でて見れば笠ゆひの鳥こぎかくる棚なし小舟——大歌所の歌、卷二十——

み山には霞ふるらしさ山なるまさきのかづらいろづきにけり——

——神あそびの歌、卷二十一——

わが門のいた井の清水里さほみ人しくまればみ草おひにけり——同——

みちのくのいづくはあれど鹽竈のうらくぐ舟の綱手かなしも——東歌、卷二十一——

みさぶらひみ笠さ申せ宮城野の木の下露はあめにまされり——同——

筑波根の嶺のみぢ葉落ち積りしるもしらぬもなべて悲しも——同——

以上のやうな風調である。勿論これらは、その一部分にすぎないが、大方その傾向が古今集一般の歌風と、どう違ふかは解らうと思ふ。前に擧げた在原元方、紀貫之、素性法師等の歌には、何處を見ても純粹といふところは發見されないが、これはまた何處を見ても趣向といふものを發見することが出来ない。それだけ前の歌は理智の歌であり、この歌は實感の歌である。而してこの兩極端の歌の、前の方の歌はやがて古今集の特徴を代表するものであり、後の方はその蔭に潜んでゐる古風の名残りともいふべきもので、同じ一冊の歌集のうちに、之を併せて見ることの出来るのは、甚だ興味のあることと云はなければならぬ。

さて、これで古今集に對する大體の感想は述べ終へたが、今度は古今集を代表する歌人は、誰々かといふことになる。が、古今集の特長なるものが、以上の如く初學の學ぶべきものでないといふことになる、さう詳しく書く必要がない。そこで茲には古今集の選者といはれる紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人の歌の内から、比較的趣向の勝つてゐない歌を擧げて、この一篇を終

ることにしよう。

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

——卷二、紀友則がさくらの花のちるをよめる歌——

さみだれに物思ひをれば時鳥夜ぶかく鳴きていづち行くらむ

——卷三、同人が寛平の御時きさいの宮の歌合の歌——

露ながらをりてかざさむ菊の花老いせぬ秋のひさしかるべく

——卷五、同人が是貞のみこの家の歌合の歌——

春霞たなびく山のさくら花みれどもあかぬきみにもあるかな

——卷十四、同人が戀の歌——

春日野の若菜つみにや白妙のそでふりはへて人のゆくらむ

——卷一、紀貫之が歌奉れさ仰せられし時詠みて奉れる歌——

人はいさ心もしらず故郷ははなぞむかしの香ににほひける

——卷一、同人が、初瀬に詣づることに宿りける人の家に久しくやどらで、ほどへて後にいたれりければ、かの家のあるじ、かくさだかになむやどりはある  
こいひ出して侍りければ、そこにたてりける梅の花を折りてよめる歌——



梅の花にほふ春べはくらぶ山間にこゆれどしるくぞありける

——卷一、同人がくらぶ山にてよめる歌——

春の野に若菜つまむさこしものをちりかふ花に道はまどひぬ

——卷二、同人が、寛平の御時きさいの宮の歌合の歌——

わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおさづれもせず

——卷六、凡河内躬恒か物へまかりける人を待ちて、しはすの晦日によめる歌——

夜を寒みおくはつ霜をはらひつつくさの枕にあまたたび寝ぬ

——卷九、同人が、甲斐の國へまかりける時道にてよめる歌——

かれはてむ後をばしらで夏草のふかくも人のおもほゆるかな

——卷十四、同人が戀の歌——

吉野川よしや人こそつらからめ早くいひてしこそはわすれじ

——卷十五、同——

山里は秋こそここにわびしけれ鹿の鳴く音にめなさましつ

——卷四、壬生忠岑が、是貞のみこの家の歌合の歌——

かきくらしふる白雪の下ぎえにきてても思ふころにもあるかな

——卷十二、同人が戀の歌——

有明のつれなく見えしわかれよりあかつきばかりうきものはなし

——卷十三、同——

### 三、新古今和歌集

古今集に次いで、世に多く行はるゝ歌集に新古今和歌集がある。建仁元年十二月、後鳥羽上皇の命によつて、元久二年三月選集されたもので、右衛門督源通具、大藏卿藤原有家、左近衛中将藤原定家、前上總介藤原家隆、左近衛少將藤原雅經の五人が選者の役に與つてゐる。歌數は一千九百數十首で、序、部立、卷數等は、みな古今集と同じい。

當時は、後鳥羽、土御門、順徳の三上皇をはじめ奉り、家隆、定家など、後世歌聖とまで言はるる巨匠が輩出してゐるので、この集も内容は活氣を帯びてゐる。が、その歌風はどうかといふと、古今集が趣向本位の作り歌に墮してゐたと同じやうに、これも亦製造歌の境を出でず、純粹な感情の出でゐる歌は餘り見當らぬといふ有様である。たゞこの集の歌の傾向が、古今集のそれと違ふ點は、趣向そのものがずつと洗煉されて來てゐること、つまり古今集に於ける趣向は、複雑が複雑のまゝで詠まれてあるが、この集では複雑は更に單純化されてゐる。それだけ言葉も洗煉されてゐる。

るから、優美な點に於ては古今集より遙にすぐれてをり、單純なる點に於ては却つて萬葉集に似通ふところがある。試に開卷第一の歌二三を擧げてみても、

みよし野は山もかすみて白雪のふりにしさに春は來にけり

——攝政太政大臣(藤原良經)が春たつ心を詠んだ歌——

山ふかみはるさもしらぬ松の戸にたえだえかかるゆきの玉水

——式子内親王が、春の歌——

春さいへばかすみにけりなきのふまで波間に見えし淡路島山

——俊惠法師の歌——

といふ有様である。これを前に引いた古今集の、最初に擧げた三首の歌と比較したなら、その著しい違が解るであらう。古今集の方は、三首とも趣向に出でて趣向に終つてゐるが、この歌は趣向は裏にかくれて、表面は餘程單純になつてゐる。それだけ表面から見れば、萬葉集の歌に似てゐるのである。

それでは萬葉集と新古今集とは、その歌風に於て全然同じやうなものかといふと、いやさうではない。萬葉集の方の單純は自然そのまゝであるが故に單純なのだが、この集の方は巧まれたる單純である。だから萬葉集の歌は、自から詠まれた歌で、この集の歌は作られた歌だといふことになる。

このちがひは恰度野生の花と、庭に造られた花とのちがひで、やがてこの兩集の歌風のちがひである。従つて萬葉集の歌は荒削で、野性の味を持つてゐるが、この集の歌は仕上の磨がかゝつてゐて、遙かに優美だ。この點は、萬葉集にある、

春すぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香具山——卷一、持統天皇の御歌——

田子の浦ゆるち出でて見ればま白にぞ富士の高峯に雪はふりける

——卷三、山邊赤人の歌——

などの歌をひきなほして、本集には、

春すぎて夏來にけらししるたへの衣ほすてふあまのかぐ山——卷三——

田子の浦にうち出でてみれば白妙のふじの高嶺に雪はふりつつ——卷六——

として採つてあるに見てもわかる。夏きたるらしを夏來にけらしに(但この讀方、萬葉集でも、契沖は夏來にけらしと讀んでゐるが、今は多くの説、衣ほしたりを衣ほすてふに、田子の浦ゆを田子の浦にに、ま白にぞを白妙にに、ふりけるをふりつつに、みなひきなほして流麗にしてある。この差はつまり野生と人工、又時代の差で、兩集を讀むものゝ心得て置くべき處であらう。

この外にもこの集には、萬葉集から採つた歌が澤山ある。一寸卷一のうちから擧げて、

風まぜに雪は降りつつしかすがに霞たなびき春は來にけり——讀人しらや——

時は今春になりぬさみ雪ふる遠き山べにかすみたなびく——  
 明日よりは若菜つまむさしめし野に昨日も今日も雪は降りつゝ——  
 山邊赤人——  
 卷向の檜原もいまだ曇られば小松が原にあわ雪ぞふる——  
 中納言家持——  
 今更に雪ふらめやもかげるふのもゆる春日さ成りにしものを——  
 読人知らず——

といふ風で、この外にも、萬葉から採抄した歌は甚だ多い。他にも理由はあらうが、萬葉集からかく多くの歌を採つてあるといふことは、やがてこの集と萬葉集とに共通點のあるといふことにもなる。又その採抄に際して、如何なる歌を選んだかといふことは、この集と萬葉集との異なる點を發見する便ともなる。さういふ意味で、この集は、萬葉集、古今集と併せ讀んで、甚だ興味があると思ふのである。

以上は新古今集を讀んで、相當に參考になる點であるが、それではこの集を讀んで一番害になる點はどこか、といふと、まづ本歌どりとといふ一種の遊戲的作歌の多くあることであらう。本歌どりの歌といふのは、古歌の有名な詞を殊更に取つて、之を巧妙に用ゐ作る事で、藝術家として甚しく純粹な態度を缺いたものである。例を擧げて言へば、まづ古今集に、

風ふけば峯にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か  
 といふ名歌があると、之をもぢつて、

櫻花夢か現かしら雲のたえてつれなき嶺の春風——  
 家隆——

と作り、又、伊勢物語に

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひさつはもこの身にして  
 といふ名歌があると、之を又もぢつて、

里は荒れて月やあらぬさうらみても誰淺茅生に衣うつらむ——  
 良經——

と作るが如きこれである。しかも之等の歌は、單に古歌の言葉を借りるだけが目的ではない。更にその本歌となる古歌の意をも借り來つて、一首で二首の内容を詠み出さうとするのだから、之は決して賞すべき態度といふことは出来ないのである。

新古今集のなかの歌人には、後世まで名を残した人が甚だ多い。前に擧げた五人の選者は勿論、外にも西行法師、曾根好忠、寂蓮法師、など名を擧げるに違ないほどである。殊に選者の一人なる定家の如きは、後世歌聖とまで言はれたが、その歌に見るべきものは尠い。却つて西行、好忠などに心から詠み出した歌があるから、茲にはそれを二三首づつ抄出しよう。

さめこかし梅盛りなるわがやどなうさきも人はをりにこそよれ——  
 卷一、西行の歌——  
 心なき身にもあはれはしられけり鳴立澤の秋の夕ぐれ——  
 卷四、同——

哀れさてさふ人のなどなかるらむもの思ふやどの萩のうは風——卷十四、同——  
 雲かかる遠山はたのあきされば思ひやるだにかなしきものを——卷十六、同——  
 朝ぼらけ萩の上葉のつゆみればややはださむし秋のはつかぜ——卷四、曾根好忠の歌——  
 冬草のかれにし人のいまさらに雪ふみわけて見えむものは——卷六、同——  
 かた岡の雪まにれざすわか草のほのかにみてし人ぞこひしき——卷十一、同——

#### 四、曾 丹 集

曾丹集は具さに曾根好忠べのしゅう家集といひ、丹後掾曾根好忠の歌集である。この集は下河邊長流の校正したもの、源躬弦、岸本由豆流、藤原寛光等の校正したものとおつて、今はほとんど流布してゐない。たゞ群書類従和歌部卷第二百六十二に收められてあるだけで、外にはあまり見えないやうである。集載する短歌はすべてで六百ばかりで、外に長歌が數首あり、全部秀逸といふことは出来ないが、異色のある歌が甚だ多い。殊に千篇一律の平安朝末期から鎌倉時代へかけての歌人の中では、西行と共に最も特色のあつた歌人だから、その歌はたとひ傑作でなくとも、盡きぬ趣が溢れてゐる。

異色のある歌人と云つて、どんな風調の歌を詠んだかといふと、之はその歌を説明する前に、その

人物を語る方が早い。と云つて、好忠の傳は詳かになつてはゐないが、兎に角圓融院の頃の人で、多少滑稽的な人物であつたことだけは傳つてゐる。ある書物には、好忠が丹後掾の職にあつた處から、曾丹後掾と呼び、更に略して曾丹後から曾丹と呼ぶるゝに至つたので、當人も「何時そたといはることぞ」と嘆じたとあるから、その性格の一端はわからう。また寛和元年二月十三日に、圓融院が子の日の御遊をなされた時に、時の歌人を召し出だされたが、好忠は召されもせぬに參列して、大分怒られたといふ逸話もある。このことは小野宮右大臣記といふ書に見えてゐて、彼が時の人々から輕んぜられてゐたことがわかる。それでも當の好忠は一向平氣で、歸つてから「よさの海内外の濱はうらさびてうき世をわたるあまの橋立」といふ歌を奉つてゐるから、その性格が洒脱で、人がどう思はうと意に留めなかつたに違ひない。曾丹集は、さういふ異色のある人の歌を集めてあるから、面白くもあり、研究に資すべきものの多いのは言ふまでもない。

だから曾丹集の歌は、一言にして言へば洒脱な、大まかな、その中におのづからなる風韻を具へてゐる。當時一流の歌人が、技巧の末にばかり拘泥してゐた中に、好忠の歌ひとり放膽であつた。思ふことはどしどし詠み出すといふ風で、例を擧げて見ても、

なげやなげよもぎがそまのきりぎりすくれゆく秋はげにぞかなしき

夜は寒し寢床はうすしふるさこの妹がはだへは今ぞ戀しき

といふ風である。殊にはじめの一首の如きは、長能が之を評して、「好忠は狂惑のやつなり、蓬が袖といふことやはあるべき」といつて非難したといはれるくらゐだから、その言葉づかひは自由であつて、凝り固まつた歌人達には合點されなかつたのも無理はない。然しながら、此の言葉の選擇に自由であつたといふことは、やがて好忠の歌を當時の不自由な鑿型式歌風から救つた所以なのである。

では、好忠の歌は、すべてが左様に自由であつたかといふと、一方には當時の歌風をまねて、技巧を凝したのも大分ある。中でも有名なのは、定家卿の選んだといふ小倉百首にある

由良の門を渡る舟人かぢをたえゆくへもしらぬ戀の道かな

といふ歌で、これなどはいゝ意味でも悪い意味でも、當時の歌風そのまゝのものである。外にもまだこの種の歌が多くあるから、それを讀み分けて、いゝ處だけを讀み味つて行つたら、得るところが多いのである。

左に少しばかり、この集の中で佳作と思ふものを抄出しよう。勿論、ほんの一部分に過ぎないことは斷つて置く。

山の峽かすみわたリし朝より若菜つむべき野べをしぞ思ふ

隙もなく物おもひつる宿なれどするわざなしに夏ぞ涼しき

上そよぐ竹の葉なみのかたよりをみるにつけても夏ぞ涼しき

山城の鳥羽田のおもを見渡せばほのかに今朝は秋風ぞふく

山里は垣外の道もみえぬまで秋の木の葉にうづもれにけり

箱根山二子の山も秋ふかみあけくれ風に木の葉ちりかふ

あたご山橋の原に雪つもり花つむ人の跡だにもなき

## 五、山 家 集

曾根好忠よりはすこし時代は後れるが、西行法師の歌がまた一異色を備へてゐる。家集は山家集といつて、之は曾丹集と違つて多く流布してゐるから、購讀に便である。西行の歌は、異色があると云つても、好忠の歌とはまた趣が違ふ。それは言ふまでもなく、西行の人物性格そのものが好忠とは違ふからで、これは西行の爲人を説明すれば、おのづからわかる。左に西行の一生を、極めて簡単に述べよう。

西行は一七七八年即ち鳥羽天皇の頃から、一八五〇年即ち後鳥羽天皇の頃まで生きた人で、幼時から僧形ではない。はじめは俗名佐藤義清といつて、崇徳天皇の朝に鳥羽上皇に仕へた武士である。妻もあり子もあつたのであるが、二十三歳の時之を捨て、僧となり法名を圓位といひ、西行といつた

のは後である。僧となつてからは一處に定住せず一笠一笈を友として、六十餘州を行脚に暮した。そして到る處の風物人情に觸るゝに隨つて、詩情を縦まにしつゝ再び京に歸つて、建久元年二月十六日、齡七十三で入寂したのである。

西行は旅で生涯を送つた歌人であるから、旅の歌が集の中に多い。そして、彼が佛道の修業にいそむところから、思を深く澄まして、所謂靜思諦觀の境に到つた歌が多い。たとへば、

さびしさにたへたる人のまたもあれな庵ならべむ冬の山里

おのづから音する人もなかりけり山めぐりする時雨ならでは

等がそれで、こゝまで心を澄ますことは、俗に身を置いてはなか／＼出來難いところである。後世定家の名をかりて著はしたといふ愚祕抄に「西行上人のさまをまなばんことは、非器の輩ゆふく々かなふまじきさまにて侍り、まね損ぜば世に平懷にも、又かたはらいたくもきこゆべき也」と云つたのも、一つはかやうな點を云つたものだらうか。一見やす／＼と詠みいでて、しかも平語に墮ちてゐないところは、實に彼の心の上の修業によるものといふべきである。虚實見聞記に「西行の曰く、和歌は禪定の修行なり、われ和歌によつて佛法を得たり」といふことが書いてあるが、これが西行の言かどうかは別問題として、山家集をよく讀み味つてみると、この心持はよくうなづくことが出来るのである。

さて、以上のやうな意味からいふと、西行の歌の異色は、好忠の歌の異色とは相反するやうになる。が、出發點は相反しても、その結果は相似てゐると言つて差支ない。一は修業から型を脱し、一は自由から殻をぬけただけで、結局自然の藝術境に楽しんだことは、兩者よく似てゐるのである。だから好忠が用語に於て自由であつたやうに、西行もまた頗る大膽で、

うき身にて聞くも惜しきは鶯の霞にむせぶ曙のこゑ

ふる畑のそばのたつ木にゐる鳩の友よぶこゑのすきき夕ぐれ

とやうに、當時にあつては珍しい用語を示してゐる。尤も「霞にむせぶ曙のこゑ」などは、當時流行の風が見えてゐるが、兎に角用語に於ても拘束されなかつたといふ點では、大いに學んで然るべきであらう。

山家集の外にも、俊成卿の判を加へた御裳濯川歌合、定家卿の判を加へた宮川歌合等があるが、まづ山家集を讀めば、西行の歌風の大體はわかる。又、勅撰集に採られた彼の歌は、千載集に十七首、新古今集に九十四首、新勅撰集に十四首、續後撰集に十一首、玉葉集に四十九首等である。左に、山家集中佳作と思ふもの數首を抄記しよう。

春雨のふる野の若菜生ひぬらしぬれぬれ摘まむかたみ手ぬきれ

五月雨のはれぬ日數のふるままに沼の眞菰はみがくれにけり

おのづから月やどるべきひまもなく池に蓮の花さきにけり  
 おぼつかな秋はいかなる故のあればすするにものかなしかるらむ  
 横雲の風にわかるるしののめに山さびこゆるはつ雁のこゑ  
 心なき身にもあはれはしられけり鳴たつさはの秋の夕ぐれ  
 繁余野の萩がたえまのひまひまにこのてがしはの花さきにけり  
 あはぢ鳥瀬戸のなごろは高くさもこの潮わだにおし渡らばや

## 六、拾遺愚草

拾遺愚草は藤原定家の家集であつて、之をかく名づけたのは、彼がその侍従職時代の歌を巻初にかゝげたがため、侍従の唐名は拾遺といふからである。定家はその歌風からいふと、技巧本位の所謂遊戯文學的の歌を詠んだ人だから、直き言葉をもつて、直き心を現はさうとする我々には、取つて學ぶべき點は尠ない。けれども彼は後世までわが歌壇の牛耳をとつた二條、冷泉などの、所謂和歌師範家の祖で、人丸、貫之と共に和歌三尊とまで仰がれた人だから、その歌集は一應讀み味つて置く必要があらう。この拾遺愚草は三巻で、外に同員外二巻があり、共に今は多く活字本となつて流布してゐるから、求めるに不自由ではない。

定家は、千載集の選者で當時の歌風の代表者たる藤原俊成の子で、二條天皇の應保二年に生れ、仁治二年八十歳で逝つた。彼が和歌を以て認めらるゝに至つたのは、二十歳の養和元年で、此の時はじめて百首を詠じ、世の稱讚を博したのである。又二十六歳の時、父俊成が千載集を奏進した時、はじめて八首の歌を採られ、それより年を追うて名を擧ぐるに至つたのである。或は所々の都合の作者として席に連り、更に進んでは判者として列し、遂に父俊成と共に當時一流の歌人たることを、上下共に許さるゝに至つた。かくて四十四歳の時、後鳥羽上皇の勅命によつて、通具、家隆、有家、雅經等と共に新古今集を選び、七十三歳、再び勅を奉じて新勅撰集を選ぶに及んで、當時の歌人として並ぶものなき勢力を得たのである。彼の勢力、彼の歌が如何に當時の歌壇に重きをなしたかは、千載集以下新續古今集までの勅撰集に選ばれた彼の歌が、四百五十六首に及んでゐるといふに見ても、容易に推察することが出来る。

そこで定家の歌は、どういふ風調のものかといふことであるが、これは我々にとつては、甚だ縁遠い。何しろ徹書記物語などには「そもく歌道に於て、定家を難せん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきなり」と言つてあるくらゐだから、定家崇拜者には怒られようが、遺憾ながらその歌は、純粹なる感情の發露と見ることは出来ないのである。彼の父俊成は非常に苦吟家であつたが、彼は又稀有の達吟家で、數刻にして百首位の歌は作り出したといふから、それが害をなしたもので

あらうか、どの歌を讀んでも眞の情熱が込められてゐない。たとへば、彼の歌中でも名歌といはるもの數首を擧げて見ても、

みわたせば花も紅葉もなかりけり浦のさまやの秋の夕ぐれ

あけば又秋の半も過ぎぬべしかたぶく月の惜しきのみかは

駒さめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ

霜さゆるあしたの原の冬枯に一花さけるやまこなでしこ

といふ風で、その言葉々にひとつも血が通つてゐないのである。勿論それは殆んど無瑕といつてもよいほど整つた言葉によつて一首を成してゐるが、畢竟彼特有の才智によつて作られたといふに過ぎないのであつて、我々がいくら耳を澄ましても、この中から人間自然の聲を聞くことは出来ないのである。彼は所謂有心體を主張して、「心なき歌はわるきにて候」また「心を本として詞を取捨せよとこそ、亡父卿も申しおき侍りし」と云つてゐるから、一概に才氣に任せて作り出でたばかりではなく、十分歌そのものゝ根本に遡つて考察もしてゐたのであることは信じられるが、それだけ彼の歌が一層理智的になつてゐることは争ふことが出来ないのである。

然しがならこれは、私一個の立脚地から見た印象にすぎないから、之を以て彼の歌を讀まうと志す者を引止めることは出来ない。更に又別個の考から、彼の歌の内の眞心を悟ることの出来る人も

あらうから、ともかく一讀することを勧めるのである。左に彼の歌の中から、佳作といはるゝもの數首を擧げよう。

天の原おもへばかはる色もなし秋こそ月の光なりけれ

初瀬山傾ぶく月もほのぼのさかすみに洩るる鐘の音かな

霜まよふ空にしなれし雁がれの歸るつばさに春雨ぞふる

時鳥しばしやすらへ菅原や伏見の里のむらさめの空

白妙の袖のわかれに露おちて身にしむ色の秋風ぞふく

## 七、金 槐 集

金槐集は賀茂眞淵が「八重立つ雲霧を拂ふ風の如くひたぶるにして云々」と嘆稱した鎌倉右大臣源實朝の家集である。收むるところの歌は、四季、戀、雜に分れ、すべて七百餘首。彼の歴史的事蹟について、周知の事に屬するから、こゝには言はぬ。歌は藤原定家に學んだが、その趣はほとんど天性に根ざしてゐる。師の定家もまたこれを認めて「鎌倉の右府はたけたる歌よみとこそ覺ゆれ」と賞めたが、その歌風は定家とは全然別物である。むしろ彼の歌調はすつと古く、萬葉集の古色を帯



びてをり、その詠み出づる心にも、平安朝から鎌倉時代にかけては見られぬ自然さがある。それは一つには彼の境遇が武人であつたためと、一つにはその師定家から贈られたといはるゝ萬葉集を愛讀したためであらうが、當時、堂上風の流麗な歌風萬能の渦中にあつて、進んでこの純朴な歌風を詠み出だした事は大に稱すべきであらう。今、彼の集中から、その一二を擧げてみると、

みなミ風いたくなふきそしながどりぬなの湖舟さむるまで  
玉くしげ箱根の海は心あれや二くにかけて何かたゆたふ  
ゆふされば汐風さむし波間より見ゆる小島に雪はふりつつ

一通りかやうな歌風であるが、こゝには古今集以來新勅撰集までの一般歌風に見る言葉の上の遊戯といふやうな影は些かも見えない。どこまでも眞實で、一語々々皆心の底に根ざしてゐる。もしこの歌だけを、はじめて彼の歌に接する人に見せたなら、或は當時の歌壇の一方にあつた歌風として、果して首肯くかどうかさへ疑はしい位である。

然しながら實朝の歌風は、一生を通じてかやうであつた譯ではない。一方にはまた當時の歌風に追隨して、あやしい言葉巧みな歌をも作つてゐたのであつて、詳しく考へ來れば彼の歌道修業の時期によつて、あるひは兩様に分けることが出来るのであらう。而してこの一方の歌風の例を擧げる

と、

あふさかのあらしの風にちる花をしげしきどむる關守ぞなき  
散りぬればさふ人もなし故郷は花をむかしのあるじなりけり  
なつごろもたちしきよりあしびきの山郭公なかぬ日ぞなき  
すむ人もなき宿なれど萩の葉の露をたづねて秋は來にけり

まづかうである。これらになるとほとんど當時の一般歌風そのまゝで、前の四首とは、同一人の作とは思はれぬほどのちがひがある。更にもつと時流に隨つたと思はれるのは、この頃盛んに流行した本とり歌を作つたことで、これは

春日野のさぶ火の野守今日さてや昔かたみにわか菜つむらむ  
(本歌)

春日野のさぶ火の野守いでて見よいま幾日ありて若菜つみてむ (古今集)  
名にしおはばいざ尋ねみむあふ坂の關路ににはふ花はありやま

(本歌)  
名にし負はばいざこそ問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやま (古今集)

等、外にもかなり多く見える。尤も第二の歌の方は、本とり歌と名づけたものゝ、本歌の趣向、言葉

等を眞似ただけで、その意味までを借り來つて一層深い内容を持たせようとしたのではないから、完全な本とり歌とは言ひ得ぬかも知れぬが、兎に角かやうに本とり歌でなくば、模倣も甚しいといへるのが澤山にある。これは歌人としては決して賞むべきことでなく、彼の歌集を讀んで學ぶべからざる半面である。

しかしながら、茲で一寸注意すべきことは、彼はかやうに心を本意とした歌と、言葉を本意とした歌と兩様に詠作してゐても、その中におのづから彼としての特長が具はつてゐることである。たとひ本とり歌を作つても、模倣歌を詠んでも、何處までも趣向が簡明で、他の同時代の歌人達のやうに、小細工を弄してゐない。それだけ巧みかたが目立たないから、かうして分類して見ないと、歌集の中で一讀しただけでは區別が立たない位である。

彼が二十八歳の若さで、非命の死を遂げたことに就いて、いまだ老熟の域に達しないで死んだのは惜しいと云はれてゐるが、これは強ち惜むべきことではないと思ふ。何故ならば、當時の技巧歌人であつたら、若さと老熟さとはそこに霄壤の差があらうが、「誠」を詠み出だすことを目的とした實朝の歌に於ては、老練を要するかどうか疑問だからである。否、むしろ老熟と共に所謂歌に馴れるといふ弊が來るとするならば、若さは却つて喜ぶべきことかも知れない。或は實朝の歌が何處までも線が太く、小才の利いたところのないのは、彼の歌がまだ若かつたがためであらうと思ふのである。

である。

左に金槐集中の佳作と思はるゝものを尙、少しく抄記しよう。

おしなべて春は來にけり筑波嶺のこのもかのもに霞たなびく  
 秋風に夜のふけゆけば久方の天の河原に月かたぶきぬ  
 天の原ふりさけみればますかがみきよき月夜に雁なきわたる  
 大海の磯もさどろによる波のわれて碎けてさけて散るかも  
 箱根路をわがこえくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ  
 山はさけ海はあせなむ世なりさも君にふた心われあらめやも  
 草枕旅にしあれば妹に戀ひさむるまなみゆめさへ見えす  
 ものいはぬ四方の獸すらだにもあはれなるかなや親の子をおもふ  
 世の中は常にもがもな落こぐ海人の小船の綱手かなしも  
 かつらぎや高間の櫻ながむれば夕ゐる雲に春雨ぞふる  
 ふく風の涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴きて秋は來にけり  
 五月雨に水まさるらしあやめ草うれ葉かくれて刈る人ぞなき

## 八、平賀元義歌集

平賀元義歌集は、備前の國學者平賀元義の歌集である。元義は寛政十二年の生れで、岡山藩の中老河田勘解由の臣である。本姓は平尾氏だが、その陪臣であるのがおもしろくなく、出でて平賀氏を嗣いだのだと云はれてゐる。國學は誰に學んだのでもなく、獨學で圖書に眼をさらしたらしいが、著作は相當にあつたやうである。惜しむらくは今多く散逸し、僅かに傳はるのは「美作神社考」、「美作英田郡巨勢郷考」、「服部郡圖考」、「聞書山陽道名所考」、「備前國續國土記」などと云ふ。女色と酒に耽る癖があつて、その爲か轢軻不遇の生を送つたのである。晩年は困窮殊に甚しかつたと見えて、放浪の生活の後、行き仆れになつたとさへ云はれてゐる。

山中治左衛門といふ人から、

白波の興津新吉はける足袋神代もきかずあはれ片足袋（興津新吉とは元義の通稱）

といふ歌を贈られたところをみると、彼の片足は異常であつたらしく、風采またあがらなかつたに違ひない。

歌風は純然たるいはゆる萬葉調で、正岡子規は之を極力稱讃し、徳川時代に於ける唯一の萬葉體得者だと云つた。鎌倉時代に於いて既に實朝が萬葉の古調を學んで成功してゐるから、その點では

珍しいことはない。たゞ實朝には多少新古今の香ひが存してゐるが、元義は徹頭徹尾萬葉若しくはそれ以前の古調で一貫してゐる。又實朝の金槐集には長歌、旋頭歌の作がないが、彼には比較的多くの長歌と、少しの旋頭歌があつて、しかもそれ／＼特色を持つてゐる。和歌を弄びものとしなかつたことは兩者同じで、共に學ぶに足る點である。

歌を弄びものにしなかつたといふことは、その言葉の裡に、真心が生きてゐるといふことで、さういふ意味からは、たとひ萬葉の風調に模しても、彼の歌は獨創であり、天品であるさへいひ得る。心こころ詞ことば共に古人の模倣にばかり陥つてゐた當時の歌壇に於いて、元義の堂々たる此の萬葉調の模倣は、却つて彼を偉大ならしめた觀がある。集中から二三例を挙げると、

牛飼の子らにくはせま天地のかみのもりおける麥飯の山

もしげき吉備の中山櫻ちり青葉しげりぬ春つきむさす

水鳥の鴨の川上風をよみ飛びかふ螢見れどあかぬかも

柞葉はくはの母をおもへば兒鳥の海途崎の磯波たち騒ぐ

大君の加佐米の山のつむじ風ますらたけなが笠吹き放つ

かういふ風である。これを讀んで見ても、調は萬葉風でも、たゞの眞似言まねごとに終つてゐないことは諒解出來よう。

尤も實朝に古歌の模倣があつたやうに彼にも模倣以上に出でないものもないことはない。即ち、

鴨山の瀧つ白浪さにづらふ少女と二人見れどあかぬかも

(本歌)

あられうつあられ松原住江のおさひ少女と見れどあかぬかも (萬葉集)

X

皆人の得がてにすさふ君を得て君率寝む夜は人な來りそ

(本歌)

われはもや安見兒得たり皆人の得がてにすさふ安見兒得たり (萬葉集)

等がその著しいものだが、この外にも古歌の詞を借り來て作つた歌がかなり多い。そして中には萬葉以後の歌集から借りて來たのも間々見えるが、大部分は單純な萬葉風の歌である。

又、前に擧げた山中治左衛門から「白浪の興津新吉」云々の歌を贈られたのは、元義がはじめ作つた

足曳の山中治左が佩ける太刀神代もきかずあはれ長刀

の返歌であるが、元義のこの歌なども、古事記にある

八雲さす出雲建が佩ける太刀黒葛多卷き眞身なしにあはれ

の模倣であるが、これなどは即興の中に相當彼の面目が出てゐると思ふ。

元義が頗る好色であつたことは、この歌集を見ても明かで、一見たゞちに女に關する歌の多いのに氣がつく。中には随分露骨なのがあつて、例の「五番町石橋の上」云々の歌は名高いほどであるが、さすがに純なところがあつて、美辭を弄するに過ぎない平安朝歌人の戀歌の比でない。一方また、彼の歌には神々に對する敬虔な心を詠んだものが甚だ多く、集中、女の歌と神の歌との對照を頗る面白く讀み合せることが出来る。

集中の佳作と思ふものを左に尙、少しく抄記しよう。

雪ふりていたも淋しき夕暮にもすが音さほし逢崎の里

妹が家の向ひの山は眞木の葉の若葉涼しく生ひ出でにけり

まそかがみ清き月夜に兒島の海逢崎山に梅のちる見ゆ

二萬坂をうちいでみれば梅の花さける山邊に妹が家見ゆ

ひさ方の月の光に海見れば雲の退邊にいもが國見ゆ

夕さればみ雪こごりて妹がすむ鏡の山は越えやすきかも

妹が宿の葉廣隈櫃五枝槻木のくれしじになりにけるかも

高根より南ふき來て吾妹子の宿こそ夏は涼しかりけれ

## 九、草 徑 集

一六八

草徑集は大隈言道ことみちの歌集である。言道は姓を清原、通稱を清助、號を萍堂といふ。福岡に住し家の業は商であつたが、言道之を好まず、弟言則に家を譲つて自らは國學に心を寄せた。そして歌と書を二川相近に、漢學を廣瀬淡窓に學び、學成つてからは那珂郡今泉村に住み、子弟を教養した。又、浪華に七年ほど住んだが、再び故郷に歸り、慶應四年七月二十九日に世を去つた。家集には南樓集、篠舎集、草徑集等があり、草徑集は佐々木信綱氏の續歌學全書第八編に收められてゐる。

言道の歌風は一體に地味で小味で、少しこの道に馴れて來ないと、ほとんど印象に残らない位である。しかしよく嚼みしめてゆくと、小味の中に飽かぬうまみがある。歌といふものは大味なものみでなく、一方には斯様な淡泊なものもあるといふことを心得て置くために、豫め讀んで置く必要は十分ある。

いや高くなるかき聞けば鶯のこの下音にもれをかへてなく  
雨ふればながるる庭の水よりも頭いでたるつくづくしかな  
田の面より我門さして來る人の近づかぬ間に誰さ知らばや  
窓に窓むかひあひたる大船の一夜どなりのなつかしげなる

花見つつ山をめぐりていくたびもおなじまころのおもしろきかな

一寸擧げてみてもかうである。五首とも、ちつと心を澄まして讀めば、如何にもと首肯かるゝ點はあるが、一讀しただけでは平語と思はれるかも知れない。實に言道の歌は、平語と思はるゝか思はれぬかの間に、髪一筋の仕切りがあるだけで、初心者には一寸誤まられ易い。が、その呼吸さへのみ込んで讀めば、なかく味のあつた歌集である。

左に尙、彼の特徵と思はるゝ歌二三を擧げよう。

咲く花に遊ぶを見れば鳥だにも食はむここのみは思はざりけり  
放つ矢のゆくへたづぬる草むらに見いでて折れるなでしこの花  
をりなりは雨のままにもしたかはで横さまにちる花も見えけり  
これのみやけふはありつることならむ松の實一つおちし夕暮  
夕づく日うつるふ窓にうつるかな梅に木づたふ鶯のかけ  
木のまより流れいでたる庭たづみ流れはゆかではるる雨かな

## 一〇、志濃夫廼舎歌集

志濃夫廼舎歌集は、福井の歌人井手曙覽あきみの歌集である。曙覽は姓を橘、初名を尙事、五郎右衛門の子で、幼名を五郎三郎といつた。田中大秀に學び、本居宣長の風を慕つた。學成つてからは足羽山に居を定めて子弟を教へ、更に三橋町に隠れて世に出でなかつた。けれども、福井の藩主松平慶永厚く彼を遇し、常に疑義を彼に質したと云はれてゐる。彼はまた勤王の志深く、明治維新の際、福井藩出兵に當つては、歌を作つて兵士を激勵したが、明治元年八月、政權王室に復すると共に彼は此の世を去つた。

彼は萬葉の歌風を非常に喜んだが、その歌は萬葉を出でて別個の趣を成した。殊に用語に於ては、元義のやうに萬葉集中のものを借りて來ることが甚だ尠なく、大抵は平明な常の言葉で詠み出されてある。たとへば、

きのふまで吾が衣手にさりすがり父よ父よさいひてしものを

——娘健女の死去に詠んだ歌——

髪白くなりても親のある人もおほかるものをわれに親なし

——父の十七年忌に詠んだ歌——

慕ひあまる心額にあつまりてうちつけらるる地つちの上かな

——同じく墓にまうでて詠んだ歌——

などの如く、少しも巧を弄し、わざと構へたあとがない。それだけ初心の者にも解りやすいが、そのかはり、ともすると、平語と誤られることがある。初心者が彼の歌を読み、その趣をとり違へて眞似ると、邪道に陥るのもこの點であるから、彼の歌集を読むものは、豫めそれを心得て置かねばならぬ。

彼の歌は大抵平明であるが、中には又多少趣向を設けた歌がないでもない。それは一種の本もとと、り歌とも云はゞ云はるべき詠みぶりうたまりで、たとへば古賢を偲んで詠んだ歌に、その人の歌句の一節をとり來るがごときものである。

唇のさむきのみかは秋の風聞けば骨にも徹る一こゝこ——芭蕉翁を詠んだ歌——

心なき身にもあはれさ泣きすがる兒には涙のかからざりきや——西行法師を詠んだ歌——

等がその例であるが、これは彼獨特の本もとと、り歌だといふことも出来る。前の歌は、芭蕉翁の

もの言へば唇寒し秋の風

の句によつて、翁を偲んだもの。後の歌はまた西行法師の

心なき身にもあはれは知られけり鴨立澤の秋の夕ぐれ

の歌によつて、法師を偲んだもので、この歌集中特色ある歌のひとつである。が、かういふ歌に果して藝術としての價値があるかどうかといふことになる、それはおのづから別問題である。

左に尙、數首を擧げて、彼の特色ある作風を窺はう。

一七二

敏録とがまさりかりしかるかや葺きそへて聞かばや庵の秋の夜の雨——菫蓋——  
雨ふれば泥ふみなづむ大津道われに馬ありめされ旅人——行路雨——  
風まじり雨ふる寺の犬ふせぎしぶきのぬれにうつる御燈みかどし——古寺雨——  
あないぶせ銚子をかけてたく薬のもゆさはなしに煙のみたつ——煙——  
たのしみは朝おきいでて昨日までなかりし花の咲ける見る時——獨參陞——  
たのしみは雪ふる夜さり酒の糟あぶりて食うて火にあたる時——同——  
たのしみは炭さしすてておきし火の紅くなりきて湯の煮ゆる時——同——  
たのしみは晝寐目さむる枕べにこまこま湯の煮えてある時——同——  
たのしみは好き筆をえてまづ水にひたしぬぶりて試るさき——同——

## 一、海人の菫藻

海人の菫藻は太田垣蓮月尼の歌集である。尼は京都智恩院の廣間侍太田垣傳右衛門光古(一説傳右衛門)の子で、寛政三年に生れた。初名を誠といひ、長じて歌を千種有功の門に學び、又武技をよくした

たといふ。夫あり、四人の子をなしたが皆早く世を去つたので、若く黒髪をおろして蓮月と號した。手づから陶器を製し、之に自詠の和歌を書いて鬻いだ、非常に雅致があるので世にもはやされた。尼の歌を集めた書には、この「海人の菫藻」の外に蓮月式部二女和歌集、蓮月歌集等があるが、これらの集に洩れたものがなほ頗る多い。

尼の歌はどちらかといふと小味な方で讀み味つて見ると、淡泊ななかに才情流るゝが如く、女流歌人として秀でた風調をもつてゐる。二三擧げてみる。

千くさ咲く秋はあれども一くさの二葉みつけし春のうれしき  
日なさへし葉がくれ庵の嬉しきは少しもりくる夕月のかげ  
つれづれさ寂しきものの嬉しきは花まつ宿のはるさめの頃

尼の一代の名吟として傳誦せられるものに、

宿かさぬ人のつらさをなさけにて臘月夜の花のしたふし

といふ一首があるが、これは尼の詠として決して傑れたものではない。むしろ趣向本位の當時の歌壇の潮流に従つたもので、かういふ歌には本當の俤が現はれてはゐない。やはり實際に尼の心の偲ばれるのは、前に擧げた三首のやうに、趣向を離れた實感の歌である。  
左になほ、佳作と思はるゝ歌を擧げてみよう。

いつの間にわき葉さすまでなりにけむ昨日の野への雪の小草  
 おりたちて朝菜あらへば賀茂川の岸のやなぎに鶯のなく  
 野の宮の春の手むけのしらゆふは櫛にまじるさくらなりけり  
 山ざくらちるはうけれど世の中のほだしはなるるこちこそすれ  
 身をよする尾花がすゑの秋風にゆられてなくか鈴蟲のこゑ  
 岡崎の里のれざめにきこゆなり北白川の山ほささぎす  
 白ぎくの枕にちかくかたる夜は夢もいくよの秋かへぬらむ  
 冬畑の大根のくきに霜さえて朝戸出さむし岡崎の里

## 二、萩之家歌集

萩之家歌集は、先師落合直文の歌集である。先生は文久元年陸前國本吉郡松岩村に生れ、父は仙臺藩御一家筆頭の重臣鮎貝太郎平盛房翁である。その祖先は羽州置賜郡長井莊鮎貝城の城主兵庫盛宗で、伊達家第九世政宗の世に歸從して、臣籍に列し、藩中でも重きをなした家柄であつたのである。而してこの重格の家に生ひ立つた先生は、十四歳の時に武州の國學者落合直亮翁に養はれた。

翁は最近府の調査によつて維新の際に國事に盡した功績を認められ、贈位された。先生は國學者としての教養を先づ翁に受けたのである。乃ち翁が教職にあつた伊勢の神宮教院に學び又堀秀成、植松有園に師事し、更に漢學を内藤聡叟、三島中洲について修めた。明治十五年東京帝國大學に古典科が創設せらるゝや、官費生として入學を許され、久米幹文等の教を受けて國文學界に立つに至つた。皇典講究所、國學院等に教鞭をとり、又第一高等學校の教授となつた。國語傳習所、大八洲學校等を設け、數種の教科書を編纂して、國文和歌普及のため大に努力した。又國語の大辭典「ことばの泉」及び「日本大文典」を著はし、國語學のためにも貢獻した。かくて明治三十六年十二月、四十三歳をもつて世を去つた、先生の遺された國文、國歌に就ての功績は、永久に忘らるゝ時はなし。「萩之家遺稿」「萩之家歌集」には先生が新國文及び所謂新派和歌創始者としての面目を語るものを收めてある。

先生の歌は清新にして才情をつくし、優美な點は一味新古今集に通ずる所がある。あくまでも氣品高く、あやしげな俗語のやうなものは決して用ゐてない。たとへば、

三日月をけふ見そめけり望の夜の月はいづこの里に眺めむ——松阪にやどりて——  
 松風の音ばかりだにさびしきを雨もふりきぬ小夜の中山  
 おのづから梢はなるる桐の葉のけさ目に見そて秋は來にけり



椿さく久能の御阪の七まがりまがりてくれれば雉子なくなり  
枯れのこる浮葉の上に蓮の實の飛ぶ音さむし冬や來ぬらむ

といふやうな風で、調子は高く心は清く、少しも俗氣といふものがない。その言葉の優美たぐひなき點は、新古今の長所だけを學んだやうであるが、その實、先生は、甚だ萬葉集を好んで、歌書を問ふ人があると、かならず萬葉集を讀むように勧められた。「創作苦心談」といふ書の編者が先生の談話を筆記した中にも、「余は甚だ萬葉集を好む。そは、その形の種々ありておもしろく、その想の自然にして、いふべからざる味あればである。實朝、眞淵などのそれに打込んだのも無理はない！我國の歌集中、我々の手本とすべきは、この集なることは、疑もなきことにて、決して余の私言ではない」と言つてゐる位である。これはまことに然あるべきことで、當時歌壇が題詠の舊習に慣れて、千篇一律に流れてゐた折柄、正に警鐘に價する言葉であるが、それでゐてなぜ先生の歌には萬葉の調子がないかといふに、これは先生が萬葉の精神を愛して、萬葉の言葉に捉はれなかつたからである。このことは同じ書中に「實朝をして、鎌倉時代の語を以て、萬葉の如き歌をよましめむか、眞淵をして徳川時代の語を以て、萬葉集の如き歌をよましめむか、いかに愉快であつたらう」と言はれてゐるのもわかるのである。

だから先生の歌には、如何なる場合の歌を讀んでも、難解の句といふものがない。みな平明にして一讀してその意のあるところを悟るやうに詠んである。平明にしてしかも俗に墮ちぬ言葉、それが、すつかり先生のものになつてゐて、先生の心のまゝに、その言葉が生動してゐる。これ先生の歌の特徴であつて、この特徴は先生の人格に根ざしてゐる。先生は前述の如く、仙臺に於いても格式の高い家に生れてゐるから、平常の言動からして下品な點が少しもなく、それが歌の上によく現はれてゐる。先生の歌を讀んで何人も好感を受ける所以である。この特徴は眞似ようと思つたところが眞似られるものでなく、先生独自の境地である。

しかしながら先生は、當時の歌壇が古歌の行き方にのみ泥んで、單調に陥つてゐたのを好まなかつた餘り、様々の新體を企てたので、中には奇を求めすぎて先生の本體から遠ざかつたと思はれるものがないでもない。即ち、

をさめ子が齒入れおきし手箱よりうつくしき蝶の二ついできぬ

蚊の唼おつる音をもきくばかり座禪の御堂夜は更けにけり

かの人の歌にのぼりし夕より戀しくなりぬあか星の影

洋服をつけて歌會に臨みしに秋夕さいふ題をえければ

唐ころも袂しあらば人なみにしぼらむものを秋の夕ぐれ

などがその例であるが、かうした作は此の集中に於て比較的尠ない。これを前に擧げた作と比較し

て見ると、その想といひ、その言葉といひ、誰にも一見區別がつくから、この集を通讀する妨げにはならないと思ふ。

又、先生は孝心ふかく、實父母は勿論のこと、養父母に對しても、真心のありたけを盡して仕へたから、それらの歌には誠まことの籠かこつた、人を動かすに足るものが非常に多い。殊に明治二十九年十二月、養父直亮翁が逝去された時の歌の如きは、心の奥から悲哀がほとばしるやうで、誰しも此の追つてくる真情に打たれずに居られない。

「こゝはものをのたまへ寐もやらで、われさもらへり御枕のへにかくもせむさもせむさ思へど父君ははや世にまさすあはれいかにせむ來む年はわが七十路のいはひなもせむさいひてしあはれ父はや年老いし父のこの世にましまさば起きても汲まむ今朝のわか水この春も岡のわか菜は萌えにけり摘みてささげむ父もまさぬに

この數首を見ても、先生の心には「養父に仕へる」といふ隔てたやうなところが微塵見えない。まことの父に對するよりもつと濃やかな情緒があふれ出てゐる。この誠こそこれから歌を始めようとする者の心得置いて然るべきところであつて、眞實人を動かす底の歌は、この誠を持つ者の心からでなくては、出て來ないのである。

尙、少しく先生の集中から、私の好む歌を擧げよう。

呼びにヤリし友より呼びにおこせけり雨はいづこもさびしかるらむ  
このままに永くねぶらば墓の上にならず植ゑよ萩の一むら  
萩寺の萩おもしろし露の身のおくつきどころここさだめむ  
小瓶をがをば机の上ののせたれどまだまだ長ししら藤の花  
清水汲むかよひ路のみをのこしおきてしげりはてたる庭の夏草  
朝月夜かすむ野守の垣根みちかげふみゆけば雉子なくなり  
萩さいふあいぬこさばをおこせつる友のかたより雁は來つらむ  
父君よ今朝はいかにさ手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり  
阿伽の水汲まむさすれば谷川に白くうつれりしら藤の花  
山雀の籠かけなれし軒の下に麻の新草もえいでにけり  
草も木もおなじものさはおもふまじ春の春雨秋の秋雨  
竹三もさ蘭ここのかふいはほ四つその巖めぐり清水ながれぬ  
野分して荒れたる宿の園生には惜しきばかりの月のかけかな

### 一三、竹の里歌全集

一八〇

正岡子規の歌集である、子規は明治の俳壇を革新したのみならず、次いで明治の歌壇をも覺醒せしめた功勞者の一人である。

子規は名を常規と云ひ、伊豫松山藩の馬廻加番準太の子で、歌の方では竹の里人と號した。はじめ今の第一高等學校の前々身大學豫備門に入り、第一高等中學校と改稱されてからこゝを卒業して帝國大學に學んだ。けれども二年にして退學し、それより一生を俳壇革新の爲に力を盡したのである。和歌の革新を企てたのも、多くその俳句の研究から悟つたところを基礎としたらしく、好んで萬葉風の歌を鼓吹した。だからその歌は萬葉の自然の姿と、俳句の單純の心とを備へたもので、たしかに一家の風格を持つてゐる。尤も、俳句の方は大に蕪村を稱揚したから、蕪村から芭蕉、芭蕉から實朝、實朝から萬葉と辿つて行けば、その素は一つであらうが、兩方の長所を學んで詠み出たところは、また別様の趣を具へてゐると言ひ得る。これは、

詩をつくる友一人来て青柳に燕飛ぶ晝をかきていににけり

歌をよみにつどひし人の歸る夜半を花を催す雨瀧の如し

詩人去れば歌人座にあり歌人去れば俳人來り永き日暮れぬ

古里の御寺見めぐる永き日の菜の花曇雨となりけり

の數首を見れば、おのづから萬葉の歌とは異なる味あじはひのあるのがわかるであらう。けれども一方にはまた、さながら萬葉の風調と思はるゝ歌も決して尠なくはない。即ち、

みすす刈る信濃の奥の白坂に雪はふれれど蕨もゆさふ

百花の千花を絲につらぬける藤の花房長く垂れたり

吾妹子が心をこめて結びにし藤波の花解かまくをしも

などがそれであるが、勿論この兩者の間に判然たる區別がある譯ではないのである。たゞ多少言葉の上に出て來る心持のちがひであつて、兩者の底にはおのづから彼自身の精神は一つになつて流れてゐる。

しかしながら彼はまた一方に於て、色々な試みをやつて、時々無理な言葉を造り出した歌もないではない。當時の知識階級新聞として有名であつた「日本」の四千號の祝に、

日刊新聞書く硯の石の中窪に眞窪になりて四千號に満つ

といふのがあつて、「日刊新聞」を「ヒブミ」と讀ませ、「四千號」を「よちひら」と讀ませるのであるが、これは甚だ苦しい言葉づかひである。又同じ一聯の中に、

大き硯小さ硯を打ちならべ日ぶみ書く人疾書き徐書く

といふのがあつて、これも「疾書き徐書く」は苦しい。が、その中にも彼の苦心した面目は、さながらに見える。

ところでいま一つ初心者が彼の歌を読んで注意しなければならぬ點は「單純化」と「平語」との區別を誤り承けることである。彼の歌が一見して平明單純なのは、對象の中から不必要なものを除いて、眞に胸に觸れて來たものだけを叙べるからで、これが寫生の「單純化」だ。ところが初心者が眞似ると、肝心の胸に觸れて來たものには心づかず、必要のないものだけを書き並べる。その結果は平語となつてしまふのである。

左に彼の歌集の中から、私の好むものを二三擧げてみよう。

病みふせるわが枕べに運びくる鉢の牡丹の花ゆれやます  
池の邊のさじきに垂るる藤の花見れば長けく折れば短し  
松の葉の細き葉毎に置く露の千露もゆらに玉もこぼれす  
朝ながめ夕ながめして我庭の菊の花咲くまでば久しも  
瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にさどかさりけり

次に讀むべきは

- ◎啄木歌集
- ◎御白遺稿
- ◎武山英子選集
- ◎伊藤左千夫歌集
- ◎長塚節歌集
- ◎木下利玄全歌集
- ◎切火・太虛集
- ◎相聞
- ◎晶子短歌全集
- ◎静夜・朝ぐもり
- ◎空穂歌集・鏡葉
- ◎雲鳥
- ◎桐の花・雲母集

- 石川啄木
- 田波御白
- 武山英子
- 伊藤左千夫
- 長塚節
- 木下利玄
- 島木赤彦
- 與謝野寛
- 與謝野晶子
- 尾上柴舟
- 窪田空穂
- 太田水穂
- 北原白秋

等であつて、何れも近く物故して特色のある歌を遺した人々の集であるが、現代諸家の集では